の運命都合能くまわり來り却つて王に取りては不幸の形勢となれり。新教黨に對してこれまで戰ひ居たりしアンジョウ侯とガイスとタヴネと其の外羅馬教の貴族等は勢力の敵に增加し來たるを見て恨み骨髓に徹したり。フィリップ二世はネザルランドを威嚇して居たりしが、またチャアルス九世に其の鉾先を向けて其反對軍に援助を與へ攻守同盟を組織したり。萬事好き都合にしてフィリップ二世は人民に金錢を散じチャアルスに對する紛擾を昂めさせんとせり。時に七月九日ジュアン・ド・アルブレット不意に死せり、多分毒殺ならんと云ふ疑ありし。八月十八日チャアルス結婚式擧行の日はノォトルダム宮殿の門に起りし騷動にて非常に妨げられ、ヒュギノットが意氣揚々として尠からず憍慢の風を裝ひし爲め人民は益〻憤りて諸ゆる寺院の敎壇は惡口罵詈の聲を以て充滿したり。

其の時カゼリンはマキャヴェリイの策を用ゐガイスをしてコリグニイを暗殺せしめたり、ヒュギノットは大に怒かりてガイスを殺してコリグニイの仇を雪がんとしたりしが王軍はガイス及びヒュギノット兩黨は公安を害する者として掩擊したり。コリグニイの暗殺せられし現狀は、八月二十二日の事なるが、ルウブルよりの歸路マウレヴルといふ者に狙擊されたるなり、此のマウレヴルはガイス侯より金錢を貰ひて暗殺者とは成りし者なり。此の企の最初の報チャアルス九世の耳に達せし時、九世はヘンリイの許に趨せ行いて言ふやう、此の困難の事情は卿の忍ばざるべからざることなるが、かゝる凌辱は全く己れ被れるものとして必らず仇を復すべきを誓ふと。

翌日までは九世はヘンリイに語りしが如き考を以て居たりしが、母后がアンジョウ侯、アングウレム侯、タバネスビレーグ元帥デ・レッ及びネエル公を率ゐて宮廷に入り來りガイス及びヒュギノット兩黨を一擊の下に壓伏するの協議を開きたり。タヴネの云ふやう、戰は到底避けると能はずとすれば廣野にて戰ふよりパリにて戰ふに如かずと。會議に列したる面々は幾人の者を殺さばよきか未だ頭數さへ決し居らざりき。ビレエグ等伊太利出身の者の云ふは皆屠殺すれば足れり、一の罪惡を造るも百の罪惡を犯すも同一なりと。其の時までチャアルスは欝々として未だ其の席を離れずして居たりしが、會議の人々がヘンリイを殺さんことを考へて居るを見て、ヘンリイを殺すならはフランスに居る諸ゆるヒュギノットを鏖殺せ

し後非難の王にかゝらぬ樣するこそ上策なりと思ひ定め其の事を述べたり。

チャアルスが前の如く變心せしことは羅馬及西班牙の朝廷に歡喜せられ敬神の決心なりとて狂せんばかりの感頌を彼に送れり。また彼等は羅馬教のために名譽ある成効なりとして喜んでフィリップ二世はチャアルスに手紙を與へて、神のためにすることは皆己れの利益なる旨を告げたり。而して戰の時は二世は何時にても兵士及軍資を供給することを約し、尙附加して己は卿の處に赴きて援助せん予の不在中アルヴ侯よく必要なる何事をも熱心處理すべしといひ、尙附加して此決心を何處までも續けて完全に異教徒の撲滅を遂げざれば止まずと云へりと。以上の如き亂暴者の類は如何にといふに、事實公道より起りしことにては無論なく、唯一個人の怨恨や武力の競爭やまた利益の願望などか動機となりしこと勿論なり。哲學者ラマスは競爭者のために殺され、アンガーにてアンジョウ侯は土地を收得せしも利益なく、またセント・バーソルミュウの虐殺にて自己一人を肥すこと能はず、必竟利己的盲者の寄合なりしかば其の分配は意外に少額なりき。

かゝる大罪は有益なる結果に了ることなし。プロテスタントは既に其の頭領を失ひ、初めの中は何事をもなす能はず、風來坊主となつて日を過せしが、かくてあるべきにあらねば、大に勢力挽回を企て、到る所の町邑より兵を集めて大に再擧を謀れり。王軍はサンセル及びラ・ロチェルを圍みてこれを攻擊したり。アンジョウ侯は將としてラ・ロチェルの市に行軍せしが、陷ること能はざりき。ナイム、モンタウバン、其の外數百の市に據るプロテスタントは勢力猖獗にして皆城門を閉して防戰し、またこれと同時にカゼリンは羅馬教徒中にもカルヰン教にあらぬ寬容主義の黨派が成立しつゝあることを發見せり。それのみならずチャアルス九世が殘酷なる行爲は最早厭忌し、今は却てこれを嫌惡するの心を生じ、幾分か慈愛の情勃興して母后、羅馬、及び西班牙の勢力より其の身を脫せんことを考へて居たり。九世は二月十三日アンジョウ侯に書を與へて曰ふ、願くば溫和に事を處理せられたし、尤も目的を損ぜざる限りに於て信切を盡せよ、兵力によりて勝利を獲んとすれば予の城邑は爲めに殘破せられ、臣家は乖離するのみにて何等の利得する所なしと。是に於てラ・ロチェルの平和を結びて改教黨に良心の自由を許せり。改教黨の各〻を破滅せんとて起されし戰は變じて彼等の勝利となりて局を結べり。

プロテスタントの敎敵は今や分離して咏方の利益たるべき形勢を現ぜり。セント・バアソルミュウの同盟は羅馬敎徒の分裂となり、また王弟アレンソン侯は一黨與を形成し、其の黨の主義を羅馬敎及びプロテスタント敎が目してプリューランツと呼べり、反王者は勿論大望を有する輩、或は野心ある人民、或は最近の新黨は成立の當初黨與尠く、また團結心鞏固ならざりしかば勢力弱かりしが、寛容主義發達の爲めに漸く勢を強むるに至れり、ヘンリイ四世の戰勝は全く此等に負ふ所多きに居れり。

一千五百七十四年に死せしチャアルス九世の後繼者は王弟のヘンリイ三世なりし、三世は以前暫時ポオトランド王に選ばれ居たる者なり。王の才知衆に卓越せりと雖も、また惡德も伴はれしかば、當時代の諸人の嫌惡する所となれり、彼は自己の愛するマキャエリイの學說、及びカゼリン政畧即ち二黨をして互に爭はしめ、自ら兩黨を衰滅せしむる、必竟敵を以て敵を滅ぼすの政畧を實行せんとせりき。

プリュウデント黨プロテスタントと結び、アレンソンのフランシスはナヴァールのヘンリイと結合せり、ヘンリイはセント・バアソルミュウ虐殺の際幽囚の身となりしが、今は遁れて自由の身となれり。戰爭ありしが、軍畧拙なるによりウエル・スカアドと異名を取れるガイス侯の子勝利を得たり、彼は改敎徒援助のために來りし日耳曼兵を討ちてドルマンの大勝利を得し人なり。王はビュウリュウ條約によりて此の第五內亂の終を告げ、コンデ公にピカルディー政府を與へたり。

ペロンネの太守ジャックス・ド・ハメリスは此の特許に對して抗議をし、宗敎保護の爲めに結合したる羅馬敎地方信徒五千人以上と團結したり。此の例に倣ひて暫時に各州各、同盟を形成しぬ。ガイス公ヘンリイは巧みに此の支離分裂せる各同盟を自己の手に握り、これを優勢なる一團隊に組織し、自ら其の頭領と成りたり。これより佛蘭西に二王を見ることゝなれり。

是に於てヘンリイ三世はプロイスに大官會議を開きしが、ゼスイト敎の僧侶より成れる同盟ありて、集會の投票權は勿論あらゆる會議に關する全權を掌握して王の自由にならざりしのみならず、王はビュウエーの布告に遡つて處理せざるべからざるに至れり。

金の缺乏によりてプロテスタントはイソア・ラチャリテ及びブロオグを喪へり。

ヘンリイは大官會議の監視を免ぬかれてベルゲラックに平和の新布告を發布することを得、此の布告によりてプロテスタントは前の布告よりも良心の自由に關して好都合なる、また甚だ擴大なる權利を得たり、そは八の地方會に特別の裁判官を有し、九個所の土地を開放し、また守兵を置くことを許可せられたることなれども、これは羅馬教に取つてむしろ勢力を殖したるやの觀あり、如何となれば羅馬教徒幷にプロテスタントが從來組成したりし各〻の同盟を廢止することゝなりしよりプロデスタントが鞏固なる團結をも今廢止せざるを得ざるより、今後再び團結をすることの必要ある場合には中々困難なるに反し、羅馬教にては比較的團結の容易なるものあれば、羅馬教の爲めに勢力の加はりしことゝなる所以なり(一千五百七十七年)。

ヘンリイ三世は王子なかりき。王弟アレンソン侯は一千五百八十四年死去してプロテスタントの頭領ナヴアルのヘンリイ王位の豫備相續者となれり。羅馬教徒は佛蘭西國民中の大部を占むるを以て王としてカルヂン教なるナヴアルのヘンリイを戴くことは各〻の危害となることとし、同盟してヘンリイに對抗せしが、其の勢力の猖獗なることは想像以上にありき。

ガイス侯ヘンリイは今こそ一大打擊を加へてプロテスタントの頭領ナヴアルのヘンリイを一擊の下に顚覆するの時至れるものなりとし、一刻も猶豫することなくフィリップ二世とジョインヴルの條約を締結し、それによりて異教徒は勿論分派の根を絶ち佛蘭西王位を窺ふ異教徒の貴族等を驅逐し、且ボルボンのカルディナル・チャアルスをバロイス家の相續者と確定することを約定したり。かくて新系統を汎く各州に布告せしが、新系統とは即ちフィリップとガイスの關係を定め、かくしてヴロイス承系の權利よりも尙勝れたる權利を確立したるものなり。法王シキスタス五世はヘンリイ及びコンデの兩ボルボン家は佛蘭西王位に陞るの資格なく、且其の血統にあらざれば王位を要求するの權力なきものなることを布告したり。假令良心の上に鐵火の力を加へざるものにせよ、無法なる此の處置に對し且王位の獨立に危害を與へたる法王の諭告に對しては國會は反對もし、また忠告をも試みたれど無効に終りたり。

そこで三ヘンリイの戰は始まれり、三ヘンリイとは即ちナヴアル、佛蘭西及びガイスのそれなり(一千五百八十六年—八十九年)。ヒュギノットは激戰により單獨の大勝を得たり。

王軍は殆どカウトラスにて全敗し、王の寵臣ジュユウス一千五百八十七年遂に戰場の露と消えたり。然れども北部に於て佛蘭西のプロテスタントを援けんとてゼルマン新教徒の貴族等が率うる軍隊はギモリ及びアウニュウに於てガイス侯の爲めに敗られたり。ヘンリイ三世は再び戰利あらず、第一戰には寵臣を喪ひ、また第二戰にて戰爭者の爲めに勝利を奪はれたれば憤慨惜く能はず、ガイス侯に黨與し三世に對して隱謀を企てたるパリの市民を威嚇したりしかど、其の効なく、却つて騷擾を惹起するの基となり、市は諸處に防柵を建て以て亂民を防ぎたり。三世の瑞西兵數千は包圍を被り全く戰鬪力を失ふに至り、王は困難を排し身を以て漸くパリ城外に脱することを得たり。ガイス侯凱旋の餘勇を振ひ隊伍を整へ整然としてパリに入れり、時に一千五百八十八年三月なり、こはフィリップ二世の大アルマダ艦隊西班牙の海岸を出港したるの時に當たれり。かゝる形勢なればフィリップ二世及び羅馬教には萬事成功の徵候を呈し、嬉々たる勝利目前に横はりたり。然るに七月に於て英國の艦隊と對抗しアルマダ艦隊は砲火を中止するの敗況に陷り、これに加ふるに颶風の襲ふ所となり全艦隊殆ど殄滅するに至れり。ヘンリイ三世再び時めき來れり。三世は力めて辭を卑ふし且溫和の態度を裝ひ、ガイス侯を副將となしヒュギノットに對し暴虐の戰を起さんことを約し、且ブロイスに大官會議を召集したり。三世はかゝる手段を施し、巧みにガイス侯に害心なきを示し、これを市に誘致し人をしてこれを暗殺せしめたり、時に十二月二十三日なり。翌日ロウレンのカルディナルをも斷首したり。

抑ゝガイスは其の同盟の力を得て自家の勢力を扶殖したりしも、其の同盟はガイスより得る所何物もなかりき。暗殺の報傳はるやパリ市民は皆起ちてガイス侯の弟マエンネ侯を國の副將となしたり、其の他の大市また起りて戰を宣せり、茲に至り三世はナヴアル王の軍に其の身を投じて援助を乞へり。ナヴアル王は喜んでこれを迎へ堅く同盟を結合したり。二王は四万人の兵を率ゐてパリを圍めり、然れどもヘンリイ三世はシヤキス・クレメントといへる托鉢僧に刺されて重傷を負ひ遂に起つこと能はざるに至れり（一千五百八十九年）。

ナヴアル王は直ちに立つて佛王たることを宣言したれども、羅馬教徒新教徒の何れも皆之を肯首するものなかりき。王は已むを得ずパリの包圍を解き急ぎディ

ープに赴きエリザベスの援軍と相會し、精鋭の兵を率ゐてアアキスに戰ひアイヴリイの大捷を獲て聲譽を恢復したりき、時に一千五百九十年なり。パリは再度王の包圍を蒙り將に陷落の悲運に會せんとしたりしが、フィリップ二世の優勢なる干渉によりて漸く免ることを得たり。當時二世の逆境は如何、一方西班牙の海岸に游弋せる英國の艦隊はカルヂス及びリスボンを嚇し或は亞米利加より歸來する商船を横奪せんとするあり、他方にはネザルランドと兵を構へナッサウのマウリス能く兵を用ゐ二世の勇を以てするも之を破る能はず、兵亂久しく結ぼれて解けざるあり、加之一千五百九十年ツルウン地方の諸州を失ふに至りたり、かゝる困憊の形勢あるも意とせず、二世は其の將アレキサンダー・ファーネスに命じ急ぎパリ市人救護に赴かしめたり、八月四日ファーネスはヴレシンネスを出立して二十三日モオに到着したりしに、四ヶ月の久しき包圍も漸く解くるに至りしは幸なりしといふべく、若し二日間晩かりせばパリの市民は其の城門を開くの已むを得ざるに至りしならん。ヘンリイは進んでセレスの平野に至り西班牙軍と對戰したり。パルマ侯は戰略に富み、巧に佛蘭西軍を支へ四日の間敵をして戰に忙殺せしめ居たりしが、五日目に至り朝來深霧摸糊として平野を蔽ひ咫呎を辨ぜざるに乘じメーン河にあるラグニイを襲ひ、此處に艇艇を作り兵士及び糧食を搭載してパリ城内に送らんとしたりかど、敵の敗る所となり焦思の計畫も遂に水泡に歸したり。

西班牙及び伊太利の羅馬教徒は同盟艇を扶護したりしも、新教徒はヘンリイ四世に加擔して英兵七千、和蘭兵二千及びテュウレン子爵の率うる日耳曼兵一万二千來り會し、佛國は二宗教の戰場となれり。

一千五百九十一年此の大軍初めて相對峙して戰を交へたりしが未だ以て雌雄を決する迄には至らざりし。此の役に於てヘンリイは四月十九日チャアターを取り、十一月ルウエンを略してノルマンディ及びセン河の下部流域を掌握したり。ファーネス再び兵を督してヘンリイを破りしが、カウデバックの役に重傷を蒙り瘡疵未だ癒ざるに乘じヘンリイはキヴィトーに之を破り敵兵三千を殺し、セン河と海岸の間に在る窮地に敵を追蹤したり。パルマ侯は此の窮境を脱し、河を渡りてネザルランドに向つて進行中病を以て斃れたりしかばヘンリイは強敵を掃ひ戰場唯一の主となれり。

此の時に當り同盟躰は分離して早晩敵對の狀態を顯すに至らんとしたり、十六人黨(パリ同盟の牛耳を握りたるものにして首府の十六區より撰出せられたる頭領なり)はアイヴリの敗戰は羅馬教徒の優柔不斷の然らしめたるものとなし、國會の統領ブリッソンを絞殺したり(一千五百九十一年十一月)。ガイス侯メーエン之を聞き大に驚き十六人黨の四人を捉へて斬に處し、集會を解散して市の管理權を「プルユウデント」派に委任したり(一千五百九十二年二月)。此の措置によりて市民の騷亂を鎮壓し亦十六人黨の勢力を挫きたりしが、其の後西班牙人の指嗾により秘密の黨派起りメーエンの計畫を阻礙したり。久しくパリは主權を失ひ人民適歸する所を知らず、一日も早く平和の日を見んと一般の希望なりしを以てメーエンは大官會議を招集したり。一千五百九十三年一月代表者はパリに集會したり。集會の大競爭者はガイス侯メーエン及びフィリップ二世にして何れも王權を爭へり。二世は其の女イザベラの夫ラに佛國の主權を附與すべきことを揚言したりしが列席の一員はイザベラの夫たるべきものは何人なるかを尋問したり、人々皆ガイス侯なるべしと期し居たりしに、西班牙の大使は墺西太利の大公爵アアネストなりと答へしかば、列席の諸員皆意外の感に打たれ物議紛々たり。大公は頻りに其の誤言なることを主張し、公主の夫はガイス侯なるべきことを以てしたれども一言發すれは駟馬も追ひ難く、國會は西班牙王の口實を斥けて用ひず、メーエンをして異宗教の外國人に王權を委ねること能はざる旨を發布せしめたり。

戰亂三十年の久しきに渉り羅馬教徒も新教徒も一樣に勢力大に衰へ、フィリップ二世の富と兵力を以て扶護せられたる同盟もカウトラス、アルキス及びアイヴリイ戰捷の名譽を擔ひしナヴアル王も共に市民の歡迎を博すること能はざりき。佛國は將に瓦解せんとするの危機に際したるの當時ナヴアル王の改宗こそ最も必要のこととなれり。法王シキスタス五世も亦ナヴアル王の改宗は歐羅巴及び佛蘭西を危急より救ふの唯一方法たることを揚言するに至れり。

デュアン・ド・アルブレットの子にしてコリグニイの弟子たるナヴアル王ヘンリイは其の主權者たるヒュギノットの徒と分離して改宗の擧に出づること甚だ忍びざる所なりしならんも、徒黨の主要なる人々の勸告辭し難く、遂に七月二十五日セントデニスに於いてプロテスタント教を棄つるに至りたり。ヘンリイ已に主權を握る

に至りたれは同盟の成立は最早其の理由なきも未だ餘黨消へず、王に對して刄を向けしも、ベアネスに大敗し王軍大捷を獲たり。一千五百九十四年三月十二日ブリサックはパリ城門を開いて王に降れり。ガイス侯勢衰へ一千五百九十六年の初に當り降服の意を表しぬ。始め一千五百九十五年西班牙と小戰を交へ、アミエンの回復(一千五百九十七年)はヴァーヴィンの平和を起したり。二王國の境界はカトー・カムブレシス條約に準據し再び樹立するに至れり(一千五百九十八年五月)。之より先三週間以前にヘンリイはナントの布告を發して國内の平和を確固になしたり、(一千五百九十八年四月)此の布告はベルゲナック布告を基礎とし、到る所プロテスタント徒に信仰の自由を許したり。

第十六章　宗教戰爭の結果

西班牙の衰頽。

フィリップ二世はヴァアヴィンの條約及びナントの布告ありてより四ヶ月にして死せしが、二世の西方歐羅巴に對する大望は一も其の効果を收むること能はざりしのみならず西班牙に於ける其の世襲の領土も亦之を危ふするに至れり、ネザルランドの大半を失ひ佛國の主權も之を得ること能はず、今や西班牙は單に血なき膨大の一帝國に過ぎざるものとなりぬ。

前章に於て宗教戰爭を述ふるには敘事の統一に心を用ひたれば隨て之れに附屬する挿說を省略するの已むを得ざる所ありしが、本章に至り戰爭の結果を完結し、尙西班牙の取りし無謀の大望は如何に其の終局を告げしかを說かんとす、歷史に於ける道德上の敎訓は之れに過ぐるものあらざるなり。

逐次述べんとする傍說はフィリップ二世の葡萄牙征服、地中海上にオットマンの侵略を支へたること、及び丁抹を領し北海及びバルチック海上の覇權を握らんとする計謀なりとす。

葡王ドン・セバスチアン亞非利加遠征中タンヂャー灣の南アルカザルキヴァーに於て死せしかば、王の伯父カルディナル・ドン・ヘンリイ六十七歲の高齡を以て王位に上りしが幾日もなくして死し、弟の私生子ドン・アントニオ王位を繼承せんことを主張したり、然れともフィリップ二世已に王權を要求して多くの貴族を買收し、又アルヴァ侯を兵士三千に將として葡萄牙に遣はし、ドン・アントニオをアルカンタラに破りアントニオは佛蘭西に逃れり。二ヶ月にして王國を擧げて二世の有に歸しトーマ

ルのコルテズ(Cortes)は二世を國王に承認すると同時に葡國の裁判所及び首府は現存の儘として凡ての習慣を保ち、獨立の王國となすべき條件を附帶したり(一千五百八十年九月二日)。かくして半島全土二世の有となりしはいふまでもなく、東印度及び葡國の諸植民地も悉く王の支配する所となるに至れり。

西班牙の首府マドリッドは河川の利なく港灣の便なく一市として見るべき資格なし、されば半島の大河に臨めるリスボンに其の都を遷し中央政府を此に設立したらんには西班牙將來の隆盛は如何なりしならん、然るに二世及び其の人民の頑迷にして偏見なる此に注意することなく、空しく國運の伸張を逸せしめたるのみならず二世は之を鎮撫するの策を取らず、唯之を呵責して民衆の怨恨を招くに至りしは是非もなき次第なり。二世は上下の怨聲を意とせず、二千の僧侶を斬に處し殘虐の血を瀕きたり、或は官職を賣り或は富有の寺領を西班牙人に與へ、前王の領所は之を沒收し、貴族を官位より斥けて其の領邑に閉居せしめたり。十八年の治世間葡人にして官職にあるもの僅に三人他は悉く西班牙人なりしといふ。

二世の暴戾に加ふるに諸大臣等漸次貪慾の手を擴げ亞米利加商業の專權を横領し西班牙人に賦課する所の諸稅を葡人にも亦負擔せしめしのみならず、諸種の勞役に服せしめたり、然れども兵役のみには用ひざりし、そは彼等の反心を慮りてなり、されば西班牙人は殆んと軍隊の勤に服し、英國及び和蘭の攻擊に對し東西奔走し心身を疲勞するに至らしめたり。二世の死後尙葡萄牙は西班牙の有にありしも暴戾に堪へ忍びたる國民の感情は如何で久しく靜平にあり得べき、機會の乘ずべきあらば常に爆發せんとするの形勢を呈したり。此の爆發は遂に一千六百四十年其の萠芽を現したり。

フィリップ二世已に葡萄牙を併呑し、今や半島統一の大問題に解決を告ぐるの好機に會せるも、施政其の道を誤り、人心日に背離し、加ふるに葡領殖民地防禦のためカスチィル人の戰場に斃るゝもの多く、人口大に減少するに至り、和蘭人をして擅に海上の覇權を掌握せしむるの端を啓きたり。

地中海のネエプルス、シシリイ、サルヂニア及びバレアリック諸島は當時西班牙の有する所にしてマルタの武士領は二世の統御下にあり、何れも海上の要害に位し二世の勇あらずとも海上の權利を握り、歐羅巴通商の保護者を以て任ずること容

易の業に屬ししならん、然るに一千五百五十八年ソレエマン一世はセント・クェンチンの役後幾何もなく艦隊を送りて伊太利の海岸及びバレアリック諸島を掠奪したり。之より先六年アルゲリアに在るオットマン人はマルタ武士領のトリポリを略取したるあり、またオットマン海軍總督ドラゴーは毎年海賊船を出して西班牙海岸を掠略せり。二世震怒し、一千五百五十八年海陸の大軍を率ゐてオオランより出發して遠征の途に上れり、然れども遂に戰利あらずして海陸の兵士を失ふこと極めて多かりき。翌年再ひ遠征の師を起し、戰艦二百隻、海兵一万五千より成れる艦隊はトリポリに進航中颶風に逢ひ其の大半を失ひて殘艦漸く歸國することを得たり。一千五百六十三年ネエプルス艦隊また暴風の爲に全滅し、其の後二年マルタ島はソレエマン一世の精兵四万の大軍に包圍せられたり。一世は即位の始より夙に基督教國に對して獲る所ありしが、今や其の治世の終りに當り一舉して大功業を收めんと欲し、攻撃激烈なりしも、勇將ラ・ヴァレッタ能く防き四ヶ月の久しきに亘るも終に陷らざりき。マルタ島にしてオットマン人の手に歸せんか地中海は遂に歐羅巴の有にあらざるべし。ソレエマンはマルタを奪ふ能はず、一千五百七十年

ヴェニスよりサイプラスを、西班牙よりチユニスを奪ひて其の恐恨を霽したり。

是に於て基督教國大に震動し、ヴェニス人、法王及び西班牙王の間に一大同盟を組成し、三百餘の戰艦を艤裝して海陸の兵士八万を搭載し、司令官ドン・ジュアン之を率ゐオットマン征伐の途に上れり。レバント灣にオットマン艦隊と會し激戰數時に至り遂に敵艦を破り、三万のオットマン人を殺し或は捕へ、大艦百七十艘を捕獲し、八十艘を擊沈し、漸く殘餘の四十艘遁逃するを見たり。此の大捷により異教徒の羈絆を脱して自由を回復したる基督教民は實に三万人なりしといへり。

法王パイアス五世戰捷の報を得たるとき「神は偉人を遣はして世を救ひ賜へり偉人の名ジュアンを忘るべからず」の語を發して感喜したり、法王已に然り、教民また歡喜し就中希臘全土はオットマンの管理を脱せんとして大に動搖し、コンスタンチノオプルまた動き、ためにサルタンを驚かせり。かゝる形勢に乘じてオットマンを攻撃したらんには永久歐洲の危害を除去し得べかりしに、二世の明こゝに至らずジュアンの名聲を忌みアルバニア及びマセドニアの王たることを容さず、單に目前の利害を慮り百年の大計を逸するも覺らず、赫々たる大勝も須臾にして失ふに至

らしめぬ。

後幾何もなくサルタン、セリム戰艦に百五十艘を率ゐてヴニエスを襲ひて破れり。一千七百七十八年フィリップ二世マウド三世と會見して休戰條約を締結し、爾後治世の間再び戰役を見ることなかりしも、トリポリ、チユニス及びアルヂァースはオットマン人の有に歸し、反服常なく、貪婪飽くことを知らざるムーア人及びアラビア人を制御して能く鎮撫したり。掠略隊を編成し互に力を分つてシシリイ、伊太利及び西班牙の海岸を劫略したり、歐洲の商業國は掠略隊に稅金を出し漸く通商上の危害を免ることを得たるは實に屈辱の極といふべし。フィリップ二世は己の力を一所に集注することなく、漫然多方面に武力を殺き、終に宿日の大望も水泡に歸するに至りたりしは惜むべし。

フィリップ二世の瑞典及び丁抹に於ける商業も葡萄牙と同樣の結果を生じたるに過ぎざりき。先王チャアルス五世は丁抹のクリスチアン二世を納れて義弟とし、また同盟を結びて北方サキソン及びヘシアンの新敎徒防備に援助を與へたるのみならず、丁抹を五世の配下に屬せしめんことをクリスチアン二世より申込みたるも五世は自ら大に謙讓し、若し王儲なきときは墺西太利家出でて北方三州の主たるべきことを答へたりき。

フィリップ二世も亦此の例に倣ひたりしも、日耳曼は當時二世の有にあらざれば先王と異なり多大の資を費すの已むを得ざるものあり。一千五百六十四年王はガスタヴァス・ヴァサの後葉エリック十四世に與ふるに保護金を以てし丁抹王フレデリック二世に對して戰を起さしめたり、王は私にフレデリックを仆して馬羅敎徒たる同族のロウレン侯を王にする所あらんとしたり。計策無効に終りエリック十四世廢されれ弟ジョン(カソリック・カゼリン・ジャグロンの夫)三世位に登りしかばフィリップ二世は兵を送りて之を責め且つ新王に迫りて人民を悉く羅馬敎徒とし法王に使節を送りて恭順の意を表し、ルウサーの著書を讀むことを禁じ、人民は皆ゼスイト敎徒となり國に有する敎壇を擧げてゼスイト敎會に交付すべきことを以てしたり。かく一方には宗敎上の利害を生じまた他方には政事上の計策として現れたり。フィリップ二世は瑞典及びポオランドの二王と同盟を組成し、丁抹の分割を議定し、サウンド・ジイランド(コオペエヘーゲンを抱括す)、ファイオニア及びジャットランドを以

て西班牙の亨有地となしたり。然るにカゼリン・ジャゲロン（一千五百八十三年）の死後羅馬教徒の勢力大に衰へ、ゼスイト教徒は國外に放追せられバルチック海上に於けるフィリップ二世の計畫は悉く水泡に歸するに至りたりき。

此の時に當りフィリップ二世も父王チャアルスの如く王位を退き寺院に隱遁して功業の衰頽を蔽ひたりしならんには半生の偉勳久しく後世に光輝を放つことを得べかりしならんも、さはなさで先見の明なく遂に失望の死を致せしは惜みても猶餘ありといふべし。それチャアルス五世の戰ふや必ず之れに伴ふ正當の理由を認めざるなく、かの伊太利に於ける佛國の權勢を打破したるが如きは、伊太利は勿論佛蘭西に取りても危害の憂ありしことは何人も肯首する所なればなり。また能くオットマンの侵略を防阻し且つ當時支離滅裂の狀態に存したる日耳曼をして國内の統一を圖り、平和の曙光を與へしは五世の功業中特筆すべきものなり、その兵馬の裡に往來するや兵士の掠奪を抑制することなくまた苛酷の處置ありしと雖も彼の胸算は常に大局に在り、未だ以て自己の利害に拘束せられたるものあるを聞かず、且つ商工業發達に大障害を與へたるも、一旦希望の逸したるを自覺し到底回復の機なきを知るや猥りに人民を苦しむるを好まず泰然として王冠を棄て寺院に後半世を消費し過去の罪惡を悔ひ未來の祝福を祈るが如きに至りては當に帝王の器ありといふべし。之に反してフィリップ二世は單に猛進の勇氣のみに驅られ頑然として王位を固守して勢力の脚下に墜落したるを知らず、王として死したりしと雖も單に虛名に過ぎざるものといふべし。

チャアルス五世は西班牙、伊太利、日耳曼帝國及びネザルランド各州に均一の賦役を課し、決して彼の企業に一地方の民衆のみを苦めざりき。フィリップ二世は然らず、殆んど西班牙の人民を驅りたるのみならず其の全力と自由の精神とを奪ひ唯二世の大望に全國を瀕死の境に陷らしめたるのみ。

二世の世までアラゴンは數個の特權を保留し居たりしもアントニオ・ペレズの審問後之を奪ひたれば全半島を通じてバスク地方のみfuerosを有するに過ぎざりき。

三世は異教徒を目して單に上帝の破教者なりとのみなさずまた己に對する反逆者なりと見做し、異教徒糺問所の裁判を勵行し、異教の種子は殆除せざれば已まず

じと決心したりき。是に於て二世は先づ宗教の統一を圖らんがため遠き昔よりグラナダの王國を建てたるムーア人を虐待したりしが遂に叛亂の端を啓けり。ムーア人はフェルヂナンド・ゼ・カソリックの時信仰上の迫害を蒙り已むを得ずグラナダ條約を破棄し居たりしを、一千五百六十八年二世は彼等に迫りて姓名を變じ傳來の言語及び服裝を改めしめたるのみならず、法官の許可なくして其の居住を移し又武器を貯へざることは勿論杖端に金屬すらも取付くることを嚴禁したり。即日人民蜂起して叛逆の旗を擧げ、山また山に炬火を焚き、烽火を各所に擧げ以て獨立の信號をなしたり。老若男女を問はず悉く武裝してアルパジャラスの谿間に防堤を築きて死守したり。此の時に當りチュニス及びアルヂャアスの同胞來援したらんには抵抗久しきに耐へ得べかりしも、サルタン、セリムの救助なく孤獨の悲境にあるに際し墺西太利の豪將ドン・ジュアン西班牙の精兵を提げて之れを破り、ムーアは空しく恨を呑んで降服したりき。二世はムーア人を擧げてカスチイルに輸送し十歳以上の男女を悉く奴隷となしたり（一千五百六十九年―七十年）。

西班牙政府は從來內外の計策に顯著なる活動をなしたりしも異教徒平定の師連年起り、ために國家の富强に心を須ゆるの暇なく國事日に衰頽に赴き商工業は猶太人の追放且つムーア人の叛亂によりて大に衰へ、加之政府の專賣權を採りしにより益〻發達を阻礙したり。從來亞米利加に輸入する貨物は悉く西班牙のものならざるはなき狀況なりしが今は漸く其の十分の一となり、他は皆密輸入品のみなりき。以前セヴィールに於ける絹布毛織の工場に任用したる織機の數は千を以て數へられしも是れ又二三百に減じたりき。戰亂絕ゆる間なく人民堵に安んずる能はず隨て農作に力を用ゆるものなく、害蟲は田畝に滿ち耕作物は荒敗したりき。國民は兵亂に斃れ或は植民地に移住し國內の人口大に減少し、また僧侶の數非常に增加し、二世の世殆んど百萬の多きに達したりといへり。

人民或は海外に出でゝ富を得んとするものあり或は兵士の群に入りて功名を博せんとするものあり或は僧侶となりて無事平穩の日を送らんとするものありて國の富强を慮るものなく、且つ國民の勞働力は全く中絕の形勢となり、一國の需要すら產出すること能はず、小となく大となく悉く隣國の供給を仰ぐの貧弱となり、英國艦隊の襲擊を逃れて辛くもカディズに到着したる亞米利加歸來船も其の搭

載したる金塊は國の資力とならずして直ちに隣國に流出するに至れり。兩印度の主となり且つ世界富源の領主たる西班牙王は恰も仕拂停止したる無資力の一商人の境遇に瀕し、死後負債の多きこと實に二千萬弗の巨額に達したりと。西班牙の朝野を擧げて眞正の富は金貨にあらで之を出すの勞力にあることを知らざりしは誠に遺憾なりしといふべし。

一千五百九十八年フィリップ二世は激烈なる肺勞を病みて崩殂しき。在位久しきに亘り且つ一日も靜平なき活動は當に西班牙に偉大の功蹟を遺すに餘りあるべきに、唯國民の心理に專制の勢力を印畫したるに過ぎざりき。前項述ぶるが如く、二世は西班牙に遺すに血なき形骸を以てしたり。專制政治の因習久しく國民の心に染浸し、十八世紀に至り猶プロテスタントの聖書を讀みしとて斷首の刑に問はれたる人々の中に世の尊敬を受けたるものありしといへり。

英吉利及び和蘭の隆盛。

もフィリップ二世の威嚇及び羅馬教徒の陰謀は猶國内の動搖を招きたり。女王の措置は大に人心に滿足を與へたるために愛國の士氣を勃興し、アングリカン教派は其の勢力を扶植したり、かく英國は内に英氣振興し、外敵の凌駕を防沮し且つ戰捷を獲たるにより、國民は勿論歐洲の輿論は英國の隆盛に危惧を抱きたるに至りたれば政權の歸一を圖り内外の人心を收攬するの必要起り、王朝の權利は茲に鞏固となり其の權力及び施政の狀態を目して當時の史家は恰も東洋專制國の治世と同樣なりといへるに至るまで絶對權を支持したり。エリザベスは國内の羅馬教徒は勿論嚴肅教徒或は獨立派を苦しめ、監督教會の教令を容れず、宗教裁判の權利を認めず、且つ信條に關する諸種の祭典を禁じたり。之を要するに信仰の自由を檢束する慊惡すべき法令を發布したり、蓋し山來王者の口實として陰に己の非望を蔽はんがためには皆以て國家必要の政策なりとせり。虐待四十年の久しきに亘りたりと雖も教徒は日に月に其の數を增加し、又教會の輿望も大に隆盛となり却て禁令に反抗するの狀況を表し來り、將に革命の萠芽を顯さんとしたり。

かく宗教上の暴戾はまた以て政事上專制の具となり、羅馬教徒の攻擊に關してはアングリカン及び嚴肅教徒同一の步調を取り、法律を犯ししも之を意とせず王權の濫用を生ずるの果を與へたり。スタア、チェムバーの如きは專横最も甚しく、陪

審官にしてチェムバーの意思に反し被告人に解除の宣告を與へたらんには事理を審かにせず直ちに其の陪審官に課するに多大の罰金を以てし或は無期の入牢に附することありたり。かくて英吉利人に對して唯一の權利保護者たる陪審官の權利施行力は當時有名無實の狀態にあり。此の他樞密院は專擅に人を罪して之を禁錮し、國務大臣は猥りに軍律を弄して些末の罪科を裁判したり。

かく陪審官の權利は壓塞せられたりしと雖も國會は猶存立し居たり、然れともエリザベスは之に自由の權を與へず、加ふるに政治に隻言だも口を入るゝことを撿束したり。一千五百八十一年國會が國内に宗教自由崇拜の特許を容許したることの如きはエリザベスの嚇怒に觸れ、全院謝罪したることあり。上下兩院を通じて王の意息を窺はず自由に發言するものは牢屋に投ぜられたり。專制實に其の極に達し人民の自由は殆んど死せるの國情にありしと雖もエリザベスは夙に心を國運の發達に注ぎ國に命ずるに勤儉力行の美風を奬勵して人民の財囊を肥すに吸々として國政を見たり。之を以て當時國家の富强は大に顯表すべきものありたり。

加之エリザベス朝にはセエキスピア、ベエコン等の文豪あり、政治家としてはバアレーあり、航海者としてはドレーク、ハウキンス、フロビッシャー、ラレー及びデヴィスの輩出したるありて、後世のもの此等偉人の行蹟を想起する毎にエリザベスの盛期を追慕し、同時に當時の國民自由の權利を失ふたる事實を忘却するに至れるものあり。ドレークは航海の中途マゼランの死により艦隊の司令官となりて世界週回者の先導者となり、且つ始めてケエプ、ホオンを發見したるものなり、彼名譽の航海を了へ英國に歸るや、エリザベスは親ら其の船に幸じて「ナイト」の稱を與へたり。ハウキンスはドレークの親戚にして奴隷賣買を發達せしめたる有名の人なり。フロビッシャアはセバスチアン・カボットに亞ぎ西北の通路を索めて支那に達せんとしたる有名なる航海者なり、此の通路は實に爾後三百年の間幾多の盡力と苦心とによりて漸く發見せられたる所なりといふ。デヴィス海峽はデヴィスの發見する所なり。ニユウフォンドランドの植民地はギルバアトなり。ラレーは北亞米利加に地を有し清女王のためにヴァジニアと稱し、英國に輸入したる物產中最も著名なるものはかのポテトウ(馬鈴薯)なりとす。アイルランドの櫻樹はラレーの始め

て植付けたるものにして英國に喫烟の習慣を導きしは、ヴァジニア植民地より渡來せしものなり。

エリザベス治世中工業盛に勃興し、フレミング人は西班牙の羈絆を脱して無數の移民を送りて、英國各部に居住し、殊にランカシァーの如きは其の甚しきものにして此處に永住の基を樹て人口次第に繁殖し、各人皆英國のために職業を勵みたれば、工業中羊毛業長足の進歩を顯したり。以前フレミング人はロンドンに假店を營み陶器及び刷毛の類を販賣したるに過ぎざりしが、今は大商店を起し大倉庫を有し、世界物産の集散所となるに至りたり。一千五百七十一年一月廿五日エリザベスは親ら銀行家トオマス・グレッシァムの創置したる公立ロンドン交換所の長となり、大に商業機關の發達を奬勵したり、商業保障の組織之より始まる。

賢明なるエリザベスも亦晩年に至りては不幸を見るに至りたり。女王はエセックス伯を寵愛し之をリイスター伯となしたるが、伯は寵を恃みて暴慢不遜日に加り、遂に女王の嫌惡する所となりて、憐の死を遂げたり。そは伯の驕慢極に達し、自ら謂らく己の權勢を以て能く政府の大臣を斥け得べしと信じ、一千六百〇一年二月八日餘黨三百人を率ゐ自ら劍を持しロンドンの街上に現れ、市民を招きて己の手に至らしめんとしたりしが之に應ずるものなかりき。伯は捕はれて死刑の宣告を受けたるも哀願することなく益〻狂暴したりしを以て斬に處せられたり。一千六百〇三年四月三日女王崩殂す、齡七十歳なりしといふ。女王治世の間に英國に與へたる二大偉業は英國にプロテスタント教義を普及せしめたると同時に海上權を掌握し且つスコットランド王を後儲とし英國の統一を圖りたることなり。

エリザベスの朝に二偉人の生じたるあり即ちセエキスピア、ベエコン是なり、何れも英國人といふよりも世界的偉人なりし、殊にセエキスピアに於て最も顯著なり。セエキスピアは自由の意想に富み、放豪の躰度を持し其の詩想は深玄にして悲哀的なり、其の創意の卓越なるは近世史中比を見ざる所なり。古今有名なる劇作ありと雖も英國はセエキスピアを以て古今獨歩の偉人なりと崇拜せり。彼は一千五百六十四年に生れ一千六百十六年五十二歳を以て死せり、著作中主要なるものを擧ぐれば Ottello, Hamlet, Macbeth, King Lear, Richard III, Romeo and Juliet, The merchant of Venice, Cæsar, The Tempest, なりとす。フィリップ・シドニイは學識才能に於て

遙かにセエキスピアに及ばずと雖も身貴族の班に列し詩に巧みなり。セエキスピアの友人にして喜劇及び諷刺の詩人なるスペンサーあり、其の著作中有名なるものをThe Faerie Queen, Ben Jonson となす。

フランシス・ベエコンは一千五百六十一年に生れ近世哲學の泰斗なり、一千六百二十三年 De Uuguentis Scientiarum 及び一千六百二十年 Novum Organum を著し何れも科學界に新見地を開發したり。然れどもベエコンは性質吝嗇にして貪婪なりしを以て大に品位を墜落したり。一千六百十九年英國高等法院長に任ぜらしも監守盜の罪を犯し牢屋の辱を亨くるに至りたり。

合衆共和州(The Republic of the United Provinces)は詩人又は哲學者の輩出するとなく且未だ内地靜平の域に達せざるも從來の騷亂は能く國の元氣を增加したり。土地は半海水に瀕して天然の防障をなし、宗教上の迫害を脱して能く自由の精神を發揮せしむるの地盤となれり。されば歐洲人にして宗教上の關係より火刑又は虐待を免れて逃遁するもの悉く合衆共和州の國旗下に集合するの形勢となりたれば、國内農作に從事するものなく、其の海陸軍は日に月に增大となり、ホラント及びヂーランド兩州を擧げて水夫の數七万に達したり。一千六百〇一年より四年に至る三十九ヶ月の久しきに亘るオステンドの包圍は同盟軍の死するもの六万人且つ西班牙兵八万を失ひしにバタビア人は戰艦を率ゐて海上を蔽へり。オステンドの城塞を擧げてスピノラに降りたるの年漁業者に賦課したる稅金のみにして五百万「フロリン」の巨額に達し、悉皆國庫の有となりたり、且つホオラント艦隊の一部はモラッカの征服に依り世界の兩端に新植民國の基礎を樹立したり。

ホランド人は自國より輸出品を有せざれば其の船舶を利用して大洋を横行し、他の貨物を運送するの任に當り、或る一國より貨物を買收して他國に輸送販賣し以て巨利を博したり。堪忍なる漁夫は絶へず海上に游弋して天然の富を獲收するに力を盡し、無數の海産物を全歐土に供給し、かの一週一回魚食の習慣を有する羅馬教國にも亦之を運搬するに至りたり。此の漁業の利は鯖一「トン」に對し黄金一「トン」の交換なりしとは當時の俚諺に上れり。其の他商人は多く當今の問屋業にして口錢手數料を收めて營業に從事せり。巨多の船舶を有するを以て貨物充滿し價低き地に向つて自由に船を行り之を搭載して缺乏せる諸國に分布し以て

莫大の利潤を得たり。毎年二三千のホオランド船舶は佛蘭西の諸港に來り穀物葡萄酒及びブランディーの類を收むるあり、又は外國旗を杠げたる四百以上のホオランド船は西班牙の港灣に入津してホオランドの穀物及び西班牙に缺乏する所の北方の産物を販賣して亞米利加より獲たる西班牙の富を拉して歸れり。

フィリップ二世は一千五百九十四年リスボンを閉鎖してホオランド人の來舶を禁じたり。翌年彼等は遠き外國に商社を設立し、貨物生産地に於て賣買取引を開始したり、此の組織は漸次鞏固となり一千六百〇二年の頃に至り東印度會社の設置を見るに至れり、ポルトガル人は羨望の念に驅られ、ホオランド人の隆盛を慊惡するに至りたれば、彼等は自營の必要に促がされジャヴ、アムボイナ、タイドル、臺灣、錫蘭島及びマラッカに堡塞を築き工場の安寧を維持したり。十三年間に船艦八百を武裝して敵の船舶貨載を捕獲すること五百四十五、其の利するところ實に一億八千「リーヴル」なりといへり。東印度會社の利益配當は二割を下らず、時としては五割に上騰したることありき。如此全盛の時代は當今見ること能はざるも、ホオランドは富國の一に位し、首府アムステルダムの如きは世界富有の市場となれり。

ヘンリイ四世の功業、佛蘭西再興（一千五百九十八年―一千六百十年）。ヘンリイ四世は國内の統一を慮らんため當時同盟の主領に巨額の金或は名爵を與へて悉く之を服從し、ヌナントの條約に依りプロテスタントをして政事的成立の基を樹立せしめたり。内憂外患の餘佛蘭西は當に休養を要し、秩序を整頓し且つ國家の安寧を保持せざるべからざるの必要となれり。ヘンリイは先づ國家の組織を改善せんことに心を注ぎ個人の情念を抛棄し、專ら行政の普及を勵行し及び兵備の充實を圖り、過去の怨恨を離れ國家の利益及び隆强を擧ぐるに心身を委ねたり。

當時財政は紊亂の極に達したりき。佛國の負債は三億四千五百万「フラン」にして現時の價格は凡そ十三億「フラン」の巨額なりき。年々の納稅額は一億七千万「フラン」を要し、政府の純收入は漸く三千万「フラン」なり、此の中一千九百万「フラン」は政府の債務支拂に減却せらるゝなり。王領土は悉く賣却して跡なく、政府財政の官衙は上下擧つて監守盜の府となり、政府に收入すべきもの或は收入したるものの性質を知るものなく、また支拂中に其の所在を失ふことあるも亦之を知るによしなく、全く暗黑の迷裡に在るの狀態となり居たりき。是に於てヘンリイ四世は夙

に茲に見る所あり、一千五百九十九年己の舊知サリイを擧げて財政の顧問となしたり。サリイは先づ政府組織の巨細に精通し能く各物を精査吟味したる後裁判所に命じて不正の判官を陶汰せしめ、收稅吏をして收稅徵書を附し之れと現金を添へて官納せしめ、各州の知事に嚴達して規定外の課稅を禁じ、政府の債務を校刪して疑はしきものの多くを無効となし、且つ公田貸用法を興したり。無用の官職を廢し、不當の年金を刪減し、又不法の免稅を回復し、其の他改竄刪除したるもの夥しかりき。人民にして自ら貴族と稱し又は貴族の位置を持したる富豪も公認の貴族にあらざる限りは悉く納稅の義務者となしたり。一千六百〇四年の創設にかゝる世襲官職即ちパウレット權は國庫の財源なるを以て之を廢せざりし。（財政、裁判所の官吏にして其の職位に對し年々國王に職稅を納付し、年期間に死亡せざる限りは世襲權を有せり。此の稅則は一千六百〇四年宮內の長官パウレットの始むる所にして官職收入の六十分の一稅の規定なり）。

收入方法の正確なるは當に支出方法の節減之に伴ふものなり、實にヘンリイ四世治世の終りに至りて政府は能く一億四千七百萬「フラン」の負債を償却し、八千萬「フラン」に値する土地を回收し、八百萬「フラン」の年金を減却し、二千二百萬「フラン」は國庫の有となり、堡塞及び公共の建築物に四千萬「フラン」を投ずることを得また二千万「フラン」の國庫準備金を得るに至りたり。

經濟は富を處理するの力を有すれども未た以て之を生ずることは能はざるものなり。されはヘンリイ及びサリイは農商工業を奬勵し之によりて國家の富强を企圖したり。ヘンリイは此の三大業に對して一樣に力を竭したりしがサリイは農業に對し一層の注意を傾け、自分ロオヤル・エコノミイと稱する書を著し盛んに農業は國家富强の基礎たることを皷吹したり、其の書中に「農作及び牧畜は恰も國を肥す二つの獸の如きものなり」といへる句あり。一千五百九十六年及び九十八年を通じて再度國中を汎く巡遊し、自ら親しく國內の實情を觀察したる結果一千六百年布告を發して諸稅二千萬「フラン」を免じ、且つ土地稅約百八十萬「フラン」を減じて大に民力休養の實を擧げたり。一千五百九十六年公私の債務に對し勞働者を捕へ又は用具或は耕作用の牛馬を徵收することを禁する古代の法令を再興し、且つ嚴禁令を布達して兵士にして無爲徒食猥りに國內を橫行するもの又は國王に勤侍するものゝ外武器を携帶するものは死刑に處すべきことを命じたり。一

千六百〇一年サリイは穀類を輸出することを許可したり、此の策たるや當時の形勢より觀察するときは全く大膽の行爲なりしが如しといへども、サリイの明能く國内需要供給の度合を精査したる結果此に出でしものたるとは疑ふべからず。彼は又土地灌漑の法に心を傾け、國人に其の必要を告示したり、土地にして灌漑の完備を告げしものあるときは租稅を免じたるの事實ありしを見るも其の一端を窺ふに足るべし。當時溝渠法の名人フラバントのブラッドレーの指揮の下に土木を興したるフレミングの工人等はメドックに一區縣を建てたり、世人呼んで小フランダー國といへり。ランングドックの一プロテスタントオリヴァー・デ・セルレは Theatre of Agriculture 及び Management of the field を著し耕作法の摸範を國人に敎へ佛國農業の祖父と尊稱せられたり。

サリイはブリニイの說と同じく田野に於ける耕作は有力の兵士を生ずるものなりといへり。此の持論に依り工業を以て佛國人の活潑なる生涯を營むに不適當なりとし、原野は能く身體を强健にし健康を保持するに足ると雖ども工業は塵埃充滿せる工場内に行はるゝものなれば體力健康漸次衰弱し、終に人口を減減するの基となるべしとなり。かゝればサリイは外國より工業の組織を輸して自國に植ゆることは極力反對の意見を持し、彼常に人に云へるには國に物産の充滿し又は缺乏するものあるは是れ皆天意なり、されば通商の手段により自他有無相補充すれば足れりと。ヘンリイ四世はサリイの如く單に農作のみを以て滿足せず國内に桑樹を植へ蠶業を奬勵したり。ティイレリー、トアネルスの地は桑樹の繁殖を見るに至り、又各州に養蠶所を設置し、パリ、オーレンス及びトアスの養蠶所は事業大に發達し、ために從來絹織物の供給を伊太利に仰ぎ居たりし佛國は自ら之を製出するの隆盛を致したりき。又ミラン産の如く金糸の縮緬製造を興したり、當時ミランより佛國に輸入する所の太横糸の縱氈、鍍金革、玻璃器、水晶盃、鏡、オランダ布等にして年々百二十万「クラウン」の巨額に上りたりき。一千六百〇四年王は商業大會を招集し、種々議題の中從來の組合に大改革を加へ且つ軍馬育成所の設置を起したれば佛國は爾後日耳曼、西班牙土耳古及び英國よりの軍馬輸入を防阻するに至れり。

フランシス一世により擴大となりたる海軍は當時甚しく衰態を呈せり、そはカ

ルディナル・ド・オサットの一千五百九十六年ヴィレロイに與へたる書信によりて明なりとす、其の書中の一節を擧ぐれば、伊太利にある小貴族にして海上に於ける權力の微弱なるにも關せず尙能く其の海軍兵器所には戰艦を有するあり、然るに佛國の如き二面海に瀕し當に海防の必要あるにも係らず海賊の掠略に備へ且つ伊太利小貴族に對して何等の保護を講ずるに足る海軍力はなかりきといへり。かくサリイは海軍に心を用ゆることなかりしを以て遠き外國にある植民地の屢々敵の嚇す所なれるを聞き心に恐怖の念を生じたることありしといへり。ヘンリイ四世最始の志望は諸大臣のそれよりも遙かに遠大なりき。一千五百七十八年の早きより佛國船舶百五十艘は已にニコウ・フォンドランドに往來したることありき、ヘンリイ四世は北亞米利加に商業を奬勵せんとてセントンジの人チャムプレンを其處に遣したり。チャムプレンは一千六百〇四年カナダに一港を發見し、ポート、ロオヤルと稱せり、之れ當今のアンナポリスなり、其の後一千六百〇八年セント・ロオレンス河に瀕せるクエベックを發見したり。ヘンリイは益〻進んで印度會社を設立し英國及びホオランド會社と競爭の位置に立たんとしたりしが、其の計畫を擧げずして死せしと雖も、土耳古人と一條約を締結したり、其の條約はあらゆる基督教國民は佛國の國旗及び保護、又は外國領事の命令の下にレーヴァントに於て自由に通商することを得べきものなりとす。

サリイは屢〻國內を巡遊して道路を開鑿し或は橋梁を架し專ら交通の便を開きたり。當今佛國を通じて交錯せる無數の水渠は其の設計四世の世に起りたるものなり。當時は唯ブライアルの水渠のみにして、ロイヤに起りフロンテンビユウより九キロメールにあるモレットに至りセン河に合せり。此の水渠は二坂道を連接する水匣式の最も古き工事の一なり、其の全長五十五キロメートル、傾斜百十七メートル、水匣の數四十なりき。

一千五百九十五年には四個の聯隊ありて各隊長之を支配し居たりしが、ヘンリイ四世十一個となし、ルイ十三世三十個に增加したり。然れども外國兵を雇用するの習慣當時尙存せり。騎兵の數は全軍隊に比して多く貴族專ら之れに當れり。王の親兵は別に兵舍に收容したるあり。サリイの手にある砲兵は非常の權力を有し、其の頭領は國王の大官之れに專任することあり。一千五百七十二年以來貴

族は國王の直接允許なくして大砲を所有することを禁ぜられたり。兵士は從來年二回若くは四回に給料を交付され居たりしを、サリイは之を改めて月拂の制を定めたり。一千五百九十八年始めて砲塞監を、翌年軍糧監を任命し、サリイは注意して之を監督し、多數の砲塞を修理し、內亂のために空しくなりたる兵器庫を充實したり。終りにヘンリイはルイ十四世の古智に倣ひ老兵の扶持法を制定したり然れどもリユウ・デ・ルウシンの慈惠病院の發達前崩殂せしは惜むべしといふべし。

ヘンリイ四世の意志は皆佛國の隆盛を企圖するに外ならざりしかば國民の輿望大に昂まりたるも宜なりといふべし。老傷兵士に扶持を與へ又農工商を興して國民の毀富を招きたる光輝の一面を見て、全然ヘンリイの功業を謳歌するも、彼の弱點あることをまた忘るべからず。彼の政略は或る黨派又は人々に對して深き創傷を與へたるなり。ガブリエル・ド・エストレスをビユウフオルト侯爵夫人となし、ヘンリイト・ド・エントレーグをヴエルニユウル侯爵夫人に立てしが如く、私情偏曲の處置多く、加之四世のナヴアル王たりしときに忠勤を勵みしものに對して の豫約を佛王登位の日に至り全く之を忘却して顧みる所なかりしかば、不平の聲

漸く起り遂に陰謀を企圖するものあるに至れり。

陰謀結黨の數多ある內最も有名なるはマアシャル・デ・ビロンなり。サヴォイ侯はラブレッセの領邑を失ひ心中平なる能はず、西班牙も亦佛國の敵意を蒙り之を壓倒せんとの念高まり居たりき。此三雄は佛王の人望地に墜ち貴族等の內心大に背乖せるを見此等を煽動して反逆を企てしめ以て己が復讎となさんとせり。ビロンは才幹人に勝れ氣宇膽大にして國王及び法律の羈絆の重荷なるを慊惡せる貴族等の頭領となりて私に黨徒を集めて陰謀を企畫したりき。一千六百年其の陰謀の初めて發露するやヘンリーは之を誡めて赦免したり、然るにビロンは再度不軌を計り顯はれて捕へられたりしが、此の時又ヘンリイは彼に諭すに忠信の誓約をなさしめんとしたれども肯ぜざりしかば其の頑强を惡み、且つ貴族一般に惡例の傳播せんことを慮り之を斬に處したり（一千六百〇二年）。王の舊友ブイロン侯陰謀に加擔し居たりしが禍の身に及ぶを知り逃遁したりき。ヴエルニユウル侯爵夫人の父及び弟は一千六百〇四年西班牙と再度の同盟を結びたりしが捕はれて斬首せられ侯爵夫人は罰金を出して死を免れたり。

かくの如く西班牙は自ら戰ふの力なく單に陰謀によりて敵國の勢力を殺がんことに心を用ひたるなり、蓋し國内の富强を計らず漫然佛國に對して敵對の位置に立つことの不利は歐羅巴羅馬敎國の主となれる墺西太利家さへ絶へずヘンリイ四世の蠶食する所となれるを見ても知らる。然れども四世は墺西太利家の勢力を打破せんことは夢想に過ぎざりしが、終に其の夢想は歐羅巴の政治的組織に鞏固なる基礎を築き宗敎及び國家の獨立は列國保障の下に樹立するの結果を生ずるに至りたり。四世は墺西太利家をネサルランド、伊太利、及び日耳曼より驅逐し、墺西太利の擴大なる土邑を包括せるハンガリイにより一有力なる王國を設け、以てオットマン人の來襲を防禦せんとし、サヴォイ侯にロムバアディを、ヴェニスにシシリイを與へ伊太利半島を一國となして法王を其首領となし、ゼノア、フロレンス及び附近の貴族領を併せて共和政體を作り、且つネザルランドにも之を作り、瑞士同盟をタイロルの地に及ぼし、日耳曼をして一撰擧帝國となさんことを希望し居たりき。當時歐羅巴は佛蘭西、西班牙、英吉利、瑞典、丁抹及びロムバアディの六世襲王國、ポランド・ハンガリイ、ボヘミア、日耳曼帝國及び法王領土の五撰擧國ヴェニス、ゼノア及びフロレンス、瑞士、及びネザルランドの四共和國を包括して宛然自ら一大共和國を組成し、各國各州の代表者相會して不正行爲及び戰亂を防阻することゝせり。然れども國の治世は恒に權利を以て執行し得べきに、今は武力の强弱により國家の興敗を招くに至れり。此の計畫は國家獨立に關し賞嘆すべき結果となれり、ヘンリイ四世は此の企策より佛國に對して多大の利益を獲取せんとはせざりし、彼曾て人に向つて曰く、西班牙語使用國は西班牙に屬し、日耳曼語使用國は日耳曼に屬す、佛蘭西語を用ゆる國民は悉く吾の有する所なり」と、されば四世はサヴォイ侯にロムバアディを與へてサヴォイの地を去らしめ、ロウレンの女主と佛國皇太子と婚儀を約して之を取り、且つベルジアム及びフランチ・コムテは當然西班牙の有にあらざるなりと思惟したり。

四世が總ての此の事業を成就せんことを冀望せざりしは疑を容れざる所なるが、其の一部を遂行せんがため英吉利と同盟を結びて己の勢援となし、女王エリザベスの死に至るまで佛國と好意を永續したりき、サヴォイ侯に一万五千の兵を遣し總督レスヂガイエレスを將としてダウフィネに屯せしめ、其の報酬としてロムバ

アディ(當時西班牙領土に在り)に王國を組成せしむるの外何物をも要求せざりき。ネザルランドのプロテスタントを扶助して西班牙人に備へせしめ、エヴァンヂリカル同盟を組成したる日耳曼プロテスタント主領の一人ヘッセのランドグレーヴ家マウリスは王に來りて合從の商議をなしたり。王は尙進んでインクイジション(異敎徒糺問所)の厄に呻吟せる西班牙にあるムーア人に心を傾け居たりき。當時恰もクレヴス及びジュリアース侯死して其の後承者なかりしかばプロテスタント及び羅馬敎徒は此の富有の承繼者たらんとて爭端を啓き居たり、兩徒は裁定の口實により干涉を始めたりしが、宗敎上の慊惡は愈〻其の度を高め遂に戰亂避くべからざるの光景となれり。大軍の準備已に調ひ四萬の軍勢は優勢の砲隊を率ゐシャンペインの境邊に向つて進軍し、衆皆四世の來援を待ち居たりしが、一千六百十年五月十四日狂信者ラヴェイラックのために暗殺せられたりき。

ヘンリイ四世はフランシス一世ヘンリイ二世及びチャルス九世の如く技藝の趣味乏しかりしと雖も、治世の間如何に光輝爀々たる事業を擧げしかは前陳已に述ぶる所ありしが如し。チュウレッオに二大堂宇を建設し、ルウブルの大廊閣をシャトウに延長せんことを冀圖したりしが竣功を告げずして死せしと雖も大功業たるは疑ふ所なし。王の信賴せる建築家アンドロエット・デュウセルショオは獨創の技能を有したる天才なりき。ヘンリイ三世の起工したるポント・ニユウフを完成し、またフランシス一世の基礎を築きたる市廳(當今のヴィレ旅館)の前闕を竣功したり。一千六百〇四年ブレース・ロウエールの土木を起したり、此の建築は古代伊太利の遺風にして煉瓦、石材及び瓦の材料を混用したりしを見る。文藝復興時代の技術は當時已に衰頽し居たりしも將に文學の新世紀を啓かんとしたりき。ヘンリイ四世登位後三年にして死したる文學者モンテインあり、詩文的文章に一新體を創意したるマルヘルブの出づるあり、コルネイルレエシン及びボイリユウ等の學者爭ふて彼の文體を襲用したりき。

第五編　ルイ十三、四世治下の佛蘭西隆盛期

（一千六百十年―一千七百十五年）

第十七章　ルイ十三世及びリシェリユウ

（一千六百十四年―一千六百四十三年）

ルイ十三世の幼時及び攝政メリイ・デ・メディシ（一六一〇年―一六一七年）。英國の王權當時大打擊を蒙り居れる際、佛國には英傑リシェリユウ現れてより國勢大に伸張したり（一六二四年―一六四二年）。ヘンリイ四世の子ルイ十三世齡漸く九歲なりしかば、政府は王の未丁年の間國政の補助者を要することとなりたり、前例によれば王母攝政たるべかりし、ルイ九世のときはカスチイルのブランチ・チャアルス九世のときはカゼリン・デ・メディン攝政たりき。メリイ・デ・メディシは從來勢援なく其の位置殆んど一外國人の狀態に存じたりしが、是に於て自ら奮つて國の顯要を獲んとてパリ國會に現はれたり。前王四世五月十四日に死し、翌日の國會はメリイ・デ・メディシに交渉して攝政たらしめたり、是れ蓋しエペルノン侯の援助與りて大に力ありしなり（一千六百十年）。ヘンリイ四世の后は意思薄弱にして狹量の女なるを以て大王の遺業を襲ふの力に乏しく、加ふるに日耳曼のプロテスタントは前に四世の力を獲て佛軍の援助を享けジュリアー征伐の擧熟し居たるに、不幸にして四世の崩殂に遇ひたるが后能く之を扶助するの勇なく、前王の計畫を拋棄したり、また國の柱石なるサリイを斥けて其の領邑に歸らしめ、フロレンス人コンシニイを寵遇し、アンクル侯に封じ爾後佛國陸軍元帥とせり。コンシニイは數年にして八百万フランの富を致したりといへり。

ヘンリイ四世は精力人に勝れ殊に巧妙の權略により能く貴族を制御して王權に服從せしめ居たり、されば四世は人を遇するに愛憎偏頗なく常に貴族等の上に立て總ての黨派に牽制せられず能く之を壓伏したりき。四世の死後貴族は漸く其の頭を上げ各自僭勃したる多年の感情一時に發憤して自己の利益を伸張せんとせり。プロテスタントはサリイの貶黜以來王朝に怨を含み皆曰く我等は能く信仰及び精神の自由を有せり、安んぞ朝廷二三黨派のために其の家庭を危ふすることを欲せんやと。されば彼等は一時貴族の頭領コンデ、ヴェンドオム二家、ロング

ヴォル、メエンネ及びブイロン侯に信隨して朝廷に反抗し、又布告を發して人民の疲弊を救濟せんことを要求せしめたり。此の運動は確乎たる目的なく、主義なく單に其の弱點の多きこと當時の政府と毫も異る所なかりき。かゝれはコンシニイは此の陰謀の精神は陰に利慾の希望を抱懷し陽に名を國民救濟に藉るものなることを看破したれは巨額の財を投じ啗すに利を以てしたり。セント・メネハウルドの條約によりて反抗者に金を與へ或は封爵を授けたり、即ちコンデ侯は現金四十五万「フラン」を、メエンネ侯は結婚費として三十万「フラン」を、ロングヴォル侯は年金十万「フラン」を得たり。かゝる巨額の支出よりしてヘンリイ四世の貯財は大に蠶食せられたり、當時年金の總支拂額は六百万「フラン」に達せりといふ。されは一千六百十四年の政府諸官衙の經常費は支拂を受くること能はざりしといへり。

貴族等は陰謀を蔽ひ且つ貪慾心を晦まさんがため陽に公明を裝はんとし、大官會議の開會を要求したり。此の會議はセント・メネハウルト平和條約以來五ヶ月の後に至り開かれたるなり、時に一千六百十四年五月廿七日なりき。第三級貴族等は自己の慾望に離れ專ら國家有用の議題を提出し、其の一員ロバアト・ミロンは雄辯の議員にして大に朝廷の大官及ひ上級貴族の專横を痛論したり。第三級貴族等は愛國の精神自ら一致し、且つ特權を固持して會議に提出したる議案の主要なるものを擧ぐれば、王及び王權は羅馬法朝の宣布により始めて確立すべきこと、政府の財政は一般に報告すべきこと、第一、第二級貴族の年金は全廢すべきこと、國民に課する租稅は公平一樣なること、貴族領土に小作稅を課すること、法律は貴族平民を問はず同一の効力に支配せらるべきこと、商工業は自由行爲に任し政府干渉せざること、及び定期に大官會議を開設することなりとす。第一案は政府の峻拒する所となり、第二案拒絕の理由として政府の主張したるは、歳出入は國家の神髄なり、神髄は當に皮膚下に蔽はるるものにして他に示さるべきものにあらずとし、且つ貴族及び僧侶の意志行動に反對したる案は悉く排斥したり。ロバアト・ミロンは國民窮乏の圖を王に示して其の救濟方法を献策し、若し王にして心を救民に留むるにあらざれば國民は失望の餘正業を抛棄し全民擧つて兵となり、葡萄栽培者も起つて銃を手にするに至り、鐵站は變じて鐵槌となり、王の領土は化して野盜草賊の巢となるべしと極言したるも遂に其効なかりき。貴族等は暴慢を極め

憎惡の念愈〻增加したり。朝廷は議員の軋轢によりて、何等の決議をもなさゞるを好機とし、故意に會議を遷延して第三級議員を疲勞せしめたる後朝廷に演劇の催ありとの口實を設けて集會を閉場したり(一千六百十五年三月廿四日)。第三級議員は自己の大任を知らざるにあらざるも質朴正純のもの多く權謀詐略の何物たるかを悟らず、不法の閉會に對して何等の抗議をも提出せざりき。大官會議は爾後一千七百八十九年に至るまで開設せられざりき。

コンデ公は初度の陰謀によりて利する所ありしが、一千六百十六年再度の反抗によりてまた利益を獲たり。ルウダン條約により百五十万「フラン」を收めしが、黨友の利潤には互に等差ありき。富貴權勢一時に加はり、政府阿諛の裡に立ちて、恰も佛王の觀ありき。コンシニイは政府より逐はれて窮境にありしが、曾てルウソンの僧正リチエリュウの忠告によりコンデ公の罪狀を擧げてバスチイル朝に彈劾したり貴族等は起つて此の擧に反抗したり、コンシニイは之れを壓倒せんとしたりしが、王は却て反抗者に加担し、母公の寵臣コンシニイに對し己の寵臣アルベルト・デ・ライネスを引て首領となせり。デ・ライネスは收稅吏の子にして當時三十八歲なり。彼は捕鳥に巧みなりしかば幼王の愛を蒙り、深く信任を獲たり。彼は王に告げて王年十五國政を視るの齡に達せり、然るに猶幼兒として輔佐あるは屈辱せるものなりといひしかば、王は妖言に迷はされて、近衞の隊長ヴ゛キトリイを呼び、アンクル侯コンシニイ拿捕を命じ、若し反抗の場合には彼を殺すことを以てしたり。ヴ゛キトリイ速かに拿捕に向ふ、コンシニイ劍を取りて反抗したるを以て遂に銃殺したり。妻レオノラ・ガリガイもまた魔術者なりとの罪に問はれ、一千六百十七年火刑に處せられたり。

ルイ十三世はコンシニイの死により最早輔佐者の手を脫し、純然たる王となりたりと思惟したりしが、デ・ライネス假面を脫し直ちにコンシニイの位置を奪ひ、王權を抑制するの行爲をなしたり。メリイ・デ・メディシは貴族等との爭を止めたるのみならず、彼等と交情を結び、其の援助を得てデ・ライネスを覆さんことを圖り終に一千六百十九年アンゲル政府を掌握するの幸機を得たり。翌年デ・ライネスに對する計畫は効果なかりしと雖も、リチエリュウは前の條約を確定するに至りたり(一千六百廿年)。

プロテスタントはデュプレシス・モルネエの愛國的教訓及びサリイの深慮によりて陰謀に加担せざりき。然れども是等有力なる頭領の間にロウハン侯といへる精力强健にして能辯なる一青年現はれ、勢力の競爭起りたり。ヒユウギノット黨はビイルンに再興したる羅馬教及び改教ビイルン人の所領たる寺領財産の回附を强ゆる命令を受け、大に激昂の度を高めたり。是に於て軟柔なるサリイ及びモルネエの說は衆徒の歡ぶ所とならず、ラ・ロチイルに集會し、一同武裝して反亂したり。彼等はアウニスの沼地に一市を設置せんと欲し、ラ・ロチイルの地を相したり。今のアムステルダム之れなり。當時彼等は八百六の教院を有し、十六州を保ちしが、ブイロン侯を斥けロウハン之が全權を握れり。

デ・ライネスは當時陸軍總督の要位にあり、モンタウバンを包圍攻擊したれども計畫破れ、不幸にも一千六百二十一年惡症の熱病に罹りて死せり。翌年王はサウバイスをレ島より逐ひ、セント・フオイを畧取したり。プロテスタント和を乞ひ、モントペリアアの條約を締結し、ナント・の布告を確定し、ラ・ロチイル及びモンタウバンを安全市となしたり、然れども、國王の允許なくして政治的集會を禁じぬ（一千六百二十年）

リシエリュウの榮達。

メリイ・デ・メディシ已に權勢を回復し、一千六百二十二年リシエリュウのためにカルディナルの僧冠を乞ひ、國の執政を一任したり。彼の內閣に列するを得しよりあらゆる黨派及び私交の關係を絕ち、彼の意志の達する限り眼中何等の障害を認めず、斷乎として所信を貫かざるはなかりき。權力に涸渴したるリシエリュウは大事業を擧げんがため直ちに王を壓して大權を掌握せり。ルイ十三世は國家政策の何物たるを理會するの才を有し、又善良を愛するの德性なきにあらざるも、執行力に缺くる所ありき。王は政事の任をリシエリュウの計畫に委ね、朝臣の憎惡を意とせず、十八年の間能く彼を信任したり。

リシエリュウの計畫は簡易なりしも而も擴大なりき。內地に向つては大貴族の權力を殺れて、王の制定したる法律を勵行せんとし、プロテスタントの勢力に打擊を加へ、其の成立は單に宗教的にして毫も政事的の狀態を許さゝらんとし、又外國に向つては墺西太利家の權勢を破棄せんとするにありき之れ有名なる三連政略にして彼の著名なる執政中一も之れに反する所なかりきといふ。

リシエリュウ執政の初に當りては急速事に從ひ、一時に全計畫を執行せんとし、西班牙人及びプロテスタントを攻擊したりき。當時西班牙領のミラン及び日耳曼にある塊西太利家の領邑タイロルの中間に位せるヴァルテリナの樞要地あり、其の住民は羅馬教義を崇拜せるもグリッソンのプロテスタント共和國に屬せり。之より先マドリッド朝は異教に對して此の住民を保護すと稱し、邊境に城寨を築き、住民を煽動せしめしかば反亂の狀態となり居たりき。グリッソン之に反抗し大に擾騷したりしかば、法王撰ばれて仲裁者となれり。法王逡巡久しく決せず、遂に西班牙のため利益の裁判を與へんとせしとき、會リシエリュウ職に就けり、彼は直ちに羅馬駐在の佛國大使に書を派して、佛王の宰相更替あり、新宰相は政事の方針を變ぜり、ヴァルテリナに軍隊を派遣すべし、法王の裁判は無用なり、西班牙人は容易に壓倒し得べしと達せり。直ちにリシエリュウはコオヴレス侯を將として兵八千を率ゐしめ擊つてヴァルテリナを取り、グリッソンに回復せしめたり（一千六百二十四年）。

時にリシエリュウ思ふには、チャアルス一世と佛のヘンリエッタとの婚儀によりてプロテスタントに對する英國の援助は絶緣したりとなし、激烈なる攻擊を與へ、ラ・ロチイルの艦艇を破摧したり。當時國王及び宰相を廢せんとする陰謀起りしにより、リシエリュウは成功の半より歸りて鎭壓するの已むを得ざるに至れり。佛王の豫備繼承者のガストンは廷臣四五の心を得たりしを以て、ムル・デ・モントペンシヤーの婚儀を拒絶したり、そはリシエリュウの敵手外國と强勢なる同盟を作り、リシエリュウに反抗せんと欲したるにありき。是に於てリシエリュウはオルナモ元帥を捕へて獄に下し、又貴族等に懲誡を加へたれば朝廷大に激動せしも、リシエリュウに對しては策の施すべきものなかりき。此機に乘し彼はヒユウギノットと和を講じ、西班牙とモンソンの條約を締結し、陰謀者と氣脈を通じ之を補助するの手段なからしめんとしたり（一千六百二十六年）。此の政略後カレイスの捕縛事件起れり。裁判官は有罪を宣告し一千六百二十六年斬に處せられたり。如上の行爲ありてより貴族等の恐慌甚しく、リシエリュウに對する反抗は自家滅亡の基となるべきことを覺知するにいたれり。次に第二の捕縛事件起れり、即ち當時佛國最上の貴族ブーテヴキル・モントモレンシイ及びビユウヴロン侯は決鬪に關する法律違反者の罪に問はれ斷頭臺の露となれり。リシエリュウ曾て王に勸告して曰く、下層の人民に懲罰を

加ふるの例を示すは不當なり、是等の人民は恰も本立の影薄きが如し、然らばとて貴族にして王の力となれるものは能く之れを遇するの要あるべしと雖も、そを放任するときは恐るべき結果を生ずるの基となるべければ、よろしく之れに鞭韃を加へて紀律正しきものとせざるべからず」と。リシェリュウの主張する所公平にして階級の如何に拘はらず罪あるものは一も容赦することなかりしは、宰相として善良の措置たること疑なき所なれども、弱點多き人間の常性に漏れず、彼も亦ルイ十一世の如く裁判權を濫用して秋怨を晴し、政府の特權を弄びて不正の斷頭臺に私敵の頭を曝したる不正事件ありしはあたらしきことなり。

如上の措置によりてリシェリュウは自由に所思を斷行し以つて新教徒に對し恐ろしき攻撃を加へ、之れを根絶せんことに力を竭したり。彼は陸海軍に改善を加へ、又財政を整理し、レスディガイエレス死後コンスタブルの官を廢し、モントモレンシイ家督の海軍提督の官職を取りて百万「フラン」を代償したり、又五ヶ年間地租滯納の農民に對して強制執行を施し、同時に和蘭人と同盟を作り、船舶を利用してゼノアを攻め、又ラ・ロシェル征伐にも使用したりき。

英王チアアルス一世はラ・ロシェルを援けんとして寵臣バッキンハムに艦隊に將として赴き救はしめたり。英軍レ島に上陸したれどもトイラス及びスコムベルグの戰敗れ撃退せられたり。佛軍は陸路よりラ・ロシェルを圍み市をして海上よりの援助を絶たしめ、また英軍の來援を防碍せんがため無數の障堤を築きて砲臺を備へたり。かく鞏固なる戰策と熱心とは將帥貴族等が害心を施すの餘地なかりき。

市の防戰は花々しかりき、英國艦隊は再度防堤前に進入し來りしも遂に破壞すること能はずして佛軍に奪はれたり（一千六百八年）。人口三万を有する此の市も生存するものまた僅に五千なりしと。

當時ロウハン侯はラングドックに於て小勢を以て大軍に抗し、漸く殘滅を支へ居たりしが此の時に至りて兵を解かざるを得ざるに至れり。リシェリュウはアライスの平和條約を結びて新教徒の保安を保證し、ナント布告により彼等の享有したる宗教の自由を允したるも、新徒の城砦は武裝を解き、國内に政事的結社を組成することを廢したり（一千六百九年）。

佛國の政治的統一こゝに再興し、宗教戰爭は全く其の跡を拭へり。リシエリュウの敵は彼を斃さゞりしのみか却て益〻彼に屈從するの結果となり、勢力愈〻リシエリュウの一身に集れり、メリイ・デ・メディシは彼のかくまで偉大の政治家ならんとは期せざりしに、今や權勢の日に彼に移るを見て私に恐怖を抱き、病王に請うて流罪の命令を強請せんとする危機一髪の際に、リシエリュウは之れを覺知し、王に拜謁し、談數刻にして却て王に強壓を加へたり。メリイ・デ・メディシは廷臣悉く己に歸服せりと信じたりしが、事實は人心離乖せり、そを覺知せざりしこと愚かなりといふべし、史上に此の日を「瞞着日」といふ(一千六百三十年)。攝政の罪に坐し二人の死を致したるものあり、一は王の印璽管理官にして、他は佛國元帥なり、何れもマリラック家の兄弟なりしが、王母の彈劾する所となり、元帥は受賄の撿擧を享け、ルウエルにあるリシエリュウの邸宅に於て糺問の結果有罪の宣告を受けて死刑に處せられ、弟は幽囚の身となり終に病歿したり。メリイ・デ・メディシは捕はれてロムビイエン城に幽閉せられたりしが、居ること六ヶ月逃れてブラッセルに走り命令を茲に送れり(一千六百一十一年)。

ガストンは事變前已に朝廷を去り、ロウレン侯に身を委ね、侯の妹と婚を擧げたりしが、身の危を知り己むを得ず遁れてベルヂアムに避難し、ラングドックの知事モントモレンシイ侯によりて黨與數千人を集むることを得たりしも、進軍の援助を獲ること能はず、諸邑城門を開きて迎ふる所なく、只ラングドックに於てモントモレンシイの軍と連絡し、小軍を率ゐて動かず、機の到るを待つのみなりき。然るに佛軍は進み來れり、モントモレンシイ激して之れを迎擊し、頑固の抵抗を試みしも終に佛軍に生擒せられ、ガストン救助の策を講ぜざりしかば、空しく斷頭臺の露と消へモントモレンシー家是に至りて廢絶したり(一千六百三十二年)。ロウレン侯は此の變に連累し、軍費を支辨して僅に難を免れたり。一千六百三十三年ルイ十三世は兵をロウレンの侯爵領地に駐屯し、世紀の終りまで佛國の有に歸せしめたり。

此の措置は貴族間に恐怖を惹起し、爲に新しき陰謀の勃發を防ぐこと能はざりき。ガストンは怯懦にして恃みなき人なるも猶共謀者を語合ひ、私に反逆の擧に出んとしたりしが、寵臣バイラウレンといふものバスチイル朝に内應せしかば、謀破れて何事もなすこと能はず。一千六百三十八年後にルイナ四世たりし皇子誕生ありしかば、ガストンの有せる豫備儲位(佛王の猶子)の權及び他の官位をも褫奪

せられたり。エペルノン侯及び他大貴族の驕慢に加へたる打擊と兵士の掠奪を制御せざりし罪によりヴァレッタ侯の死刑は軍隊に服從てふ義務心を喚起したる新生面を啓くに至りたり、然れどもコンデ家のソイソン伯は猶カルディナル(リシエリュウ)を仆さんことに力を用ひたり、さはれマルフェエの勇者として驍名を博したる伯も如何で大勢に抵抗し得べき、一千六百四十一年終に戰場の露と消へぬ。

リシエリュウの權勢王者を凌駕するものありと雖も終始爭擾絶ゆる時なく、寧日とてはなかりき。シンク・アルスといへる一青年あり、リシエリュウの寵を受け王の侍臣となり居たりしが、私にリシエリュウを覆さんとの陰謀を企て、ルイ十三世と亦同盟に加担したり。然るにシンク・マルスの西班牙實權者オリヴァレス伯との同盟締結身を亡ぼすの基となり、謀洩れて斬に處せられ、尋て一千六百四十二年マルスの友デ・ザウ及び一味のブイロン侯はセダン及びラウコルトの二城を以て王に降伏するの已むなきに至れり。

一千六百廿六年リシエリュウは邊境に位して用に堪へざる封建時代の城砦の破壞を命し、又コンスタブル及び海軍提督の如き軍事上重要の官職を廢して、勢力の他に偏することを豫防せしのみならず、自ら諸方面の實權を掌握せんがため、國會を壓伏して國家の事件に關しては默認せしめ、大官會議の開會を廢絶したりき。

かくして万事皆リシエリュウの心に任せざるものなきに至れり。不幸なるは人民にして、一難を免かるを得ば他の難續いて至り、片時も寧日なく、之れに反して貴族の放肆は益增長し、王の專政は總て法律外の行爲をなして憚らず、市民の財産、自由且つ生命に至るまで王の意思の向ふ所に一任せられたり。リシエリュウの手にて財産の沒收、罪人の禁錮は勿論、國事犯人の懲罰を執行するに國會へは單に一片の通知をなすに過ぎざりしと。

カルディナル・リシエリュウの新敎徒に對する打擊は充分に其の効を奏したりと雖も、未だ以て政治的團躰を撲滅すること能はざりしかば、種々必要なる改革を企て、之れを全滅せんとて畫策至らざる所なかりき。

財政管理の方法に於てリシエリュウの政策は普通執政者が豫算書を手にして參酌考究するが如き寛容なるものにあらず、軍資急を告ぐるあれば增稅を企て或は高利の負債を起し、或は新官職を設くる等、出費の額甚しきに到り、彼の死後は千万

「フラン」の歳入も三千三百五十万フラン」に減少し、不足額五千六百万「フラン」に達し、三ヶ年後の收入は已に支出し盡して餘す所なかりきといへり。明敏なるリシエリュウは國家の財政漸く亂るゝを知るや、救濟せんがために一千六百三十五年 intendant（財政管理者）の新職を設けたり、就任の官吏は何れも出所不明の輩にして、何れもリシエリュウの任命したるものに屬し、其の權限は裁判、警察の二權及び財政にあり。從來國家の財政は國會の容喙を許さず、又知事の特權は管轄區域の行政に限られたるも、此の職に就けるものは多く大貴族にして自己の支配近縣は全く獨立して、其の官職は子孫の傳承すべきものと思惟し居たり。當時の主權者は大概勢力微弱にして貴族の專横を制抑すること能はざるもの多ければ、知事の職は殆んと世襲となり居たりしなり。リシエリュウ相となりてよりかゝる專横を許さず、財政管理者の補助を得また王の名義を以て王國到る所嚴密なる檢察を行はざる所なく、漸次州縣の實權を手中に收め、ルイ十四世の時に至り知事の權利は僅に兵馬の權にして、政治は中央政府の代辨に過ぎざりき。是れ即ち王國及び國家統一の基礎を鞏固にするの實をなせるものといふべし。チャアルス三世の時佛國に起りし常備軍の編成は新に再興せんとしたる封建組織に非常の打擊を與へたること他に其の比を見ざりし所なり。

ラ・ロシエルの包圍は軍事上諸種の結果を生せしが佛國に海軍の組織を創むるに至りしは其の一なりとす。リシエリュウ夙に地相を考察し、ブレスト、ハヴル及びブロウジは海軍兵器所設置に適合すべきことを知れり、然れどもブロウジのみは認定を誤りたるも、ブレストの如きは最も恰當の地たることを得たり。リシエリュウ以前にありては佛國に海軍として見るべき設置なかりしも、當時無數の船舶にして武裝せざるなく、三十年戰爭に及びて、佛國の艦隊は優勢の域に達し、外洋及び地中海の制海權を有したりき。

西班牙人はネザルランド、フランチ、コムテ及びルウシロンを有し、佛國の三境を壓塞し、ネエプルス及びミランを通して伊太利を保ちたり。リシエリュウは先づ佛國邊境の敵を掃盡せんことを志し、入つて相となるの日直ちに西班牙人をヴアルラリナより逐へり。數年の後に至りマンチュア及びモントフェラットの周邊にあるネヴレス侯たる一貴族のために伊太利を得んとして干渉を始めたり。西班牙

及びサヴォイ侯は此の要求に反論したり。是に於てリシェリュウは三万六千の兵を率ゐてアルプ山を越へ、ルイ十三世は別にスザの山路より進軍したり。サヴォイ侯は抵抗の不利なるを知り、急ぎスザの條約を締結したり、スザの地は西班牙のミランに通ずる要衝に當れり。然るに一年を經過せざるにカルディナルは四万人を率ゐて再びアルプ山を越ゆるに至りたり、そは日耳曼にて戰捷を獲たる帝國黨のグリッソンに浸入するあり、西班牙人またモントフェラットに迫るありて、サヴォイ侯四面の侵畧に對し樽俎折衝の間に立ちて多忙を極め居たる好機に際會したるなりサヴォイ遂に支へず、一千六百二十九年三月首府ピグネロル陷りたり。マザリンはセラッコ平和を商議し、マンチュア侯領を再興し、勇者アマデアスをしてピクネロルを以てルイ十三世に降伏するの已むなきに到らしめたり、此の市はアルプ通路の要所に當れり、時に一千六百三十一年四月なり。

かくて一千六百三十一年リシェリュウは墺西太利二分家の勢力を伊太利に分離し半島は佛國に對して何等の堡寨もなければ、リシェリュウは直ちに分離したる敵に向つて激しき攻撃を加へたり。此の爭亂を佛國に於ける三十年戰爭とす、こは後章詳述する所あるべし、戰の發端は一千六百三十五年に始まれるなり。

一千六百四十二年十二月一日リシェリュウは五十七歳にして死せり最期の日佛國の領土にロウレン、アルサス、アルトイス及びルウシロンを併せたり、又カタロニア及びポルトガルは西班牙に對して反抗し、瑞典及び佛國の勢力は殆んとヴヰンナの城門に迫るの形とたり居たりき。

リシェリュウは相たるの日ルイ十三世との約束を履行したるのみならず。外列國に伍して名實共に王者たるの權勢を十三世に遺したりき。當時の人民は當時西班牙の權勢偉大なるを見て將に世界の王たるべしと思惟せざるものなかりしに、事實之れに反し、從來國庫缺乏し、不規律の兵を有したりし佛國が國内統一、土地豐饒海陸の兵備充實の光景を現し、急速の進歩をなすに至りまたリシェリュウ時代の佛國が奏したる偉業は世界に於ける他列國の再び及ぶ所にあらざりしといふも決して濫言にあらざるの結果とはなりたり。

リシェリュウは惟權勢を愛せず又能く技術文學の趣味を有したり。佛國に勃興したる諸種の學校は當時に始まれり。彼は一千六百三十五年佛蘭西中學を建て

言語學を修め人心に趣味を喚發し粗野の風を脱して文雅の國民たらしめんとし、又ソルボン、國立圖書館及び印刷所の規模を擴張し、プレシス高等學校を創立し、植物園を創置したり、現今の博物館これなり。彼の文士を遇するや欵待禮遇至らざる處なく、學者詩人に年金を附與せり、コルネエイユの如き其の一人なり。又畫工ヴウエーを奬勵し、羅馬よりブウシンを招聘して美術の發達に汲々として力を用ひたれば、終に佛國に文藝の一大新生面を啓き、一千六百三十五年にThe Cid及び三十七年にDiscourse on Methodを著したり。彼もまた有名の文士なり才學コルネエイユに及ばずと雖も神學上の著は當時人の賞嘆する所となり、政治上の著Memoirs又今猶尊重せらる。

ルイ十三世はリシエリュウの政策を改めず、彼の友人にして能くこれを蹈襲し得る伎倆を有せるジュウルス、マザリンを擧げて相となせり。ルイ十三世はリシエリュウの死後六ヶ月にして崩殂せり、時に一千六百四十三年五月十四日なり。

第十八章　三十年戰爭

三十年戰爭に於ける日耳曼及び北方諸州。　十六世紀頃までは露西亞及びポオランドの興廢を現出したるとなきにしもあらざれど政治上の平衡は未だ猶北部歐羅巴の諸州に及ばざりき。露西亞はモスコウの諸侯ありて掌中に主權を集め漸次勢力を增進せるに反し、ポオランドは一千五百七十二年ジャゲロン人の滅亡以來一種の撰擧王國を形成せりと雖も、貴族政躰にして爭亂互に絶ゆるとなかりき。一千五百七十三年アンジョウ侯を王(王は後佛國のヘンリイ三世となり不幸の生涯に終りたる人なり)に撰擧したりしも王のワルサウ逃亡以來トランシルヴニア公ステヴン、バトルニイ撰ばれて王となれり(一千五百七十五年)。一千五百八十七年瑞典王ジョン三世の子シギスマンド王位を襲へり。シギスマンドはチャアルス五世に奪はれたる父の王冠を回復せんとて墺西太利と同盟を結び、一千五百九十八年ポオランド及び瑞典の交戰となり、戰亂延て一千六百二十九年に至りリシエリュウの干涉によりて歇みぬ。リヴオニア及びプロシアは戰爭の重要なる舞臺となりしが露西亞も亦之れに加入したり。ポオランドの貴族等は久しき交戰の間常に武勇を現はし、大に軍隊の名譽を博したるに反し、露西亞は一千五

百九十八年リユツリック統の廢絶及び一千六百十三年ロウマノフ登位に至る間內訌絕ゆることなく、國內の秩序甚しく亂れ、祖先アイヴン四世の經營したる諸種の利益を失ふに至れり。一千六百十七年ストルボヴア平和により瑞典にカレリア及びイングリアの地を與へたり、別言すれば露西亞はバルチック海に有せる諸種の權利を拋棄したるなり。一千六百十八年デレギリナ條約によりポオランドにスモレンスク及びシエルニグオヴを回付し、荒茫不毛の地に閉息するに至りしかど時已に漸次發芽を試みんとするの形勢は存じたりき。されば三十年戰爭の日耳曼に破裂せんとするの時に當りシギスマンドポオランドの王權を要求し、能く之れを防禦したりしも、一千六百十一年以來瑞典の王冠は彼の從弟にしてヴアサ家創立者の孫ガスタヴァス・アドルフアスの有する所となりて、未だ回復することを得ざりき。

ガスタヴァス・ヴアサは當時已に瑞典に王權を確立し、ルウサー主義の改敎を制定したりき。ヴアサは其の子ジョン三世或は西班牙王フィリップ二世の陰謀及びポオランド王シギスマンドの攻擊ありしも能く國家を維持し、且つ熱心に寬容主義の精神を普及し、固く新敎を保障したりき。瑞典及びポオランド戰爭の結果の一は、始めポオランドは墺西太利の援助を得たりしによく帝國軍のバルチック海岸に到達するや瑞典のハプスバルグ家に對し武裝して立てることなり。國民は愛國の精神に富み、ルウサー主義能く志氣を皷吹し加ふるにガスタヴァスの才幹を以てしたれば幾何もなく瑞典は日耳曼地方に光輝赫々たる偉業を演ずるに至りしなり。

丁抹は瑞典の如き利權の位置に到らざりし。丁抹王チャアルス四世は國君の器なく、政府はあれども貴族より成れる寡頭政治に屬隷せるを以て勢振はず、加ふるに海軍力は稍恃む所なきにあらざるも陸軍は封建的徵兵にして貴族等の有となり、國王の如何ともなす所にあらざれは勢微弱にして到底他國と交戰に耐ゆるものにあらざりき。領土は那威より瑞典南方諸州を占むるも貧弱にして國庫缺乏の狀態となり居たり（一千六百十八年）。

前世紀の央に於てチャアルス五世は志を失ひ帝位を退き、始めてアウグスバルグ平和を結び、日耳曼に於ける宗敎戰爭の終局を告げたりき（一千五百五十五年）。然るに此

平和は休戰の外何等の効果をも收めざりき之れ他なし平和條約中の僧領土保留の箇條に關する大問題の未だ解決を告げざりしに因由せり。幸に當時日耳曼の進歩は遲鈍にして兵馬の間に此の問題を解決するの勇なかりしかば休戰的平和は能く六十三年の久きを保ちたりき。

僧領土保留問題より新に戰亂の發生すること到底避くべからざるの形勢となれり。蓋し此の條項は當時の僧侶にして新に新敎に改宗するものは舊寺領を享くることを禁じたるにありき。こは寧ろ正當なり、然るに世襲不動產(僧侶の領邑を指す)の土地平分法は痛く貴族の心を動かし、從來僧侶の富有を嫉視せるの念一時に勃發し、ルウサーに心を傾くるに至れり、されど貴族等の精神は宗敎上の爭議よりも自家權勢の消長を慮るにあるなり。ルウサー以前に於ける羅馬敎の財本は實に日耳曼全土の三分一を占有し、權勢の偉大なること僧正の如きは優に君主を凌げり。羅馬敎院が禮拜用に貧民救濟の費として與へたる擴大の采地は僧侶等自腹を肥すの餌とならざるはなく、又法王以下の高僧等は驕侈放逸金錢を浪費して、昔日の使徒時代の窮乏に衰退するを覺らざるの愚を演ぜしこと幾何なるを知らず。

かゝる形勢にあれば北日耳曼に於けるマクヂバルグ及びブレメンの大僧正領土及びミンデン、ハルベルスタッズ、ヴエルデン及びルベックの僧正領土には新敎徒の侵入せざるなかりき。然れども西南の地は猶未だ羅馬敎の勢力優大なるあり。一千五百八十二年コロンの大僧正にして帝國七撰擧侯の一トラッチセスのゲブサルド及びウエストフアリア侯の如きは羅馬敎を脫したれは法王は西班牙軍の後援によりコロン領に新に大僧正を任じたり。ゲブハルドは新敎徒の援助を有せしも、カルヰン敎徒に意を通ずるに至りてよりルウサー黨の棄つる所となり、一千五百八十四年其の領土を失へり。

かく改敎徒破れ、一千五百八九年再びアイクスラチャペルに破れ敎長逐はれたり。一千五百九十二年ストラスバルグに於て敎長等は一人を撰びて僧正領土の主となさしめんとしたりしも効なかりき。一千六百〇七年ドナウウエルスに敗績し新敎徒は驅逐せられ自由の邑を離れてバヴァリア侯爵地に屬する一市に住するの已むなきに至れり。

かくして羅馬法朝の日耳曼に於て企てたる羅馬教回復の計畫は或就するに至りたり。新教徒は數多の打擊を蒙り、今や自ら軍隊を編成し自衛の策を講せんことを思ふに至れり。一千六百〇八年彼等はエヴァンジリカル同盟を結びたり。羅馬教徒も居ながら敵の對抗準備を見て武裝せざるを得ず、翌年相議して羅馬教同盟を組成しバヴァリア侯マキシミリアン之れが主領たりき。

マキシミリアンは夙に新教に對して暴烈なる憎惡慊忌の念を有し、齡漸く六歳の頃ヘンリ三世のジャキス、クレメントの弑に遇ふや、彼は母に書を送りて佛王暗殺の報を聞き欣喜に堪へず此の報導の正確を開かんこと一日千秋の思ありといへるを見れば、彼の胸中を洞察するに足るものあり。同盟員中マキシミリアンに亞きて有力なるはスティリアの大侯フェルディナンドにして、後皇帝となれり。彼人に向つていへるやう己の領土内に異教徒を寛容せんよりは丐兒となりて食を乞ふに若かじと。彼は新教徒の教長を殺し、或は追放し、又は教會に砲火を加へて之れを灰燼となし一萬部の聖書を烏有に歸せしめ、而して死刑場にはカフチン寺院の石垣を運搬したりといふ。かゝる狂暴の人々に對抗せる新教徒の形勢を見るに、ルウサー派は教義上よりカルヰン派と軋轢し、ルウサー派中亦統一を缺く所ありて勢力甚だ振はず、能く之れが統一を完ふするに足るべき技倆の主領なかりき唯に勢微弱なるのみならず主要の黨員にして破廉恥の行爲をなすものもありき、ニユウバルグ侯の如きは一千六百〇九年の頃クレヴス及びジユリアーの富領土空位となり居たるを見て之れを得んと欲するの餘り羅馬教徒となりて援助を得んとせるあり、ルウサー派のプランデンバルグの撰擧侯も同一の意志よりカルヰン教徒となれり。前者は西班牙人を後者は和蘭人を入れて援とせり。ヘンリイ四世其の渦中に入つて干渉を試みんとするや、暗殺の不幸に遭遇したりき。

墺西太利國の形勢は日耳曼及び宗教改革の爭亂によりて利する所なかりき。前章已に述ぶるが如く墺西太利世襲領土にあらざるバヴァリアに於て羅馬教派は攻勢の態度を持し、其の援助を有したり。一千五百六十四年チャアルス五世の弟にして皇帝たるべきフェルディナンド一世の死後日耳曼系の一族は歐羅巴に於ける大業を西班牙系に委附したりき。オットマンの攻擊ハンガリイ人及びボヘミア人の反抗は終にフェルディナンド二世領土の分裂となり、勢力次第に衰退し遂に此の

一門はチヤアルス五世時代の形勢となれり。マキシミリアン二世(一千五百六十四年—一千五百七十六年)は深慮にして豁達の人なり、オットマン人トランミルヴァニア人に對して心を用ひ、且つボオランド事件にも注意しヘンリイ三世逃亡後此處に撰れて王たらんことを冀ひたりしも、日耳曼に關しては心を勞する所少なかりき。其の子ルドルフ二世(一千五百七十六年—一千六百十二年)は不肖にして治世の才なく、心身共に羸弱にして且つ迷信の人なり。彼は煉金者或は占星家などに擁せられ無爲の生涯を送れり、然れども占星敎者中には有名なるタイコ・ブラへも加はり居たりといへり。彼の天體を觀測しかのルドルフ表を畫せる間にオットマン人の來襲を蒙りて敗績し、王冠を失はんとしたりき。弟マシアスといへるものあり、ルドルフは家門を危害に致さんとするものなりとの口實によりて兵を擧げ、一千六百〇八年王に迫りてハンガリイ墺西太利及びモラヴィア幷にボヘミア撰擧王號を己に讓與せしめたり。

內訌は新敎徒をして益〻世襲領土に侵入の機運を進めしめたり。マシアスは新敎徒に允すに墺西太利に於て自由崇拜を以てせしが、ルドルフはボヘミア人の强勢なる奮起に拘束せられ、一千五百七十五年に制定せるボヘミア自認(Confession)の法律上の成立を承認したる特許を與ふるの已むを得ざるに至り、又新敎徒に校舍を開き敎院を建つるの權利を附與し、敎徒より終身官を命じ宗敎保護の名により特許權の執行を監督せしむることを委任したり此の一事は王に對して最も耐へ難き措置なりしといふ(四千六百〇九年七月十一日)。一千六百十一年マシアスは王に迫りてボヘミアの王位を讓らしめたり。ボヘミア王位はルドルフに對し帝國に於ける唯一の權利にして、彼の死後選擧侯等の爭點たりしものなり。

マシアスはルドルフの如き智者にもあらず亦勢力もなかりき、されば彼のルドルフに對する計策を今は自ら受くるの境遇となれり。大侯ステイリアのフェルディナンド儲位となりて補弼の任を執れり、是に至りて新敎徒の享有したる宗敎上の寬容は一時の夢と化し去り、却て虐待を蒙むるに至れり。彼等は官職を逐はれ敎院を奪はれたり、新敎徒の墺西太利に跡を見ざるに至るや直ちにフェルデナンドは公然ボヘミアに於ける宗敎の自由を破壞すべき計策を發表したりき。

三十年戰爭に於けるバラチン及び丁抹時代(一千六百十八年—一千六百二十六年)。

六百十八年バプチスト派は禮拜用の敎院を建立せんことを冀ひたりしが目的を

達すること能はざりき、そは新教保護者の主領サーン伯の性質狂暴、貪婪にしてフェルヂナンドの誑す所となり、ルドルフより受けたる特許狀を質入れしたりし爲め彼等の請願は侮辱を以て迎へられたるなり、是に於て反亂起るに至れり。彼等はプレエグの市廳に退きボヘミアの舊慣に從ひ知事を拉して窓外に投じたり、時に一千六百十八年五月二十三日。

これ所謂三十年戰爭の發端なり、此の戰亂はダニュウブ河よりスチエルツ河に至り、ボオ河畔よりバルチック海岸に達し、諸邑を殘滅に歸し、野圃を荒廢し、人口を減少し特に文雅の風を沒して野蠻の光景を露出するに至れり。抑も三十年戰爭は種々の原因を有すれども畢竟宗教上の問題に起り、二宗教の諍爭なりしが、結果としては墺西太利家の屈從及び佛蘭西家の擴大に終りたりき。

プレエク事變後ボヘミア人は相結合して防禦に力を注ぎ、エヴァンジリカン同盟主撰擧侯パラチンを擁して王とせりパラチンは英王の養子にして和蘭のスタッズホルダーの娽なり（一千六百十九年）。然るにフレデリック五世は遊樂に酖る外何事をもなすことなかりしが、十九年マシアスの死後皇帝となりたるフルヂナンド二世は明活の躰度を持し、宗教のため鋭意力を用ひ、ボオランド王と懇和して自己の援となし、又ボヘミアを援けざりしサキソニイ撰擧侯と和親を結び、又法王よりは保護金を受け、羅馬教同盟及び西班牙王より軍兵の供給をも受けたり。されば サーン伯の率うるボヘミア人及びベスレン・ガボルの率うるハンガリイ人のためにヴヰンナに包圍せられ、内にありては墺西太利の諸大臣より敵に降らんことを強ひられ、内外患憂の間に立つもあらゆる攻擊に對抗して同盟軍の來援に充分の時日を與へたりしは、實に堅忍不拔の然らしめし所なりとす。同盟軍到着するや光景一變し市民悉く武裝して立ち、自立の氣分回復したるに加へ、エヴァンジリカル同盟にはマンスフィルト伯の軍敗れサーン伯は已むを得ず兵を收めてボヘミアに退くに至りヴヰンナの包圍解くることを得たり。

此の時佛蘭西のデ・ライネスは使者をガボルに遣して休戰を締結せしめたり、休戰條約に當りライネスはエヴァンジリカル同盟の諸侯を說き撰擧侯パラチンを貶せしめ大に皇帝の甘心を購ふに至れりかくの如くデ、ライネスは佛國外交に巧妙の手腕を振ひたり。

西班牙人のバラチン領に、サキソン人のラサシヤに、侵入せる間に、同盟軍はボヘミア人を擊てプレエグ附近のホワイト・マウンテン役に之れを破りたり（一千六百二十年）。ボヘミア人は哀を乞はざるべからざるに至り從來享有の將權は褫奪せられ、加ふるに刑罰の慘狀を呈したり頭領中の二十七人は斷首せられ、二十九人は遁れて漸く死を免れたり貴族九百二十八人は財産を奪はれ、三万八千の家族は國を逐はれ爾後二世紀間ボヘミアは猶羅馬教回復のために殘忍の虐待を蒙り居たりき。

此の間不幸なるバラチン侯は帝國内に身を委する所なく（一千六百二十一年）、彼の世襲領土をも防禦するの暇なく遁れて和蘭に走れり、彼の領邑はスピノラの西班牙人占領したりき。此の成功は再ひヴヰンナ及びマドリッド兩朝の大望を喚起したりき。されば、チャアルス五世及びフイリップ二世の執りたる計畫は再ひ演ぜられ、和蘭及び新教の勢力衰滅を夢想することゝなり惹ひて日耳曼の自由も直ちに破壞するに至るべきことを空想したり。

然れども、フレデリック五世の兵氣は懦弱に流れ、苟も劍をだに弄するものは悉く勇者の數に算へらるゝが如き狀態となり、又フェルヂナンド軍のボヘミアになしたる暴戾は大に人心に反抗復讐の念を勃發せしめ、其の結果マンスフィルト伯の下に蝟集したる人民は優に一軍を編成して伯の指揮に屬するに至れり。切掠を以て報酬とせる二万の冒險者を率ゐてマンスフィルドはバヴァリアの將ティリイの追擊を避けて、ボヘミア及び上部バラチン領を逃れ、フランコニアの全部を横斷しレン部バラチン領に至り、選擧侯バラチンと會したり。一千六百二十二年マンスフィルドはミンゲルセイムに於て西班牙人及ひティリイを擊破したり。西班牙人とティリイとは軍を合したるもマンスフィルド及びバデン・ダーラックのバルグレエヴと分れて兵力を割きしかば、ヘスに於けるウィムブヘンに敗績したり。時會、バンスウヰックのクリスチヤンと呼へる冒險者現はれ出て教院を掠め、廟祠の神像を熔かして貨幣を鑄造し、以て軍資となし、日耳曼の北方より兵士二万を召集してコンスフィルドの軍に投ぜんことを冀望したり、ディリイの混成軍之れを聞きて其の進軍を遮り、メイン河のホチストに於て擊破したり、是に至りてバラチン領再び敵の有となれり。マンスフィルドはシヤンペインの境に血路を開きたりしも通過すること能はず、轉じて道をネザルランドに取れり。此處にブランスウヰックに會せり、ブ

ランスウキックはフリュウラスに於て西班牙軍と激戰して重傷を蒙りながらも、陣鼓喇叭の裡に軍前に立ちて一腕を切斷したる勇者なりき。和蘭人の來援を得西班牙軍をしてベルグ・オプ・ゾウムの包圍を解かしめたり。是に至りマンスフィルドはウエストファリアの地を掠略し、又ウエストフリイスランドに入り、兵備を嚴にしたるを以て、テイリイ之れを擊退せんとするも能はずして斷念したり、されば、マンスフィルドは佛蘭西に至り、或は英吉利に航し、墺西太利に對する敵を探し或は攻撃の手段を講究するに餘念なかりき。

然れども、ラティスボン議會はフレデリック五世の侵略地を領有することを承認したり。タニュウブ河及びボヘミア山間の上部パラチン領幷に選擧侯の特權を合せてバヴァリアのマキシミリアンに交付し、また西班牙軍はライン河にある下部パラチン領に屯し、之れを占領したり(一千六百三十三年)。フランスウキックのクリスチャンは交戰を繼續したれども、マンスタア僧正領地にあるスタットロオエンに於て敗績し和蘭に退却するの已むなきに至れり。

日耳曼諸公の紛擾及びサキソニイ、ブランデンバルグの選擧侯等は旗色を同じ

遲疑して動かざるにより、宗教改革の運命は危害の境に瀕せり。曩に撰擧侯パラチンを貶したる新教徒等は侯の勢力盛衰は直ちに己等の盛衰なりしことを今に至りて了解するに至りたり。ブランデルバルグ撰擧侯は瑞典と協商の局を結ばざるに丁抹王は日耳曼宗教改革援護の大任を獨ガスタヴァス・アドルファスに委ねざらんがため、自身帝國に侵入したり。和蘭英吉利は艦隊及び軍糧の支給を約しリシエリュウ又、窃かに軍資を送れり。クリスチャン四世は下部サキソニイ諸州の誘ふ所となり、一千六百二十五年ステエドよりエルブ河を過れり而して第一戰の間はエルブ及びウエサル兩河の地を保ちたりしが、テイリイの攻撃は此地に及ばざりし。然るに翌年他の敵軍彼の後軍に起れり。

ワレンステンといへるボヘミアの一貴族あり、マンスフィルド編成の兵式に則りて一軍を組織し、皇帝の名義を以て兵五万を得たり。フェルデナンドは此時に至るまで單に羅馬教同盟軍のみを有するに過ぎず、テイリイはバヴァリア侯名義の一司令官に過ぎず、兵戰の命令はマニッチ朝より發せられ、事件の處理はマキシミリアン及び其の同盟の利益に屬し、墺西太利家の休戚は眼中になかりき。加之宗教上の

利害より起れる戰爭も今は政治上の性質を帶ぶるに至れり。始めフェルヂナンド二世は單に異教徒に對して爭鬪したれども、深意は宗教の名義によりて獲たる戰捷を利用して曾てチャアルス五世の一時攫取したる帝國の大權を回復せんことを冀望したるなり。ワレンステンは二世の心中を看破して志望成功の策略を献したり。されば、ティリイの西方デンスを攻擊し、ブランスウヰック侯爵地に於けるラッタアにて敵軍の一部を破り居たる際、ワレンステンはデッサウに於てマンスフィルドを破り、追擊してシレシアを通過し、終にハンガリイに退却せしめたり。マンスフィルドはトランシルヴァニア公ベスレン、ガボルの兵を率ゐて來り會せんことを待しに、却て、冷遇を蒙り、疲勞と病苦に心を失ひてボスニアの村邑に落去して死せんとせり(一千六百二十六年)。ワレンステンは轉じて丁抹人を攻擊し、ワグリアのヒリゲンハアゲンに於てバデン・ダアラックのマルグレエヴを破り、殆んと全ホルステンの地を占領したり、彼は又ストラルサンドのハンス市に攻擊を加へしがこは効果なかりき、此の市にして陷落せんか、バルチックの制海權を獲得することを得べかりしならんに、クリスチャンはルベックの平和を締結し、其の同盟者を失ひたりしも、破滅を免るることを得たりしは幸福といふべし(一千六百二十六年)。

當時帝國軍の勢力は空前なりき。ワレンステンはメクレンバルグ侯爵地を與へられ、バルチックの海軍提督に任じ、十万の精兵を率ゐて日耳曼の北部に戰に從事し、また restitution の布告勵行に力を注ぎたり。一千六百二十九年三月六日フェルヂナンドは有名なる布告を出して、アウグスバルグ平和以後寺領土の公用となり或は新教の有となれるものを悉く復舊すべきことを命じたり。此の布告たるや墺太利家の秘計を發表したるものなれども早きに失し、ために戰亂の害毒久しきに亘りて止むること能はざるの因となれり。布告は陽に宗教上の名義なれば、羅馬教徒は始め喜悅に心醉したりしが、皇帝が四僧正領土を皇子の一人に與へ、且つ復舊領邑の大部分を舊所有者に返附せずしてゼスイト派に附與したるの行爲を目擊するに至り、始めて皇帝の秘計を看破し喜悅は怨恨失望に變じ人心大に背離するに至れり。ワレンステン揚言すらく、世に選擧侯又は貴族の如き何等の必要あることなし國家の事一に佛蘭西、西班牙の如く一王の管理に委ねざるべからずと、これ蓋し彼が其の始めフィルディナンドに秘計を献したると相應じたるものなり。

然れどもリシエリュウは佛國の安危に關する計畫に留意すること日久しく、已に伊太利に於て西班牙家のヴァルラリナ及びマンテュアに對する野心を除去したるのみならず其の注意國家の内治にあるが如き感ありしも、巧みに黄金を散じて外交に鞅掌し、戰の乘ずべき機會を洞觀するに寸隙もなりき。一千六百四十年リシエリュウはソレンステンに對する日耳曼人の反抗を利用し密偵ジョゼフの機智によりて巧にラティスボン議會を操縦し、其の官職を免ぜしむることを得たるのみならずソレンステン免官と交換問題たりし默契の羅馬王の名義を皇帝の一子に與ふることをも拒絶せしむるの權略を施して成就したり。加之フェルヂナンド名將ワレンステンと離れ、其の軍勢また四万人に減少せるの時に當り、瑞典王はリシエリュウの招聘に應じポメラニアに上陸したり(一千六百三十年)。

ボオランド王シギスマンドは露西亞に於ける成功の餘威に乘じ瑞典王を目して簒奪者とし、之れと交戰を始めたり、何んぞ圖らんガスタヴァスは三十年戰爭の勇者にして、其の勢力決して自己の敵にあらざることを覺らざりしなり。ガスタヴァスは一千六百二十一年リガを略し、廿五年リヴォニア全土を奪ひ翌年プロシアの一部を領したり。然るに廿六年シギスマンドはフェルヂナンドに說き以前の援助に酬はしめんため、己を援けしめたり。是に於て墺西太利の大軍來援し、共にガスタヴァスを攻めしが、二十九年ガスタヴァスは戰敗れ勢力頓に窮迫したり、時にリシエリュウは英吉利、ブランデンバルグの後援を得、ガスタヴァスに說くに無益の戰を繼續するの不利なることを以てし、アルトマルクの平和を締結することを得せしめ、六年間兵戰の中止を見ることを得、またリヴォニア及びプロシア海岸一帶の地は依然として瑞典の有に存ぜしめたり(一千六百二十九年九月)。

ガスタヴァス今は兵戰の累なく、國家成立に顧慮することなきに至りしよりリシエリュウは彼に年金百二十萬「フラン」の保護金を給し、日耳曼に於ける大舞臺に入演せしめたりき。

瑞典及び佛蘭西時代(一六三〇年—四八年)。

ガスタヴァス・アドルファスは雷神の猛威を振ひて帝國に出現し、巧に詭計を運らし、敵をして混亂の渦中に投せしめ、數ヶ月にしてポメラニア全部を占領したり(一千六百三十年)。ブランデンバルグ及びサキソニイの新教撰擧侯等はガスタヴァスの勢力を忌み、宗教上の感念を離れて己等の安危を慮

り、外國の君主に土地を與ふることを好まず、フェルヂナンドに強請してポメラニアの允許を自己の手中に與へられんことを冀ひ、ガスタヴァスに土地及ひ城砦の明渡しを拒みて攻戰の便を與へず、且つ本國瑞典の交通を安全ならしめざりき。帝軍の包圍せるマクデバルグも撰擧侯等遲疑して動かず、ガスタヴァスまた救ふこと能はざりしかば終に陷落し、敵將ティリイのために悲慘の虐待を蒙れり(一千六百三十一年五月)。大慘劇は疾く撰擧侯等の心を激し、終に志を決してガスタヴァスを援助したりしかば、ガスタヴァスは帝軍を追擊してレープシックに近きブリイテンフェルドに之れを擊退したり(九月)。サキソニイ、ボヘミアを通じてヴィンナに進軍するの際、ガスタヴァスは自ら兵を率ゐて西方の諸州を降し、フランコニア、バラチンの僧官撰擧領土を畧取したり。かく西班牙軍及び帝軍の兵勢を分離したるを見るや、直ちに歸りて帝軍の中堅を突擊したり。彼はバヴァリア通路の要衝ドナウウエルスを占領し、レッチの通路に砲火を加へテイリイに重傷を蒙らしめ、續いてマニッチに侵入したり(一千六百三十二年四月)。マキシミリアン侯は城に籠居して大勢挽回の希望もなく、曾て彼がバラチン伯に與へたる同一の運命を待つの窮境に在りき。

フェルヂナンド二世は瑞典、サキソン兩軍の兵勢を結合してヴィンナ城下に迫れるを見て大に驚き一時貶斥したるワレンステンの來援を得んとて屈辱を忍び、再び之れを招かんとして總指揮官の大任を與へ、漸く招致することを得たり。ワレンステンは貶黜の身にありしと雖も、名聲は人々の尊重する所なれば、立つて戰に現るゝや部下に集まるもの忽ちにして優勢なる一軍を編成し、一舉してボヘミアよりサキソン人を擊退し、イーゲルを通じてガスタヴァスに向つて進軍したり。イーゲルに至りしときマキシミリアン侯は敗殘の兵を率ゐて來會したり。ワレンステンは堅く計策を定め、靜かに北方サキソンに轉じ、エルブ、サアル間の地を撰みて冬期越年の保塞を築きしが、ガスタヴァス之れを知り、前年行軍の狐疑に基きマグデバルグを失ひたることありしが、今又同一の理由によりサキソンの敵に奪はるゝことを好まず、速かにスリンギアを通じて急行し、ワレンステンの不意に乘じてエルファアト及びニュレムベルグを奪ひたり。時會〻十一月の初に當り、寒氣凛烈膚を裂く許りなりしかば、ワレンステンはガスタヴァス冬期中交戰せざるべしと思考し、メルスバルグ、トルガウの間に壁壘を築きて冬陣の用意をなし、副將パペンヘイムを

ラインランドに歸らしめ、行々ヘエルを略取せしめたり。然るにガスタヴァスは敵の準備未だ整はざるに乘しワレンステンの本隊に突擊を試みたり。ワレンステンは戰の避くべからざるを知り、急使を遣はしてパペンヘイムを招還し、急に堤壁を壞ち、平野に深溝を穿ちガスタヴァスの來襲を待てり。此の戰は實に歐洲環視の間に二大優の決戰場なりき。十一月十六日終に兩軍ルッチエンに衝突したり。初回の交戰に於て瑞典王は銃丸に中り斃れしが、副將サキス・ウェマルのベルナアド侯はガスタヴァスに亞ぐ饒將なり、直ちに復讎の熱情に驅られ、奮戰勇鬪敵將パペンヘイムを殺し、猶進んで敵の堤壘に肉薄し帝國軍を擊退したり。

かく戰勝を博したりしも新教徒及び瑞典人の間に起りたる分裂によりて再び勢力衰退し、帝國軍再び各地に抗勢を示すに至り、フェルヂナンド二世はまたワレンステンの用なきを思ひ、且つ私に彼の非望を危惧したり。ワレンステンは占星者の言を信し、自らボヘミア王位に登るべしと思惟せしが、イーゲルに於て暗殺せられたり、時に一千六百三十四年二月なり。ワレンステンの相續者ピッコロミニイ、ガラス、ウェルスのジョン等兵を率ゐて瑞典人及びベルナルドを擊てノルドリンゲンに大勝を獲たり(九月)。瑞典兵の死するもの一万二千人、生擒六千人、中に名將ホルン侯あり、ライン河に逐はるゝ者或はポメラニア方面に逃るゝものありたり。日耳曼諸公は再び此處に兵を止め、サキソニイ撰擧侯はプレエグ條約を締結し、二三の除外例を合せresitutionの布告を承認したり(一千六百三十五年五月)。

ガスタヴァス・アドルファス戰沒して其の希望と運命はリシエリュウの收むる所となり、今や佛國は自ら三十年戰爭に干與するに至りたり。當時リシュエリュウは內國の事情一も牽制するものなく、專ら力を外國に用ゆることを得るに至り、墺西太利家對抗の爭亂に當り丁抹を保護し、或は瑞典を援助したり。始め彼は墺西太利と西班牙に對して固く同盟の網を蔽ひ居たり。パリ會議に於て一万二千の日耳曼同盟を約し、之れが保證としてアルサスの地を與へ(一千六百三十年十一月)、セント・ジャアメン會議に於てはサキス・ウェイマルのベルナアドと其の軍を味方となし、(三十七年十月)、コンピイエンに於ては瑞典の元老オクセンスチイルンと協商する所ありたり(四月)。またウエセルに於てはヘッセ・カッセルのランドグレエヴに約するに保護金を支給し、之れに對して兵を派遣せしめ(十月)、パリに於ては和蘭人をしてネザルランドと分離

せしめ(二月)、リヴォリに於ては瑞士人及びサヴォイ・マンチュア及びパルマの諸侯と和親を結びたり(七月)。

如上の諸條約を見は如何に戰爭の區域大なるかを知るに足らん。リシエリュウは佛國の周圍に戰を起さんとしたり、即ちライン河の兵陣を以てシャンペイン及びロオレンを保護し、アルサスを略せんとし、ネザルラントを攻めて和蘭と分割せんとし、日耳曼に進軍して瑞典と兵力を合せ墺西太利の勢力を破らんとし、伊太利にありてはヴァルテリナに於けるグリッソンの主權を保持し、ピイドモンドに於ける佛蘭西の勢力を維持せんとし、ピレニイ山方面に於てはルウシロンを奪はんとし、又外洋及び地中海上に在りては西班牙艦躰を破摧し、ポルトガル及びカタロニアの反亂を助けて伊太利の海岸を嚇さんとしたり。

トレヴスの大僧正西班牙人の迫害を蒙り遁れて佛國に走り保護を乞へり、是れ戰亂破裂の口實を佛國に與へたりしなり。ネザルランドのシャティロン及びブレゼはリエジ附近のアヴェインに於て大勝を博したり(一千六百三十五年五月五日)。然るに和蘭人は優勢の佛軍國の近傍を壓するを見て大に惧れ、弱勢の西班牙軍に私に心を寄せ、佛軍に援助を與ふること少からしめき。西班牙軍は此の好機に乘し大に利する處ありたるのみならずピッコロミニイ一万人の帝國軍を率ゐて來援したれば軍氣大に振ひ、佛軍猶和蘭に在る暇に乘じヒカルデイに侵入し、ソムメを横切りコルビイを占領したり(三十六年)。此の報に接し一時佛國の朝廷及びパリ市は震駭したり然れども速に全市民は勇氣を回復し、職工夫に至るまで集まりて義勇兵を組織し、市會議員等は歩兵一万二千人騎兵三千を三ヶ月に集めまた軍糧を得んことを王に奏請したり。ルイ十三世はリシエリュウも及ばざるの勇氣を示しロイル退軍を拒んで聽かず、却て四万人を率ゐて進軍し西班牙兵を國境より驅逐してコルビイを回復したり。王弟リシエリュウの威名を忌み、窃かに之れを暗殺せんとし、好機に乘じて決行せんとしたりしに謀泄れリシエリュウ僅に災厄を免れたり(三十六年)。バルカンディの侵軍は思はしき効果なかりき。ガラス及びロオレン侯の兵はセント・デュアン・デ・ロスンに到りしも、頑固なる抵抗を蒙り、ランツァウ伯のために擊退せられ、サキス・ウエイマル侯の猛烈なる攻擊に遇ひ、佛軍算を亂してコムテに退軍したり。

翌三十七年カルディナル・デ・ラ・ヴァレットは上部サムブル、ガトウ・カムブレシス、ランド

レシース及びマウビユウジの諸邑を畧せり。リシエリュウは貴族の制御し難きにより、溫順にして効果ある僧官に兵馬の指揮權を委托することを好みしかば、ボルドウの大僧正ソルディスを海軍提督としたり、ソルディスは三十八年フォンタラビアの沖に西班牙艦隊を破り、ネエプルス及び西班牙の海岸を掠略したること一再に止まらざりき。然るに同年ライン河附近に於て大勝を獲たり、即ちサキス・ワイマルのベルナルドはラインフェルドに帝國軍を破り、其の將ウェルスのジョンを生擒し、爾後三大勝利の後ヴュ・ブリサシユを擊破したり。ベルナルドは戰捷に醉ひ、自立してアルサス及びブリスガウに主權を握らんとして病沒したれば、佛國は好機に乘じて勝利の威名を奪ひ軍隊をも合せたり(一千六百三十九年)。

アルサスは墺西太利に屬し、西班牙の包圍せるアルトアは次回の役に於て侵入せられたり。ラ・マイレラ、シャティロン及びシヨウルネスの三元帥はアラスを包圍せり。ベックとラムボア三万人に將として急ぎ救援に赴けり。三元帥は意見互に相容れず、一は壁堤に止まらんと欲し、他は戰列を抽んでて攻擊の擧に出んことを冀ひ、衆議決せず、遂にリシエリュウの採決を仰げり。リシエリュウ答へて曰く、王卿等を統帥とし給ひしは卿等の技倆を信じたるにあり、戰列を出てゝ戰ふと戰はざるとは一に卿等の心にあり、然れども城邑を畧取するは卿等生命を堵するの義務あるべし」と。後數日西班牙軍を敗りアラスを奪へり(一千六百四十年八月)。是れ墺西太利家より略取せし第二の城邑なりき。

同時に佛蘭西は伊太利の北部を攻擊したり。一千六百三十七年ヴィクトル・アマデウスの死後弟ユリグナノのトオマス公及びカアディナル・マウリス等は攝政の事よりヘンリイ四世の女クリスチンといへるアマデアスの寡婦と好からず、却て西班牙軍を援助となしたり。リシエリュウはカセール、テユウリン、及びイヴリアに於て三大捷を博したる驍將ハルコルト伯をピイトモントに派遣してクリスチンを助け攝後たるの權利を保確し又巧妙の條約をサヴォイの諸公と締結し、再び佛國の同盟とせり(一千六百四十二年)。一千六百三十五年ロオハン侯再び西班牙人をヴァテリナより驅逐したり。

西班牙人は當時外列國に對して攻勢を執るの餘裕なかりき、そはカタロニア人及びポルトガル人等兵を擧げて西班牙に反抗し居りしかば、之れを防阻するに全

力を注がざるを得ざればなりなり(四十年)。カアデイナル・リシエリュウは夙に此等の反挨を熟知し、葡國の親王ブラガンザのジョンに援助を與へ、カタラン人を勸誘してルイ十三世をバルセロナ及びルウシロン伯に承認せしめたり(四十一年)。佛軍の一隊はラ・モス・ボンダンコルトを將としてカタロニアに侵入して西班牙人を擊退し、他軍は佛王自ら將としてペルピグナンを畧し、ルウシロンを取つて佛國の有とせり(四十二年九月)。

當時西班牙は國内反亂の鎮壓を事とし、外國の權利を保持するの餘裕なかりしかば、日耳曼に於ける墺西太利家の兵勢は孤立の狀態となりて累卵よりも危し。一千六百三十五年に於けるサキソニイ提督侯の背反以後ポメラニアに退陣せる瑞典軍はストックホルムの國會のポオランドより歸陣を命じたる軍隊の來援を得、加ふるに優勢なる佛軍の敵を牽制するありて、第二のガスタヴァスなるバネル直ちに起つて攻擊を初め、三十六年ブランデンバルグのウィットストックに於て帝國軍を破り、三十九年サキソニイのケムニッに於て再び之れを破り、ボヘミアに侵入したり。四十一年當時の有名なる戰畧家グヴリアント伯の補佐によりてダニュウブの堅氷を渡り、深く敵地に侵入してラティスボンに到り、始んど帝國の國會を奪ひ、帝を生擒せんとしたり、然るに融雪不意に起り、フェルヂナンド漸く免れ、數ヶ月の後惡疫流行し、バネル病沒せしかば、幸にも帝の身全きを得たり。バネルの後承トルステンソンは驍勇の將にして兵を行ること疾風の如く、到る所悉く勝ち、グロガウスクウエイドニッ(シレミアの地)及びサキソニイのブリイテンフェルドに光輝ある戰捷を博し(一千六百四十二年)大に歐洲の天地を震動したり、其の間グブリアントはウェイマルの軍隊を率ゐて帝國の西部に冒進し、瑞典兵は東方より帝國を攻擊するありて帝國軍到る所に敗潰したり、彼は一千六百三十一年ウルフェンバッテルに於て勇將ピッコロミニイを破り、四十二年コロンの撰擧侯領地ケムペンに於てラムボイの大軍を擊破し到る所日耳曼の不平黨を援けて帝國を横行濶歩したりき。

西班牙はリシエリュウの計略によりて手足の出ずる所を知らず、然るに彼の死を聞きしより衰沒の勇氣を回復し、シャンペインに向つて進軍し、老將ドン・フランシスコ・デ・メロスを將としてロクロイを包擊したり、ロクロイ一たび西班牙の有たらば、パリの防備は無効に終るべき要害の地なり、されば西班牙は一擧に之れを奪ひ

てバリの死命を制せんとするにありき。當時ロクロイは寄兵を以て守り、其の將は二十一歳のエギン侯ボルボンのルイスにして後年大コンデ侯となりし人なりき。兩軍遂に四十三年五月十九日に相會せり。騎兵の兩翼は中堅のまだ起たざるに先ちて交戰し、コンデ侯右翼を率ゐて敵の騎兵を擊退し己が左翼メロスのために破らるゝや西班牙軍の後方を廻り敵の右翼に突貫して之れを擊退したり。西班牙の歩兵また動かず、コンデより進み包圍して三度攻擊し、其の隊列を破り指揮官老フユンテス伯戰死しコンデも亦兩腕に五ヶ所の銃瘡を蒙りたり。

エンギン侯は自ら任ずるに新アレキサンダーを以てし、燃ゆるが如き精氣に驅られ寸分の隙もなく戰捷の餘威を振ひ、益〻進んで敵を攻め、年毎に戰捷を獲ざるはなかりき。西班牙軍の佛國に影を止めざるに至るや、コンデは直ちにシオンヴィルを奪ひ(四十三年八月)更に進んで墺西太利及び日耳曼同盟軍を襲擊したり。ウェイマルの軍はロスウェルを畧取せりと雖も、名將グブリアントの戰死するあり、また諸將の統御宜しきを缺くありて陣地互に離れ居たれは帝國軍の嚇す所となりダットリンゲンに戰利あらざりき(十一月二十四日)。テュウレン殘餘の兵衆を集め自ら將帥となりコンデ一万の兵を率ゐて來り會せり。兩雄力を合してブリスカウに於けるフレバルグ城壁下にバヾリアの將マアシイを攻擊したり、二回の交戰常にコンデは熱狂の佛兵に擁されて大勝を獲たり(四十四年八月十六日)。然れども此の勝利は寧ろ恐怖すべき虐殺なりき。マアシイは、隊伍を亂すことなく退却したり、然るに二雄のためにフリップスバルグ、ウォルムズ及びメエンスを略せられ、ラインの兩堤最早帝軍の有にあらざるに至れり。

コンデ侯戰捷の名譽を擔ひてパリに凱旋して、市民歡喜の裡に在り、テュウレンは此の時トルステンションの招に應じ豫て互に指定したるヴキンナの城下に赴かんとせり。トルステンションは已に遠きモラヴキアの地よりジャットランドの邊境に至るまで遍く日耳曼全土を横斷し居たりしがガラスの率ゐる帝國軍己を半島に包擊せんことを企つるを聞き、ブランデンバルグのジャッタアボックにガラスを破り(四十四年十一月)、又ボヘミアのジャンコウッツに於て帝軍の一隊を擊破したり(一千六百四十五年二月)。トルステンソンのモラヴヲアに歸りブランを包圍し、ヴキンナを嚇し、ダニュウブの平原に於てテュウレンに會合せんとて招きたるは實に此の時なりき。

テュウレン兵力を恃み深く帝國に侵入し、ためにマリエンサルに於てマアシイに撃破せられたり(四十五年五月)、然れどもエンギン侯凶報に接して急ぎテュウレンを援けて敵軍を撃退し、バヴアリアに進入し、ノルドリンゲンの血戰に於て帝國軍を全滅したり、此の役に勇將マアシイ陣沒したり、時に一千六百四十五年八月なり。四十六年侯はフランダーを通過し、ダンカアクを包圍して西班牙軍に對抗し、終に陷れて佛國の有となせり。翌年侯はカタロニアに入り、レリダを包擊したりしも、二雄(侯及テュウレン)の武能く之れを拔くこと能はず却て擊退せられたり(四十七年)。こは初めての敗績なりし、然れども侯は他の方面に戰捷によりて耻辱を雪ぐことを得たり。此の時西班牙人は北方に於て侯の不在に乘じ威力を回復し、且つ皇弟レオポルド大公兵に將としてアルトイスのレンスに迫り來れり。コンデ之れを擊ち二時間に亘る激戰の後遂に大勝を獲たり(四十八年八月十日)。

是等の戰勝を耳にしてテュウレンは日耳曼の戰役に從事し、大膽と巧妙なる戰術により到る所其の名聲を博せざるはなかりき。トルステンソンの後承ランゲルは瑞典人と力を合せ四十七年十一月にロオウンゲン四十八年五月にアウスバルグ附近のサスマルシヤウセンの役に勝ち、レンに在るレッチの通路を扼し、遂に七十六歳のバヴアリア撰擧侯をして領邑を捨つるの已むなきに至らしめたり。此の時大雨襲ひ來り、ライン河の水漲りしかばランゲル進んでヴキンナに侵入することと能はざりき。

是より先(四十一年)平和の協商提出ありたるも、四十八年四月十日に至り漸くウエスファリアの二域邑に開くを見たり、次でマンスタアに於てプロテスタント諸公及び皇帝の諸公の代表者の間に協商する所ありたり。歐羅巴の地圖は三十年戰爭以來改造せらるべく、帝國に新組織を興すべく、又基督教國民の民權及び宗教上の特權を制定せらるるにありき。佛國よりは才幹ある協商者アヴオ伯及びアベル・セルヴキエンの出席ありたるも外交の手腕を有せるコンデ及びテュウレンの武力は能く百說を排して平和を議決せしめたり。プレエグ城瑞典人に襲はれ、帝大に恐れ平和に心を決定したり。是に至り西班牙兵は當時佛國に起れるフロンデ事件に乘じ利する所あらんとし、兵を引て歸れり。他の諸州は戰亂の一日も早く平なるを冀ひて平和條約に署名したり(一千六百四十八年十月二十四日)。

三十年戰爭に於て墺西太利は日耳曼に起らんとする宗教及び政權を防止せんことに力を注ぎ居たりしも、戰敗れて如何ともなす能はず、志望全く水泡に歸し、破壞の目的物却て根底を固め、其の勢益々強大となれり。新教徒は全く宗教上の自由を得るに至り、一千五百五十五年アウグスバルグの宗教平和は茲に確立するを得たり。羅馬教ルウサー教及びカルヰン教の三大宗派は均一の權利を享有し、其の教領地及び禮拜の執行に關しては百事皆一千六百二十四年に於ける日耳曼の舊態に回復したり、但し一千六百十八年normal yearを公布したるバラチン領のみは例外なりき。寺領地の多數は新教徒諸公の賠償に供するため平分せられたり。かくしてブランデンバルク撰擧侯はマグデバルグ、ハルベルスタット、カミン及びミンデンの僧正領土を有し、メツケレンバルグ侯はスクウェリン及びラッツバルグの僧正領土を取り、ヘッセ、カッセ、ルのランドグレーヴはハアスクフェルドの寺領及び六十万「クラウン」をサキソニイの撰擧侯はラサミア及び數多の寺領を享有したり。バラチン家のために別に第八撰擧位地を創置したり、然れどもバヴァリアは上部バラチンを領有せり。帝權今は强壓を蒙りて無効の有樣となり議會は諸公及び日耳曼諸州に同盟、戰爭、平和及び新法律の諸問題に關する投票權を保留しまた各領土内に於て主權の執行權を確定し、外國と同盟締結の特權を享有したり。瑞士と和蘭は日耳曼の事件に關係せざりしも、今は此の法律の制裁を受くることゝなりたり。

墺西太利の敗亡を誘致したる佛國及び瑞典の二强國は各自必要なる賠償を獲たり。即ち瑞典はルウゲン、ウオリン、及びユウセトムの諸島ウェスマル、フレメン大公領土のステッティインを併せ、西部ポメラニア及びヴェルデン大公領土、換言すればオデル、エルブ及びウエセルなる日耳曼の大河口に在る部域、金五百萬「クラウン」及び議會に於ける投票權利箇數三箇を有したるなり。佛國はロオレンを保持し、此の地の封侯は佛國の諸條件を認容して之れを返附するの約をなしたり。またメツツ、タウル及びヴエルダンの三僧正領土を領有し、一千六百三十一年サヴオイ侯より帝國に讓與したるピクネロルの邑を取り、ストラスバルグを除くの外アルサスの全部を有したり、これによりて佛國の國境はラインに面ずるに至れり。加ふるにヴユー、ブリサッチ河の東岸を占有し、フィリップスバルグに守兵を置くの權利を

有し、ライン河の航行自由なるを得たり。

これ佛國に對して非常なる利益なりといふべし、そはアルサスを領してより佛國は一面ロオレン及び日耳曼に接し、他面フランチ・コムテの北部に在りて此等の二邑は爾後掌中に在るの形勢となりたればなり。

かくて佛國は自國防備に關しては巧みに其の邊境を營み、外に向つては攻勢の體度を保てり。且つビグネロルを通じアルプ山外に在る伊太利の一部を有し、ヴユー・プリサッチ及びフィリップスバルグに依りライン河外の日耳曼に足底を着することを得るに至れり。尚加ふるに日耳曼諸州は外國と同盟を締結し得るの權利に基き絶へず貧弱の諸公を略取し、條約執行を勵行するため日耳曼に於ける事件の發生毎に關與せざるはなかりき。爾來帝國は四五百州同盟の一變形に化し、ルウサー敎或は羅馬敎は互に一方に對峙し、王權あり、共和政體あり、貴族政治あり、僧侶政治ありて近世初期の伊太利の如く、帝國は宛熱歐州の戰場となれり。

ウエストファリアの條約は十七世紀の中葉より佛國革命に至るまであらゆる外交上協商の基礎となりたりしが、歐州に於ける墺西太利家の大權に終り、ボルボン家の興隆に道を啓きたり。

第十九章　スチュアート家とクロムウェル治下の英國

スチュアート家

ボルボン家がルイ十四世治下にかゝる隆盛を來したる所以のものは、一に三十年戰爭の結果、日耳曼西班牙の二國に分家せるアウストリア家を佛の膝下に屈服せしめたるに由るとはいへ、又實に之れと時を同ふしてスチュアート家の無能なる、嘗てエリサベス女皇の偉業よく、優秀の地に起したる英國をば再び庸劣の地に落下せしめたるに由るなり。

エリザベスの死後英王ヘンリイ七世の女系を繼承せる曾孫メリイスチュアートの嫡、蘇王ゼエムス四世は英、蘭兩國民の歡呼の裡にゼエムス一世の位に即きぬ。始め王ゼエムス一世は狀貌甚だ畸形、其の醜殆んど見るに堪へず、擧措亦齷齪として毫も王者の容威なく、加ふるに性情陋劣にして德操の稱ふべきものなし、會〻寛仁慈惠の行あるも畢竟自己が奢侈榮耀の餘慶に過ぎず、博覽の識なるが如きも又之

れ誇學のみ、平和を愛好するが如きも實に彼が怯臆の性あるがため、只だ戰に事無からんことを欲したるのみ而して其の政畧や譎詐其の交情や輕浮、遂に眞の德として認むべきもの一もあるなし。されば、にやヘンリイ四世は彼を呼ぶに「マスターゼエムス」を以てし、サアリイ公は嘲りて「最も賢明なる愚物」と曰へり

ゼエムス一世は對外策として、嘗てエリサベスの下に英國の偉大を致したる新教政策を放棄しまたヘンリイ四世の一大計畫に參助することを拒み、却つて西班牙の歡心を得んことに努めて彼が婿なるフレデリック、五世、エクトル・パラチンの沒滅を殆ど關せざるものの如くに傍觀しぬ。內治策としては專ら帝王神權說を提唱して自己の權力を絕對不可侵のものたらしめんと計りぬ。蓋し此政策こそ彼が全行爲を支配する動機となり、また其の政治の限本原理を供したるものなりけり。

エリザベスのために痛く迫害を蒙りたる舊教徒は自ら賴むらく、斯王の下に於て幾分か從來の虐運を緩和し得んものと、されどゼエムスは依然として虐待を續けぬ。是に於て乎一千六百〇三年の初期彼等は「メエン」(Main)「バイ」(Bye)の二ヶの隱謀を圖りて復讎を、試みぬ、此の凶變のために名士の災禍に罹るもの多く、先朝の權臣ウォルタア・ラレエも又實に其の一人なりき。就中最も過激なる教徒は六百〇五年兇惡無比の隱謀を企てたり、これぞ所謂「火藥の隱謀」なり。

國會の開會に先き立つ二三時間舊教徒の一貴族、匿名の一密書を手にしぬ、書に曰く予は貴下に勸告す貴下にして生命を重んぜられなば、國會への出席を暫く遲延せられむことを、蓋し今や神と人と共に今世紀の橫逆を所罰せんとしつゝあればなり。此書を燒棄せらるゝ頃には其の危害或は過ぎ去るべしと。書は直ちに各諸大臣に廻送されぬ、されど彼等は之を一笑の下に附し去りぬ。此時に於て王は實に此等有司よりも賢明にして必らずや一大災厄の來たるべきと豫測したり。かくて直ちに人を使はして上院の床下を檢せしめたるに、果して三十六バアレルの火藥の埋設されたるを發見したり。此火藥こそ實に王、王族、貴族、下院の議員すべてを一堂の內に鏖殺せんと謀りたるものなり。徒黨の一人の立所に捕獲され拷問に遭ふて遂に共謀者の面々皆な舊教徒なる事を白狀したり、是に於て彼等は盡く捕へられて死刑に處せられたり、中にはゼズイト派の教父ガアネットも加へら

れたり。英國にて爾來毎年十一月五日を以て祭典を行ふは全く此の二變を紀念せるなり。此隱謀發覺の結果舊教徒は愈〻眞の迫害を蒙るに至れり。是より以降彼等は宮廷に出入することを禁ぜられ又ロンドンに往來することを許されず而して其の住居は首都を去ること少くとも十五キロメートルを距れざるべからず又七キロメートル以上を去る地に行かんとするには役人四名の連署ある免狀を携えざるべからず。更に彼等はルイ十四世の改教徒に禁止したると同じく醫師辯護師等高尚の職業を營むこと幷に裁判官、區役吏等公職に就くことを禁ぜられたり。結婚するに就きても夫妻何れか一方舊教を奉ずるものなるときは舊教者は對偶者の財產に就きて何等の請求權なきものなりと認められたり。而して彼等一ヶ月の活計は十磅を超ゆべからず、又饗宴費も同上額を超ゆるを許されず尙其の家宅は何時たりとも搜索を拒むことを得ず、之れ明かに市民の個人的自由幷に家庭の神聖を保護する英法に背乖せるものなり。かくて一千六百〇五年彼等は奉君盡忠の宣誓を要請せられ遂に何時たりとも事あるに際しては必らず王を擁護すべきことを宣誓せしめられ、剩さへ法王の破門を宣告したる王皇は臣下之れを廢するを得べしとの教條をば不義不正の邪義なりと認めざるべからざらしめられたり。如斯き無限の窘迫を蒙りたる英國の舊教徒が漸く自由なる民法の恩澤に浴するを得たるは實に十九世紀の事なりとす。

非國教徒（ノンコンフォルミスト）は當王より好遇せらるべき理由を有す、蓋し王は蘇格蘭に流布する此教の下に人と成りたるを以てなり、之あるに係らず王は假借なく彼等を苛遇しぬ。清教徒は羅馬教よりも更に〳〵に王の厭惡する所となれり。蓋し斯教は王の最も重んじたる宗教上の階級權を藐視したるを以てなり。之れを要するにゼェムス王は生涯を通じて全然英國教會に依着し以て帝王神聖權を否認したる舊教徒を迫害し、兼て又王の嫌忌せる共和制の傾向ある非國教徒を窘迫したり。されど十七年蘇格蘭に英國教樹立（アンジリカニスム）せんとの企圖は全く失敗に飯しぬ。清教徒は遂に二十年王の毒手を免れんため亞米利加に航しマサチュウセッツ州のコッド岬近傍の地を求めて玆に自由の禱を捧げたり。今日の亞米利加合衆國は實に此大團圓なり。上述の如くにして他教に對する王の迫害は玆に成効を告げぬ。

されど斯如き事情下に於て一方國民自由の氣は、再三其の閃光を放ちつゝあり

き。先皇エリサベス彼女の財政策宜しきを得たるを以て國會を召集するの必要殆んどなかりき。之に反して當帝の放蕩奢侈なる、已に相續財産を蕩盡して早くも即位の時より負財山をなせり。茲に於て三度國會を召集し、而かも其の都度直ちに之が停會を命じたり。蓋し議會は王が其の特權を放棄するにあらざれば保護金を支辨するを肯んぜず、王は又議會まづ保護金支辨の議を可決するにあらざれば決して自由の保護を約せず、かくて互に其の議を固取して動かず、遂に王は一千六百十四年議員五名を獄に投じたれども何等の効なく遂に餘義なく國會解散を命じたり、時に一千六百十七年なり。されどこは却て反對の氣焔を高め、更に之れを強固ならしむるより外その効なかりき。王は嘗て公言すらく神は王を以て法律以上に置くものなりと、されど彼は却て巧言譎詐の閣臣に支配せられ、或は又主權を無能の寵臣に委ねたり。初めて彼の推擧したるはバァーレー公の男ロバァトセシルなりき彼はエリザベスの死期に宰相に任ぜられ、其の位を繼續して當王のためにサリスベリイ伯に任ぜられぬ。十二年少壯の蘇格蘭人ロバァト・カァルを代りて其の職に就き順次ロチェスタァネ、ソォマァセット伯に任ぜられたり。暫時にしてカァルに代りて出でたるを二十二才の擘臣ジョルヂ・ヴィラーとなす。彼の才幹の傑出すると共に風貌亦端嚴二年間にナイトとなり、侍從となり、男となり、子となり、バッキムガム侯となり、提督となりサンク・ポォツの司令官となり、遂に諸官諸職任免の最上權を握るに至れり(十五年)。彼の才を振ふや、いかなる破廉恥の行爲をも敢てし倏時にして巨萬の富を積み、奢侈榮耀其の極をきわめぬ。王はかゝる亂行を毫も制止せんとはせず、只成すが儘に委しぬ、蓋し王亦彼と同一行爲を成しつゝあるを以てなり。彼は國會より保護金を得る能はざるを以て金策の一法として官位官職賣買法を施行し、裁判官、判事職を公賣に附しまた不正の訴訟は被告の財産を沒收する等の法令を發布したり。此等の余弊は當時の大法官にして有名なるベエコンをすら官金を私消せしむるに至りために後獄に投ぜられ科料四万磅を課せらるゝに至らしめたり(一千六百二十年)ゼエムス王は已にエリサベスの擔保として取りたるラムケンス等の都邑を國會に賣拂へり而も此等より得たる收入は直ちに寵臣等の嚢中に藏せられ國民は益怨嗟の聲を高むるに至りぬ。如上の苦策を運らせるにも拘はらず國庫は全く空乏にして毫も充實せず、時恰かも新教の日

耳曼に於て遭遇せる危難を機として新國會を召集せり。されど下院は國民の苦痛を救濟せざる以上は保護金の支出を肯んせず、遂に亦『再び王は之れを解散せりとを計りぬ。されど計畫はバッキムガムの愚策によりて失敗に終り、却つて西班牙と干戈を交ゆるに至りぬ(二十三年)。茲に於て愈資金の必要に迫られ、遂に議會の委員に許すに租稅徵集の權及び其の使用を監督するの權利を以てし、同時に壟斷權を廢弛し嚴密に個人の自由を承認するに至れり。後幾何もなくゼエムスは薨じぬ(二十四年五月一日)。王の臨終に際してルイ十三世の妹、ヘンリエッタを娶りて王子に配したり。ヘンリイ四世の所謂『ゼエムス先生』は中々の議論家にして其著書少からず、就中著明なるは "Basilicon Doron 及び『自由君主政體の眞法』なりとす。已にチュウドル家は君主絕對權を事實に確立し、ゼエムス一世は之れを法律に規定せんとしたり、上記の書中第二のものは此意見を獨斷的に論述したるものなり、書中に曰く『王は支配するものなり、臣は服從するものなり、王の支配するは神聖權あるの故なり、蓋し王は神の權化なるが故に神は之を法律以上に置きたるなり、是を以て王は自ら律法を制定し毫も國家の干涉を受けずして自由に其臣を懲罰するを得、而して王は嚴密に國法を遵守するを要せず』と。說は直ちに英國敎會の採容する處となり、一千六百〇六年の敎令を以て當敎會は絕對に君主に服從する旨を布告せり。

抑も專制主義は事實上久しく存在することを得るも長く議論すること能はざるものなり。ゼエムス一世は專制君主たらんと欲したれど、いかにせばその希望を實現することを得るやを知らざりき。現に彼は之が資とすべき三ケの重要物即ち資金、軍隊、輿論の何れをも有せざりき。彼がかくの如く神權說に就て論議せる間に、國民は却つて自から自由に慣れ今將に革命によりて之れを獲得せんと期しぬ。

チャアルス一世(一千六百二十五年—四十年)。

英國は新王に望む所甚だ多かりき。王は沈着平靜、持操堅實、事を行ふや熱誠、家を齊ふるに秩序と中庸とを保持し、誠に一の君子人なりき。風貌舉措共に威容ありて廷臣を服するに足り、國民を撫するに足る。されば彼にして一片誠意眞實の德を有したらんには必らず全國民の愛敬を享けたらむこと疑なし。嗚呼可惜乎。彼登極するや希望と歡喜の情は全國に

湧起したりされどかゝる歡喜の情も一度新王が依然ハッキムガム侯を信頼し、新皇后亦た舊教徒によりて圍繞さらるゝを知るに至つては忽然として消滅しぬ。王亦擘臣等に惑はされ、かの統治權の根本問題に就いて國民の同情を喪失したり。抑もチャアルスは渠の無上權說を父王より傳承し、かねて大陸の事情を窺ふに與衆の自由は廢弛され貴族の特權は粉碎され、獨り王者の權のみ强大となり、いかなる矛盾も障碍も是の前には力なきを視るに至り、以爲く、民の幸福を保全せんためには、チュウドル家の所策の如く、其の自由を堅く禁錮するにありとなし、各個人の自由を抑止せんとしたり。蓋し卅年の長きに亘れる薔薇戰爭の結果による民力の疲弊、次て三十年以上民心を煩惱せしめたる宗教改革乃至英國の存立をすら危險ならしめたるフィリップ二世との戰爭のため一時人心此方面に凝集してまた各自の特權如何に就いて顧るゝ莫りしを以て、彼は民權の默止を以て直ちにその滅亡の如くに誤解し、眞に之に至らしめたる如上の原因を忘却したり。由來國家がかゝる危急に際する秋は國民は帝王に許すによく絕對無上の權を以てすることあるなり。されど今顧りて國の內外を見るに西班牙は喘々として將に死期に瀕せんとし佛蘭西は復更に脅迫の威勢なく宗教問題も一時落着を告げてより已に久し、

茲に於てか英國民は再び舊に皈りての其前程を踏行し、一時中絕したる代議政を再始せんことを欲しぬ。市民はエリサベス女皇及びゼエムス一世の朝に其の商工業によりて大に豐富となり、また王及び宮臣等の奢靡豪奢のため市民は却つて貴族、王室等の債權者となり、かくて陰然勢力を扶殖したる彼等の心中、自ら自由を愛好するの念勃興しつゝありき。已に國家の一大勢力となり下院に最多數を得、首都の市長となれる彼等の今日、權利の配當を受け、秕政の政治を監督せんことを希求するは毫も訝しむに足らず。猶他の一大勢力の英國を驅つて之れと同途に向はしむるものあり。十七世紀に於て王と貴族とは共に宗教を改革して全然貴族的のものたらしめんとしたりき、されど民衆は之れと全く別途を歩み、これをして完遂せしめざりき。こは根本的に一大改革を告ぐる曉鐘となれり、即ち淸教徒のそれなり。ヘンリイ八世及エリサベスは政府に對して最も柔順なる、所謂官立教會を設立し賦するに幾多の富を以てせり、而して榮耀を極めたる僧正は專ら皇室に對して絕對に臣從すべき旨を潤々として說教せりされど聖書を手にせる一

般の民衆暴君に對する豫言者の戒飾を信仰する民衆には遂に滿足を得せしむることと能はざりき。却つて政治上の自由を希求せる者と是等信仰上の自由を翹望する者と相合して遂に悲慘の革明を齎らすに至れり。

チャアルス一世の治世は自ら左の三期に區分せらる。

第一期、有國會の治世(一千六百廿五年より廿九年に至るの間)

第二期、無國會の治世(一千六百廿九年より四十年に至るの間)

第三期、無國會を以て其統治を持續せんとの强行政治國會との衝突及王の敗北(一千六百四十年—四十八年)

曩にチャアルス一世の即位に際して政府と國民と相合せず、王は父王の絶對無上權說を固守し、國民は嘗て享受したる自由を再び得んことを希求するの旨を述べたり。かくて避くべからざる此衝突は王の即位後幾何ならざるに爆發したり。事は海關稅賦課の議に始まり、政府は之れを王の御宇の間徵集せんとを提出し、下院は只一年間のみに限らんことを可決したり。此の決議と同時に政府の不信任を宣言せり。こはチャアルスの大に憤る所となり、立所に國會の解散を命じたり。

王は一千六百二十六年再び國會を召集して、獻金を要請せり、されど國會は人民の暴政に苦しめる事を陳述し、而してその虐政の素をバッキムガム侯にありとして侯を彈劾せり。かくて王は一寵臣を救護せんため亦再び解散を命じぬ。茲に於て侯は人望を收攬するの策として、已に西瑞牙と會戰せる王を勸誘するに佛蘭西と開戰せんことを以てし、遂に王を說服してラ・ロオセル("La Rochelle)に在る新敎徒救援のために艦隊を回航せしめたり。此遠征は提督無能のためレー(Ré)島攻擊に大敗して失敗に歸しぬ。是に於て王は民衆の憤懣を他に轉ぜんため第三國會を召集したり、然るに下院はバッキムガム侯の失敗によりて政府反抗の氣勢愈强烈となり、議員は議會に荐むや實に國家の蠱毒君側の一奸臣を除き以て秕政の禍根を絶ち、國政の改革を斷行せんとの一大決心に臍を固むるものあり。彼等は劈頭先づ二個の諫議を奉呈しぬ、一は關稅の不法徵集に對する非議、他は國民の禍根と目したるバッキムガム侯に對する彈劾是也。これによりてチャアルスの憤怒頂上に達し遂に無期停會を命じぬ。一千六百廿八年バッキムガム侯はジョン、フェルトン(John Felton)の刺されて、其の毒手に殂れぬ。越えて翌年國會は所謂權利請願を起草し

て國王に奉呈したり、これぞ第二の大憲章ともいふべきものなれ。チャアルスは止むを得ずして採納し、自ら左の勅語を發して之れを成立せしめたり、曰く、下院の協賛を經ずして漫りに租税を徴集せざる事、法令の條文に依準せずして濫りに禁錮せざる事、軍律を裁可せざる事等是也。されど口未だ乾かざるに之れを無視し徒に國會を停會し、而して最も熱心なる議員を禁錮して毫も憚る所なかりき。名士ジョン、エリオット(John Eliot)は實に此際罹災者の一人にして、數年間入牢の後遂に沒しぬ。かくて後チャアルスは勇猛剛毅の聞ある僧正ロウド(Laud)及びサア・トオマス・ウェントウォース(Sir Thomas Wentworth)を閣臣に擧げて肱股となし、以ておもむろに自己の慾望を完遂せんとせり、後者は議會に於ける反對黨領袖の一人にしてまた權利請願案の起草者なりしも、自己の榮達を希ふ虚榮心に驅られ、遂に變節脱黨して顧みず、王の爪牙となりて、當時佛國に於けるリシエリュウ(Richelieu)を英國に於て演するに至りぬ、彼は其の權勢漸く揚がるに及んでストラフォード伯(Earl of Strafford)に任ぜられたり。

チャアルスは國會を開かざること茲に十一年未だ嘗て斯如き長時の休會ありしことなし、(一六二九年三月—四年四月)。かく國會を不用としたる結果彼は經費の節約を勗めざるべからざると同時に何等の活動を敢てする事能はざるに至れり。されば此間王は專ら西班牙、佛蘭西の兩國と和議を結ばんことに汲々として、今將に大陸に於て新舊二大宗教の輸贏を決しつゝある一大爭鬪を避けて之れを傍觀せり。蓋しチャアルス一世の下に英國をしてよく卅年戰爭の慘禍を免れしめたるは、一に之れを新教化せしめたるエリサベスの偉業によるものとす。遮莫、威信を外に失へる王は内に於てもまた威勢を振ふ能はざりき。彼は密かに信ずらく、無上權の堂奥中に自ら安ふするを得べしと。噫、されどかゝる仇なる信頼の中に已に二黨の己が宮庭内に將に發芽せんとする專制主義の支配に就いて爭ひつゝありき。皇后は實に幾多陰謀の中心なりき、閣臣は皇后の專横と奢靡とを憎惡せり。已に閨の内外の愛、身に餘れるに今又蕭牆の鬩を鎮和せざるべからざるに於ては王の負擔もまた重しといふべし。

腐敗紊亂を重ねたる當時の政府ほど暴虚壓制を恣にしたるものは古來稀なり、例へば下院の可決せざる船税等の不正税法を制定し、或は朝廷に對して敵對の行

爲ある者は何等の審問をも經ずして直ちに獄に投じ、而してストラフォード伯の統管にかゝる星院(Star chamber)によりて苛酷の嚴罰に所する等横虐至らざるなく、更に宗教の方面に於てはロードは其の幕下と共に非國教徒を虐壓し、慘忍其の度を越たり、レエトン(Leighton)博士の如きは只一小冊子のために梟架に懸けられ無數の鞭打を受け、後、兩耳を斫り落され耳を劈かれ、赤火の如き熱鐵を以て顏面に烙印を刻せられたり。狀師プリイン(Prynne)バストウヰク(Bastwick)大臣バルトン(Burton)等又同一の刑に處せられ、其の他日々之れに類する無慘の極刑に殉する者殆ど算なかりき。プリインは梟架に在つて衆を警めて曰く「汝等基督教徒よ、余にしても し、單に自己の自由をのみ重じたらんには我は此處に在るを要せざりしならん、而かも之れを失ふて顧みず、今又此の如き慘禍に耐ふる所以のもの一に汝等の自由を思へばなり、願くば、請ふ、よく之れを護れ、而して益〻勇猛强剛にして克く神に信に、克く國に忠なれ、然らずんば汝と汝の子孫とは長へに奴隷の地に落ちん」と。ロオドの非國教徒に對する迫害かく嚴酷なりしにも拘らず清教徒は愈〻廣く流布弘通しぬ。

當時亞米利加に移住するもの非常に增加し、本國より爰に輸出する貨物實に佛貨二千五百万法を超過せり。一千六百廿七年清教徒はマサチューセッツ灣近傍に殖民せる一千六百廿年の移住民の後を追ふて本國を去れり、後三年を經てニユウハムプシヤイア及びメエン(New Hampshire and Maine)等の植民地を建設せり。かく不平民の續々本國を去る者多を加ふるに及び政府もために大に驚愕し、勅令を以て非國教徒の移住を禁じたり、恰も勅令發布の際八隻の船將に艤裝して亞米利加に向てテエムス河を拔錨せんとするものありき、傳へいふクロムウェルも亦此時の乘客の一員なりきと。かくて彼は此禁止令に從ふて其の行を思ひ止りたれど、他は皆初志を翻さずして初志を續けたり。かくして一千六百卅五年より三十七年に至る間に於てコンネクチカット(Connecticut)及びロオド島(Rhode Island)等の植民地は建てられぬ。

一千六百三十六年ハムプデンの審判は大に王及び政府の蒙を啓くに與つて力ありたるもゝの如し、蓋し彼が納稅拒絕に關する敗訴はいたく國民の同情を起し、かねて又政府反抗の氣勢を高めたるを以てなり、かくて國民擾々の聲は遂に政府

をして其の政策の全く國民の感情に背違せるものなるとを覺知せしめたり。されど頑冥固陋の閣臣等は頑として毫も志を移さず、却つて時の愛蘭總督ストラフォードは常備軍を編成して國民を脅威し、ロオドは非國教徒を隈なく搜索して嚴罰に處し、殆んど其の徒一人をも餘さざらんとせり、かくて一時英國は全く宗教上の服從を成したるが如き觀を呈せり、此の革命の夕僧正等は彼に報告して曰く、今や各所轄の管區中一人の非教徒も發見すると能はずと、其の狀恰かもルイナ四世の閣臣等がナンツ(Nantes)勅令廢止の後王に報告して一人の新教徒の王土に殘るものなしといへるに髣髴せり。かくてロオドはプレスビテリアン宗徒を强壓せる餘威を張て蘇格蘭に及ぼし爰に舊教の儀法に類する一新儀範を强ゐんとせり。茲に於てエディンバラの人民先づ反し、次でプレスビテリアン宗徒は政教改革の一大合同を作り名けてコヴェナントと稱し、與黨大に集り倏時にして全蘇國人を味方となせり。是によりてチャアルスは之れを壓服せしめんがため二万の兵を率ゐて親征せり、されど軍費缺乏のため王は會戰することを得ずして遂にロオドの儀範を癈弛することを反徒に許しぬ(一千六百三十九年)。此の敗亡は王に蒙らしめたる大打擊なりき。かくてチャアルスは軍費の供給を仰ぐがために第四議會を召集したり、されど議會は國民の痛苦、虐政の攻擊を事として毫も献金支出の可決を肯ぜず、却て王に要請するに、王は毎三年にあらずんば國會を召集せざること、選擧と言論の獨立とを確保すること政治の自由を固く保證することの三事を以てせり。是に於てストフォードは王に諫言して曰く、今日國民をして常識に復せしむるには唯棍棒あるのみと。是如くして議會は解散せられたり。而して一方軍隊を見るに之れまた蘇國の同胞に同情して之れと戰はんことを欲せず、遂に分散し、ストラフォードをして餘義なくヨオクまで引上げざるを得ざらしめたり。王の困難愈〻窮迫するに至れり、されど已に一旦劍を拔きぬ而も之れをして耻なからしむるには軍費の供給を如何せん、既に今日まであらゆる課金稅金を徵集し竭して今將た何によりてかこれを得ん。竟にチャアルスは自己の罪過を責めて、第五國會に手倚りぬ。實に此の國會こそマコウレイ卿の所謂幾多の過失と害毒ありしに關せず、世界の有ゆる立憲國民の等しく尊敬と感謝とを拂はざるべからざる千古無比の國會なりけり。

長期議會（一千六百四十年―四十九年）。　十一年の久しき專制を恣にし來りたる今日遽かに國民の幇助に哀訴するに於てや、チャアルス一世は自ら從來の主義政策に一大矛盾を提供したるものといふべし。茲に王は全く、獨力を以て英國を支配すること能はざるを自覺せり、而して國會ははじめて自己の正道を踏むことを得たり。されど久しく苛酷なる抑壓の下に呻吟したる自由は何すれぞ復讐せずして止むものならんや、而も之れに報ゆるや舊に越ゆることあるは人世の常事なり。國會は王に代りて權力を掌握せり租稅の徵集處理は勿論、あらゆる行政の權をすら押領せり、而して更らに特別法廷を廢し、議會閉開の定期を布告し、かくて最後に十一年間專制政治の化身となりたるストラフォード伯に令狀を發して彼を拘引せり。此の審判は直ちに一國の擧て注目する處となれり、蓋し名はストラフォード伯の審判なりと雖も實は王室の輕重を秤量するものなればなり。豪勇怜悧にして雄辯なる伯はかゝる危急に立ちて儼然として毫も威容を頹さず、十七日間十三人の原告に對して、其の罪過を抗辯せり。罪過の多くは不義横暴の事にして、是等は皆事實によりて證明せられたり、其の他は大抵憎惡の餘捧大に誇張されたるものに過ぎざりき、要するに罪は一として反逆を以て問ふべきものにはあらざりしなり。さればストラフォードはこの忌はしき罪名を免れんとて愼謹鎌讓の態度を以て自己の缺點短處を告白し、何等鄙しき讒詈の言を吐かずして告發者の所置の一々の僻見より出でたる不法の行爲なることを醇々として論破するに勗めたり。されど彼の辯護人は事實を直言することを禁ぜられ、且つ證人の喚問を請求したれど採容せられず、漸く辯論開始前三日に聽許せられたるも、其の多くは遠く愛蘭に居住するを以て今や如何とも詮術なかりき。彼は機會ある毎に判官に乞ふに自己の權利を承認せんことを以てし、而して斥けらるゝも聊か怨言を慙ふることなかりき。彼が頑强なる抗論のため宣告の期日を遲滯せしめたるを以て、いたく對手の憤怒を買ふや、彼は簡短に答て曰くこは之れ我を攻擊する人の權利なると等しく己が生命を擁護する我の權利に屬せりと。

上院は彼を救免せんと力めたれども下院は遂に國事犯人に科する民權喪失案(Bill of attainder)を以て彼に擬したり。されば今日彼を救濟し得るものは決議の裁可を拒む只一人の王あるのみ。しかも王の優柔なる果斷の決意に出づるを得

ず、偶〻ストラフォオド最期の決意を認めたる悲壯の手翰を手にするに及びて、志氣愈〻挫け、遂に多年己を保佐し、擁護したる宰相の憤死を採聽せり。ストラフォオドは之れを見るに及び、天を仰ぎ嘆じて曰く、噫、王皇に信賴する勿れ、又人の子に信を置くこと勿れ、彼等は何等の救をも齎らさざるなり("Nolite confidere principibus et filiis hominum, quia non est salus in illis")と。恁てタワアの司長は人民の騷擾を避けしめんため彼に強ゆるに乘車を以てしたれど、彼は之れを斥け徒歩するや護衛に先ち、恰も嘗て榮えける日、皇軍を督して、堂々征行に登りたる姿勢ありき。軈て刑場に蒞むや、衆に告げて曰く、「願くば王國の永久に榮えんことを、生は嘗て常に我の願ふ所なりき、今や我の祈る所は只死あるのみ。遮莫茲に群へる人々よ、乞ふ吾いふ所を沈思熟慮せられんことを、そも王國革進の卷頭は必らず血をもて染められざるべからざるものなるや、あらずや、歸路に就かるゝ道すがら深く思を凝されむことを」と。かくて終に刑場の露と消えぬ、(一六四一年五月二十七日)。ロオドはストラフォオドと同時に獄に投ぜられ、後四年を經て刑せられぬ。

ストラフォオド伯の處刑に遭ふや、全朝の有吏驚駭措く處を知らず、直ちに災の墜ちんことを恐れて悉く國家の權を上下兩院に交附したり。間もなくアイルランドに反黨起り、英の新教徒を殺戮すること四万人に及べり。皇后の舊教徒と計りし隱謀は人をして王もまた其の同類にあらざるなきかの疑を起さしめたり。チャアルスはアイルランド征討の軍資を國會に要求したるに、國會は御宇の初より國民の辛酸苦痛に惱める事情を陳じて王を諫諍し、其の出費を肯ぜず、却つてスコットランドには賠償金として金貨六十万磅を支辨する事を可決し、同時に兵制改革案を提出して軍隊の編成并に將官の任免について商議する等、全く王の意志を容れず、茲に於て王は再び前の威權を回復せんため果斷政略即クウデタアを決行せんとし、躬ら國會に臨みて反對派の領袖を逮捕せんとしたり、されど國會は之れを引渡すことを拒み、而して人民は王の所行に對していたく激昂し、將に脅迫的態度に出てんとしたれば、王はために兵力を用ゆるを得ずして遂にロンドンを去れり、時に一千六百四十二年、これ實に内亂の始なり。議會黨は首都、大市邑、港灣、艦隊等を所有して牙營となし、王は多數の員族を率ゐて之れに對せり。而して北西の地方は概して王に與し、東南及びロンドン附近の人民は議會黨に與したり。一千六

百四十二年八月二十三日王は先つ軍をノッチンガム(Nottingham)に擧げて西方に進み行く〳〵、義勇兵を募り、初めてヲルセスタア(Worcester)にて議會軍と會しぬ、されど何等目ざましき會戰なくして道をロンドンに取りぬ。茲にエッセックス伯は王軍を阻止せんとてエッジヒルに於て一大激戰をなせり、(一千六百四十二年十月二十四日)。かくてチャアルスは首都進擊を停めてオックスフォドに退却し、爰に冬陣を張りてオランダより來る援軍を待てり。此後次〻の會戰に國會軍屢〻利あらず、南北の市邑は大抵王軍の占むる所となれり、されど議會軍は毫も挫折せず、敗衂に遭ふて志氣益〻振ひ議員も亦兵杖を取りて立ち、就中ハンプデンは僕、朋友近隣の人々を集めて步兵隊を組織し、此の一隊は日ならずして訓練と勇氣とを以て有名となれり。此の時漸く頭角を顯はしつゝありたる、オクヴァア、クロムウェルは東部地方の鄕士小地主等の青年を集めて選拔隊を組織せり。此の間王はグロウスタア(Gloucestr)市を包圍攻擊せり、市は常に彼の行動を阻止して王の最も累とせるものにして籠城軍は頑强に名譽の抵抗をなし、ために國會軍をして軍を整ふるの猶豫を與えしめたり。チャアルスはエッセックスの附近に軍を退かしめ、己はニュウベリに陣して伯のロンドンに至る道路を扼したり。されど國會軍は苦鬪の後遂に王軍を潰走せしめ、加ふるに此の役に於て王軍の最も榮譽とせる名將フォルクランド(Falkland)を斃しぬ。勝利は引てスコットランドと合同するの勢利を得せしめ、兩國の人民茲に壯嚴なる盟約を誓ひぬ。翻て王軍はハイランド人を起して手兵に加へ同時にアイルランドの舊教徒と和して加盟せしめたり。

國會黨は元來プレスビテリアンとインデペンデントと二ヶの相反せる黨派の合同に過ぎず、而して彼等は一旦王の無上權の要求に反抗して合同したりしと雖も、政治の事情に就ては何等一致するものなかりき。プレスビテリアン派は教會に於てこそ階段權(Hierarchy)を廢除したれ、國家に於ては素より之れを存置せんとを欲したるなり、インデペンデント派は全く之れに反し、貴族幷に僧正(エピスコーパシイ)の監督權を排斥すると共に君主の統治權及び宗教上の最上權をも合せて拒否せんとしたるなり。されど彼等は遂に人心の機微即ち自由と平等とを愛慾するの念に觸るゝに至りて契盟せり、かくて彼等の周圍には新教派より分派したる幾多の宗徒群り、遂に材幹秀拔なるルウドロオ、ヴェエン、ヘスセルリッグ、就中クロムウェルを其頭首に戴

けり。クロムウェルの性情は初めより衆の悅服する處となれり、かの燃ゆるが如き宗教的情熱、いかなる粗野の人をも友として平等に交はる親情、平調粗獷にして而かも肺肝を透すが如き不可思議の言語、凡庸なるが如く狂熱なるが如き態度、乃至有ゆる俗事を化して神役に奉仕せしむる大手腕是等互に相寄りて作成したる一偉人は幾何もなくして一ヶの有力なる司配權を得たり。蓋し不和は只に國會黨間にのみ存じたるにあらず王黨に於ても已に同じく之を有したるなり。

却説す、一千六百四十四年の戰役は兩軍の主力を盡くしたる戰とて特に著名なり、この役にルウバァアト親王の指揮の下にある王軍はヨオクの附近マアストン、ムアーに大敗し、殆ど潰滅せり、蓋し國會軍の此大成効を收め得たるは全くクロムウェルの天才と部下の將卒の比類なき勇敢とに倚るものなり、されば彼の一隊は此の役によりて驍勇軍の稱を得たり。反之、プレスビテリアン派の將士エッセックス、ウォルラア等の帥ゆる軍は南に戰ふて、屢利あらず、エッセックス將軍は遂に敵の虜とする處となれり、茲に又王軍の勇將モレトロス侯はアイルランドの兵を率ゐてスコットランドに上陸し、土地のハイランド人を起して、軍に加へ、行々國會軍を擊破して兵威大に振へり、是等の聲援によりて志氣を恢復したるチャアルスは第三回ロンドン進擊の行動を取れり、されど市民は幾何ならずして、王軍クロムウェル、マンチェスタア等のためにニュウベリに擊破せられたる捷報に接せり。此の如くクロムウェルの着々として獲たる成効はインデ・ヘンデント派をしていよ〳〵勇猛大膽ならしめぬ、彼等は議會に於て少數なるに拘らず、將官の任免を敢てして、專ら軍事を支配せり、プレスビテリアン派の大將エッセックス伯は職を罷免せられ代りてクロムウェルの帷幄フェアファックス其の後任に任ぜられたり。かくて軍隊の執權者たるインデヘンデント派は着々として勝利を占め、一千六百四十五年チャアルスの最後の軍をネスビイに潰滅せしめたり。後王は再擧を計らんとて專ら外國の救援特にアイルランドの救援を求めつゝありき。然るに之れと時を同ふしてモントロス將軍はスコットランドのコベナント派に破られ、ルウバァト親王は戰はずしてブリストルを敵に委する等、王軍の窮窘愈〻其の極に迫れり。是に於てチャアルスは落膽沮喪殆ど戰に困倦し佛國の首相の忠告によりてスコットランドの陣に投じぬ、(一千六百四十六年)然も忽にして身は全く俘虜の境遇に在ることを覺れり。翌年スコットランドは四十

万磅を以て王を國會に引渡したり。

此動亂の間プレスビテリアン黨とインデペンデント黨とは内訌を棄てゝ互に提携し合同せんと極力努むる處ありたれども、遂に其の効を見ず、凱戰の今日となりては全く希望は絶つに至れり。かくてプレスビテリアンは國會に依り、インデペンデントは軍隊に主となるに及び爭論茲に爆發しぬ。國會は干戈既に治定せるを名として軍隊を解隊せんと欲したり之れを耳にせる軍人の激昂は甚だしく、彼等は非議の請願を下院に提出せり、されど議會は斷乎として排斥しぬ是に於てかクロムウェルは曰く、「腕力を以て倒すにあらざれば決して彼等は休止せざるべし」と遂に彼は自ら此の宣言を實行したり。

チャアルスは此軋轢を利用して恢復を謀らんとせり、而して兩黨は王に依りて各自の目的を達せんとし、互に欵を王に通じて味方に引き入れんと競ひ遂に軍隊の一分遣隊は國會の掌中に歸しぬたりし王をホルムビイより奪へり。かくてクロムウェル及びインデペンデントの將軍等はチャアルスと商議を開きしも王の眞摯ならざる或日皇后に書を送りて曰く「請ふ、今將に爲さんとする讓歩を憂ふるとなかれ、時至るの日、此等の惡漢を處置すべき方策已に我が方寸の裡にあり、絹の襪紐に代ゆるに大麻のそれを以てせん」と。これを會得したるクロムウェルは始めて王を滅さんとを決意しぬ。王は私かに逃れてワイト島に潜めり。王の逃避は直に王黨に干戈を取らしむるの相圖となり、再び第二の内亂を釀せり。クロムウェルは之れを以て再び自己の勢力を扶植するの機會と做し、欣然として兵を起し、幕僚フェアファクスのロンドン附近に破るゝの時、彼はウエールスに王黨を擊破せり。時恰もスコットランドのイギリスを侵すに遭ひ、彼また之れに會してプレストンに擊攘せり。

此間プレスビテリアン黨はクロムウェルの征外に在るを利して勢力を復し、王と新協商を開き、二三商議の後下院を通じて宣言すらく、王の今回の讓歩は平和の保證に十全の根底を供するものなりと。されどクロムウェルは直に王をウエールスより追ひ、次て國家を廓清せり。あらゆるプレスビテリアン黨は一人も餘さず、國會外に逐斥せられ、議員は僅に八十名に減ぜられ、かくて何等の聲のインデペンデント黨を攪すもの無きに至れり。軈て王の審判は始まれり、チャアルスは高等法

院に召喚せられたり、時の院長は大詩人ミルトンの甥ジョン、ブラッドショウにしてクロムウェル其の總監なりき。王は彼等を判官と認むることを拒否したりと雖も、遂に宣告せられ、オランダ太使の仲裁ありたるに關せず、終に刑せられぬ。王は刑場に臨むや泰然自若として毫も威嚴を損せず、自ら己の行爲の優柔輭弱なりしを悔ゐて曰く、皇天は此期に蒞て我が愬ふる處を禁し給はん、嗚呼されどストラフォオドの所刑を裁可したる朕が不正の判決は今や他の不正なる判決によりて報ゐらるゝをや」と。

此大事を敢てしたる是等政治上はた宗教上の狂熱者は之によりて啻に犯罪を犯したるのみならず又過失をも合せ行ひたるものなること久からずして明かとなりぬ。されど彼等はかゝる大悲劇を演して、從來缺點によりてのみ知られたる王皇の美德――人類をして敬愛の情を起さしむる性情、剛毅ある紳士の氣慨悔罪する基督教徒の忍辱柔和等――を諸の國民有ゆる時代に顯彰せしむるの好機を與えたり。否啻に之れのみに止まらず、又實に彼等は、その生涯を擧げて專ら英國の自由を迫害するに竭したる人をして遂にその自由のために殉するの止を得ざるに至らしめたり。如何なる蠻勇を逞ふしたる政客と雖も、悲慘の最期を齎らすべき危機に瀕して、凜として其威嚴を保維し、儼として死に對したる王の如く深く一般人心を感激せしめたるものは未だ嘗てあらず。げに彼は法律に由りて制定せられざる法衙に於て辯論するとの無用なるを拒めり、兵力を以て暴を逞しふしたる蠻行に對して之を憲法に愬へたり、そも何の權ありてか最も尊敬すべき議員を下院より逐斥し、上院よりその立法權を奪取したるかを語れり、かくて最後に、滯泣嘘欷して之を聽ける公衆に面して告げて曰く「朕が今茲に孳々として抗辯に努むるは啻だに我が一身の爲めのみにあらず又實に汝等の爲めなり」と。聽て世は彼の死と共に彼の久しき失政、あまたたび行へる不信不義の行爲をば忘れ去り却つて彼が多年打破せんと勗めたる自由の制度は彼を追懷するの種となりぬ。蓋し諸の自由制度は彼と共に滅び、世は全く武力に壓倒されて沈默し、只だ此間彼の名ありて辛ふして之を擁護じたればなり。此日よりして君主に味方し、亡命の王家を援けんとするの反動起れり而かも反動は再び王座を過ぎし日の榮位に復するに至るまでは遂に止まらざりき。（マ

コウレエ）

英國の共和政治（一千六百四十九年—六百四十年）。

王の弑虐幾何ならずしてインデペンデント黨は共和政體を宣言せり、されどスコットランドはこの千古比類なき、弑虐に寒心して、はじめてスチュアアト家の自國の出なるに覺醒し、自ら前非を悔ゐて此の宣言を否認し、同時に故王の儲チャアルス二世を奉じてスコットランド、イギリス、フランス及びアイルランドの君王と仰ぎぬ。然るにチャアルスは彼等の己に賦せんとする條件を快とせずして拒み、却つてそのプレスビテリアンを嘲罵してオランダのヘエグに走り、後、佛に歸れる母皇ヘンリエッタの許に臻り、是よりアイルランドの王黨に合せんことを企圖せり。

爰に英の國會はクロムウェルをアイルランド總督に任じ、同地の王黨征討を命じたり、彼は直ちに大軍を引率してその征途に登れり。然るに王黨は之れに先ちて已にラスマインズの戰に於てダブリンに大に潰え、クロムウェルは勞せずして大捷の實益を收め、直ちにドロヘダ(Drogheda)に進擊し、一舉にして之れを陷れ、その、戍兵の鑑殺するのみならず、難を寺院に避けたる一千有餘の住民をも虐殺せり。之れより一月の後ウェックスフォオド(Wexford)に於てまた同一の慘事演ぜられ、その住民となく兵士となく總て茲に在りしものは婦女子に至るまで悲慘の最期を遂げたり、かかる殘忍なる蠻行を目前に視たるアイルランド人は殆ど死物狂となりて反噬し來り、流石に猛きクロムウェルをして稍〻鋒尖を避易がしむるに至れり。かく赫々たる成功を收めつゝありし時に當りスコットランドの本國を襲はんとするものありしを以て、クロムウェルはアイルランドより召喚せられ、更にスコットランドに向はしめられたり。是より先きラスマインズの大敗により、チャアルスはアイルランド上陸の計畫を阻碍せられしと共に、スコットランドのプレスビテリアン黨と再び商議を開始せざるを得ざるに至らしめたり。されど彼は之れに先ちてまづモントロス將軍に籍りて之れを征服せんことを欲したり。是に於て猛將は手兵千二百を率ゐてスコットランドに上陸しぬ。然るにハイランド人は彼と結ぶことを拒み、プレスビテリアンのためにコルビスデルに大敗を取り捕へられて慘刑に所せられぬ。チャアルスは蒼黄としてモントロスとの君臣の誓を絶ち、スコットランド太使の提言を全然採聽し、同時に舊教の自由行動を嚴禁する旨を宣誓し直ちに

彼等の奉呈したる王座に登るべくオランダを出でぬ。此くして王とプレスビテリアン黨との訂盟は完成し遂に勇敢なる王黨の首領の死屍の上に調印を交換せり。時にアイルランドより此地に向へるクロムウェルは老巧の手兵一万六千を率ゐてトウィード河を渡れり、然るに蘇軍の大將ダビッド・レスリイは彼に陪する優勢の兵力を有するに拘はらず一ヶ月間全く戰線を動さず、堅く陣地を守衛して英軍の倦疲を待たんとせり。されどプレスビテリアンの急燥なる、將軍の耐忍策を遲緩なりと做し、遂にレスリイをして餘義なく攻勢に移らしめたり。兩軍ダンバアの附近に會戰せり、初めインデペンデンド軍利あらず、次でクロムウェルは騎兵を以て突擊し、奮鬪して之を潰敗せしめたり、此役敵を屠ふること三千、捕虜一万、其の他大砲、武器、行李を鹵獲すること無算なりしと。かくてエヂンバラ幷にリイス市は戰はずに落ちぬ（一千六百五十年）。

大敗はチャアルスに取りて寧ろ捷利よりも大に益する處ありき。蓋し之れがために閣臣等の彼に對する戒飾嚴格の度を弛むると共に、王をしていよ〳〵油斷なく周密愼重ならしめたればなり。彼は一方、コヴェナントを殊愛するが如く假倖してプレスビテリアン黨を懷柔し、他面、ハミルトンをキャムベル以上に拔擢して王黨員を得たり。一世紀間スコットランドを兩分したる兩黨はかくしてチャアルス二世の旗幟下に合體せり、蓋し彼等の合體し得たるは始めプレスビテリアン黨は玉を以て眞實の士と信じ、自黨に對する彼の言行を以て全くその衷心より來たるものなりと誤信し、玉黨は之れに反して玉の心底の全く反對の側にあることを察知したるを以てなり。王は一千六百五十一年正月一日スコオンに於て莊嚴なる戴冠式を行へり。

彼は確實にスコットランドの君主と成りたるを以て、茲に英國征服の企畫を起し、行く〳〵同士を叫合して征途に就きぬ、かくてクロムウェルを欺きて軍を南に出し、ロンドンを指して直進せり。然るにかねて聲援を與ふる豫定なりし英の玉黨は此機に際して未だ動かず、只僅かに二三千の玉黨呼應したるあるのみなりしを以て忽ちクロムウェルの追尾する所となり、ウォルシェスタア附近に於て激戰數時、王軍遂に潰亂しチャアルスは漸く身を以て逃れ、市は英軍の占領に歸したり、時恰かもダンバア陷落の一周年祭にして、實に一千六百五十一年九月三日なり。かくてスコッ

トランドはアイルランドと共に克服せられたり。

かくして共和政府は茲に全く內部の擾亂を戡定し、今や內憂漸く銷散したるを以て餘威を外に張らんとし會オランダと衝突し遂に兩國干戈を交ゆるに至れり。其の端緒は一千六百五十一年に發布したる航海條例に職由す。これによれば何れの國の船舶といへども船籍所屬の國の產物製品にあらざる荷物を搭載して英國港灣に寄港することを得ず、同時に英國の船舶にあらずして亞非利加、亞細亞亞米利加等より物品を輸入することを禁じられたり。此の條例發布以來英國の通商航海は頓に盛大を來たし、後海の牧羊者(the teamsters of seas)と謠はれたるオランダ航運業の獨占を奪ふに至るまで此條例は存續したり(一千八百五十年一月一日)。さてオランダは當時航運業を以て唯一の商業とし、特に英國を顧客として世界各國の物產を此處に齎らしたるを以て此の條例は即て彼等に蒙らしむる一大打擊となり、彼等は其の通商を保護するために武裝し、遂に兩國開戰を布告せり。然るに英の提督ブレエキは一千六百五十二年十月八日ライタアの艦隊をドオバア海峽の北に擊破し後五ヶ月にして太洋の淸掃を以て自ら任じ、其の記號として檣頭に無數の帚木を掲げたる勇將トロムプ艦隊をチャンネルに破れり。後兩軍互に得喪あり遂に一千六百五十四年の初めオレンヂ家のスチュアート家と親姻を結ぶに除し、其の脅威に慴れて兩共和國平和を訂結せり。

かゝる間に國會は徒に空理と虛權とを喋々して自ら互に相鬩ぎまさにその沒落の足搔を早めつゝありき。而して國會は今や國民の代表にあらずして、全く一黨派の表現と化し了りぬ。此時に方り、國民は缺陷多き共和の政治に倦み、秘密隱謀を企てたる敦厚誠實の人を戴きて强健なる政治を建てんことを願へり。實に此願を副へしむるものは嘗て彼等のために王黨を倒して其自由を救ひ、過激なる「レベラア」黨を屠りて秩序を保たしめたるオリバア・クロムウェルあるのみなりき。彼は既に有力なる軍隊の尊信を得たりしに今又此の如く民心の悅服を贏ち得たり。時に國會は彼の席にあらざるを機として將さに停會の決議を通過せしめんとしたり。彼是に於て急遽議場に臨み將さに裁決を取らんとする瞬間その席より起ちぬ。かくて開口まづ自ら抑制し慇懃丁寧に且つ溫和に國會の成したる從來の行動を感謝し、やがて議論を進むるや調子頓に激昂し謂々として彼等の不義

不正を責め、中頃その失言を尤むる者あるに遭ふて彼は遂にその假面を脱し赫として怒號すらく「汝等は今や方さに議會にあらず、又議員にあらず、神は汝等を見離せり」と。之れを聞ける議會は沸騰せり彼はこの喧擾の中に一々の議員を指名して「汝は放蕩者なり汝は姦婬者なり、汝は耽酒漢のみ、去れ行け」と叱咤し同時に床板つよく踏み鳴して合圖を成せり、之れと引き違へに數多の兵士は一時にどや〳〵と闥を排して場内に顯はれ、悉く議員を起たしめて戸外に驅逐せり。やがて議場人なきに及びてクロムウェルは悠然として茲を出で、戸を閉し、その鍵を衣嚢に藏めて立ち去り、かくてその夕「貸家」の札を此門に貼らしめたり(一千六百五十三年四月三十日)。

後彼は所謂神の名によりて召集したる國會を開けり。されど議員の多くは皆な小心翼々、正眞一途の者のみにして、到底議事を料理するの能なく、只員に備はりしのみなりき。かくて此議會も直ちに解散せられたり、時に軍隊も行政執務官の下風に立つを欲せざりしを以て、同官は其の權を擧げてクロムウェルに委ね、かくして一千六百五十三年十二月廿五日彼は「ロオド・プロテクトル」即ち護國大官てふ尊號を與へられたり。茲に統治の大權全く彼に歸し、彼は事實に於て英の帝王となれり、而かもその帝王たるや普通正統の君主よりも更に一層強大なるものなりけり、蓋し彼は已のためには死をも潔とする勇敢精忠の兵士五万を有したればなり。

是より先彼は媚アイルトン(Ireton)にアイルランド征討の權を授けて鎮壓に向はしめ、殆ど何等頗強の抵抗なくして直に其の四分の三の地を平服せしめたり(一千六百五十二年)。叛徒の首魁クランリカアド(Clanricarde)は其の與黨オルモンド侯の離背のため、到底勢の非なるを察し、全軍を擧げて征討軍に降らんことを請ひしも、アイルトンの夭逝後其の後を襲へる時の大將ルッドロオは之を納れず遂に兩軍激戰の後悉く叛黨を降服せしめ、一千六百五十二年の中頃全くアイルランドを鎮定して英の司配の下に立しめたり。英軍此等の反徒を所置するや實に殘忍刻薄を極め人をして悚然たらしめたるものありき。許多の貴族は一千六百四十年の虐殺に與りたりとの科を以て死に處せられ、四万に餘まる兵士官員は國外に放追せられ、而して其の妻子には悉く亞米利加に遠流せられたり。一方には殺戮によりて人口を減じ、他方には難を亞米利加に避けて移住する人民愈々夥多となれるに拘らず當時教徒の人口は實に一に對する八の割合を以て新教徒に超過しさと。而し

て大地主は其の土地財産を擧げて沒收せられその動産と不動産とを合して漸く十磅を超へざる者のみ辛く之を免れたり。加ふるにアイルランド全人民は一千六百五十四年五月一日までにコンノオトの地に遷徙することを命ぜられ、其の期日を過ごすものは何人と雖も殺害することを得るとの殘暴極まる布告を發布せられたり。

アイルランドの征服と同時にスコットランドも鎭壓に歸し國會とクロムウェルとは其の命令をモンクに授けて勵行せしめたり。此地はアイルランドの如き甚しき虐壓を免れたるのみならず、人民は自己の法律、信仰と共に國家をすら保持することを得たり。蓋し之れを能くしたる所以のものは當時國會とクロムウェルは共に英蘇兩國人民を合せて大ブリテンの下に一統せんことを企圖し、今や其の企圖完成を告げんとするに當つて國會先づ顚覆し、次でクロムウェルまた之を放棄したるによるなり。

かくて半世紀の間英國の聲威は隆々として昇り、歐州外交界を震駭し、英の鼻息を窺ふ事をのみこれ事とせしめたり。實にクロムウェルは此の間歐州の諸帝王と對等の交際をなし、西班牙は彼が同盟に加はらんことを切望し、佛蘭西また同じく願ふて之を得たり、和蘭はブレエキ提督の爲めに其艦隊を海峽に碎破せられて、英國旗の優勝權を承認すると同時に其戰費を賠償し、更に提督は其戰勝艦隊を遠く地中海に進めてバアバリイ聯邦を懲伐し、更に他に西班牙よりジャマイカを奪取し其の他ダンキルクを領する等殆ど抗するもの皆な碎けざるはなく、ために英をして世界の最强國たるの觀を呈せしめたり。茲に於てクロムウェル及スチュアート家の一旦放棄したるエリサベスの遺業を起して新敎大同盟を造り、自らその保護者を以て任じ、遂に舊敎國を離散瓦解せしめたる新敎敎會をして彼を其の保護者と宣言せしめたり。かくて各地の舊敎徒は彼の名をだに聽くも猶ほ恐怖の感を起し、羅馬法皇の如きも勢止むを得ず其領域の各國王に令して溫和謙讓ならむとを諭せり。實に英の强盛なるが此の如きは未だ曾て非ざりき。されど此の如き榮華も唯これ五十年の夢にして、やがて半世紀の後はまた再び可憐の狀態に陷りぬ。遮英國民の感情に投じて欵心を邀合したる政府は、內治外交大に其の宜しきを得、國家を危きに陷れずして國威を外に張り、威力を以て、內に秩序を保持し、かくて國

の内外に畏敬さられ、嘆賞せられ、歸服せられたり、而かも未だ其の根蔕は固からざりき。舊黨は何等の希望何等の活動を敢てせざりしも、猶壓倒の下に其の餘命を保てり、尤もクロムウェルの潛位より五年の間には王黨或は共和黨の陰謀背叛を企てゝ政府を恐畏し、彼を危くしたりと雖も、皆直ちに壓倒せられ、一も成効したるものなかりき。されば國民もまた此等の暴舉に就て憂惧を起すことなく、全く安じて平和を守衛せり。されど彼等は之れと同時に此の權力の常に此の如き勝利あり、且つ永久に存續するものなりとは毫も信ぜざりき。げにクロムウェルの勢位赫々たる時にすら輿論は彼を目して抵抗すべからざる一時の君主、比敵者なきと同時に未來なき主公なりとせり(ギゾオ)遂に千六百五十八年九月三日五十五歳を一期として、此偉人は逝けり。

クロムウェルの死後其の子リチャード父の位を襲へり。されど彼は世を治むるの才幹なく、また其の志をも有せざりき。是に於て各黨再び興起し、リチャードは數ヶ月にして其の位を辭しぬ(一千六百六十年)。英國は混沌濛昧全く無政府の態を呈し、國會と軍隊とは互に權力を爭へり。げにクロムウェルは幾多の副官を遺したるも直ちに已に代りて遺業を繼承すべき巨人を遺さざりき。されば第二位に在つて優秀なる彼等も畢に最高の位置を占むること能はざりき。茲にオランダ戰爭に曉名を轟かしたる提督フジェクの同僚にしてスコットランドの太守たるジョオヂ、モヌクは名門より出て、此等儕輩の間に拔んでたる人なりしが、私に此等の黨派を倒して王政を復古せんと謀りき。彼は先づ第一着手としてクロムウェルの死後組織されたる小國會を解散し、而して全く國會に經驗なき最も御し易き新議員を以て代へたり。當時國民は全く歸趨する所に迷ひ、眞正の共和政治の不可能なる者にあらざるかを疑ひたれど、又敢て名稱を廢棄するの果斷をも成し得ざりき。されば、かゝる危機に際して彼等に最も必要なるものは忍耐以て時の推移を俟つことにありたるなり。然るに共和黨員は自己の將來を危惧し、且つ領袖の多く迫害さるゝを見るに及び遂に待つを得ずして、武器を取れり、併も一般の民心は全く紛擾を厭ひ、而して安易を得るの道は只前政に還るにあることを思へり。されば、にや彼等は忽ちにして碎破せられ、王黨も民黨も悉くこの希望下に集合して、只だ一回の合義によりて世襲君主政を再建せり、かくてチャアルス、スチュアートは無條件に

て故國に召還せられたり(一千六百六十年)。此の輕舉は直ちに第二の革命の先驅をなせり、蓋し、彼等が提供したる問題は未だ一も解決せられず、猶況んや復古てふ大事はまた直ちに他の革命を喚起せずんば措がざるに於てをや。

第二十章　十七世紀中葉の佛蘭西(一千六百四十三年—一千六百六十)

附　一千六百六十一年の全歐の形勢

マザリンとフロンド黨。　ルイ十三世の死後に於ける佛國は、嘗てヘンリイ四世の亡後に於けるが如く、幼君冊立より來たる弊害を忍ばざるべからざりき。ルイ十四世の登極するや僅に五歳の幼童にして王座の後に簾を垂れて政を聽けるは皇母墺太利のアアンなり、嘗てルイ十三世其の死期に臨み、評議會を以て彼女の權力を控制すべしとの令旨を遺したるに國會は之れを無視して大權を全く彼女に委托せり。而して皇后はカアディナル・マザリンを擧げて万機を關り白せしめき。

マザリンは一千六百二年伊太利の舊家に生れ、三十四年羅馬法王の聖使として佛國に使するに及び偶〻時の攝政リシエリュウの知る處となり、拔擢せられて後樞要の地位を占むるに至れり。皇后は一君主の利害の外全く佛蘭西の休戚に關して

リシエリュウの沒後佛は其の政策を保維持續せんとして一大反抗を招き、ために政府は幾多の敵を作り、數多の犧牲を出したり。而かも其の起るや猛烈にして從來監禁せられたる囚徒は解放せられ逐放せられて、國外に流離せる亡命客は直ちに召還されて宮庭に入り、さすがのアアレ女皇も何事も彼等が成す儘に任したるにはあらぬかと疑はしめたり。年金、特權より位階叙勳等請に應じて與へられ、彼等をして女皇の如き寛仁慈惠にまします君主はあらじとまでに思はしめたり。首領ベスウン(Bethune)ラ・シャットル(La Châtre)就中無能を以て知られたるポオチイル(Potier)の如きすら威權一時は雙ぶ者なき觀を呈せり。されど自ら尊しとする「自分免許の人に」といふ稱呼は爾來永久に彼等に蒙らしむるの別名となれり。此の時に際しマザリンは辣腕を以て易々として此等暴徒を平げ、ボウフォト候(Duke of Beaufort)をバスチイル獄に投じ、ボウヴェエ(Beauvais)のビショップを其の領地に放還

し、セヴルス(Chevreuse)の女公を本國に送還し、而して女皇はマザリンを擧げて宰相となしぬ。

斯してリシエリュウの政策は持續せられ、彼の理想は凱歌を奏し、彼が建設したる絶對權は廢滅を免れマザリンの事業は啻だ之れを繼行するにありき。蓋し行政上に專制主義を謳歌せんとするには必らず、一般國民の利害を覈査し、諦察して之れに忠實ならざるべからず、然るにマザリンは一〻の未熟なるリシエリュウに過ぎざりき。彼は外に向て樽俎折衝するの大才を有したれど、國の財政を料理するに至りては全く無頓着否な毫ろ許すべからざる不義不正を行ふて顧みる處なかりき。彼は平然官金私消を看過せしのみか、自ら其の率先者となれり、是に於てか國政の弛解財政の紊亂甚だしく、將に國家をして破産の危險に瀕せしめんとせり。大藏大臣デムリイ(d'Emery)又彼に類して如何なる方策手段も行ふて憚らず、一千五百四十八年發布の建築制限令を復興して地主を苦しめ稅率改正令を發布して食料品及び其の他の商品に對する關稅を加增して一般人民を苦しめたり。時恰もネエブルスに於て漁夫マサッチョオ(Masaccio)事件の最中なりしかばパリ市民は直ちに之れを喧傳して彼等又ネエブルス市民の例に倣はんとを決し市民は新稅の納入を拒否し、而してパリ議會はその代辯者となれり。かくて議會と朝廷とは屢〻衝突し、論難したる後二ヶ年間を限りて同稅法を施行する事に議決し漸く事濟となれり。然るに國家の財政は益窮乏に迫り、剩へアウストリア家との戰爭に資する軍費を供給せざるべからず、是に於てマザリンは四〻年間の俸給を債券として發行せんことを各省に要請し同時に議會を除外せんとせり、議員等は却つて己等を侮辱するものと做し、各省と共に同一の責任あることを言明し、かくて有名なる合同法案を議決せり。(The Grand council) (The Court of Aids) (The Court of Accounts) 及び議會は各一人の委員を選定し、而して四人の委員はセント・ルイの評議室に集合して、茲に一商議會を組織し、要求件を二十七〻條に認めて攝政皇后の手元まで奉呈したり。二十七〻條の請願は全く一ヶの革命の旨意を含めるものなりき、其の提案によれば議會は總ての法令を論議し裁定するの權あると同時に不正不義の官吏を告訴するの權を有すと、又王臣はいかなる人と雖も之れを審問せずして廿四時間以上囚監すべからずと。是によりて之を觀るに正しく專制君主政に代ゆるに二百

の官吏よりなる寡頭政治によりて制限せられたる君主政を以てせんとしたるものなり。蓋しパリ議會は名の同一なるに欺かれて己れ又英國議會の役を演じ得べきものと誤想したるなり。

此の時アンガン公(Duke of Enghien)はロン(Lens)に大捷を博しつゝありき、マザリン之れに力を得て一方ノオトルダムに(Tedeum)の頌歌されつゝあるの間朝廷に反抗せる反對黨の知名議員三名を逮捕せり、人民之れを聞くや大に激昂し、直ちに武器を取りて立ち、三時間を過ぎざるに二百の堡壘築造せられ十万の戰士王宮の周を取り捲きてブルウセル(Broussel)を解放せんことを迫れり、同時に議會は又一隊となりて皇后に詣り、禁錮者三人の引渡を強請せり、而かも遂に何等の得る處なかりき。アアン女皇は最期に至るまて彼等と爭ひ、かの請願を飽迄裁許せざらんと欲したれど、マザリン及び英國皇后の切願、忠言再三なるに及び止むを得ず、しばし彼等の意に從ふ事となり、やがて叛徒は直ちに解散し市は全く靜穩常の如くになりぬ。

然るに皇后は此讓歩を以て極めて意氣地なき懦弱の所置と做し、憤懣抑え難く遂に皇子とマザリンとを從へてパリを出で、セント・ゼルマン(St. Germain)に蒙塵せり。蓋しアアン皇后の甚だしく強壓されたること實にセント・ルイ評議會の二十七ヶ條請願に承認せしめられたる時の如きはあらざりき。此の批准の日は恰もウェストフェリアの平和條約に調印を終りたると同日にして、一千六百四十八年十月二四日なり。議會は恰も全立法權を解與せられたるが如く思惟し、自ら國民の選擧代表者たる英國議會の議員と比較せり。

國會の威勢盛なる間宰相マザリンは私に勢力を蓄へ時の至るを待ち、外國との戰爭漸く終るに及び所謂王權を暗殺したる王の臣下の徒黨を撲滅せんと計りぬ。一千六百四十九年一月六日アアン皇后は皇子を伴ふて再ひパリを去り、軍隊を召集し、反徒誅戮の師を起しぬ。一方議會は大貴族等其の麾下に參し、就中有名なるは大コンド公の兄弟なるコンチ(Conti)公、其の義兄弟なるロングヴィル公、ブウヨン公、ロシュフウコウ(Rochefoucauld)及びチュウレン等なりき。

人民は始めより鬪爭を好まず、速かに之れが終末を告けんとを欲せり、偶〻貴族等の意志唯國家を覆すにあるの事實を認むるに及び益〻志を固ふし之れと同時に議

會また貴族等の西班牙と和を講じたるを知るに及ひ其の隱謀を覺り、遂にマシュウ・モオルに命じてマザリンと和を講ぜしめぬ、かくて朝廷は屢〻躊躇の後パリに入れり(一千六百四十九年)。

されど平和は遂に永く保持されざりき、コンド公は弈て自己の保護したる政府を管領せんとの志望を懷き、皇后宰相に屢要請して困憊せしめ以て一方朝廷と疎隔し同時にフロンド黨中の舊員を疎外して憤悲せしめ、且自ら國政を見んとしたる市民を嘲詈して怒らしめ他方には虛榮心に驅られたる血氣の少壯貴族等を懷柔して麾下を聚め、徐ろに謀叛を圖れり。かく輿望を疎外し專ら戰によりて之れの克服せんとしたる猛將に對し人心を收攬して自己の勢力の下に合同せしめんことマザリンに取りては極めて易々たるものなりき。彼は直ちに公及び兄弟コンチ公、義兄弟ロングビルをロオブルに逮捕せり(一千六百五十年一月)。逮捕の報、各地に傳はるや反徒各地に蜂起したるも直ちに鎮壓せられ、ボルドオ降服し、西班牙軍を率ゐてジャンパンに侵擊したるチュウレン將軍はプラスリンに掩擊せられたり。是に於てマザリンは自ら勝利者なりと早信しゴレドのパウル公を皇后の味方に引入れんため約するにカアディナルの法冠を授けんことを以てせり。されど後之れを授けざりければコンド公はコンド黨に加盟して議會の勢威を回復し人心を鼎沸せしめたりしが、一時必要上結黨したるこの二ケのフロンド黨は皇后に迫りて遂にコンド公等を引渡さしめ同時に宰相マザリンを國外に逐放せしめたり。かくてマザリンはコロオレに避退したれども猶實際に於て遠く皇后と佛蘭西とを支配せり。

然るにコンド公は新合同と永く和親を保つ能はざりき、彼謂らく皇后は我を十三ヶ月の間俘囚となしたる贖として必らずや我に授くるに全權を以てせんと、而かも希望は全く空に歸し實權は全く逐放中のマザリンに猶存したり、是を以て彼大に憤悲を燃やし、遂に斷然武力に愬えて之れを獲得し、出來得べくんば玉座をも併せ掌握せんと決意し匆々として南に出でギイアン(Guyenne)を唆かして先つ反せしめ、而して彼友をしてパリ附近に戰を釀さしめ其の間己は西班牙と親交を結ばんことを努めたり。かくてマザリンはパリに還り(一千六百五十一年十二月)當時王黨に歸順したるチュウレンを以て征討軍の總督に命じたり。チュウレンはコンド軍の不意

を襲はんとして軍をロアア(Loir)に進めたれども却つて擊退せらて漸くブリアールに遁れぬ(一六五四年四月)朝廷大に驚駭しこれ又ブウルジイに走らんと謀りたり。されどチュウレン再ひ英氣を回復し四千の兵を以て一万二千の兵に當り遂に敵の進軍を阻碍せり。是に於て皇后の喜悅禁する能はず流涕將軍に謝して曰くげに爾は既倒の中より國家を救ひぬ、爾なかりせば各郡邑の門戸は王のために鎖されしならんと。後兩軍パリに入らんとするに際し、パリ市民は何れにも加擔せず自ら戈を取て兩軍の入市を峻拒せり。かゝれば激戰となりて勝敗久しく決せず、遂にフロント黨の軍包圍せられて將に掩擊されんとするの瞬間オルレアンのガストン、の女マデモアセル(Mademoiselle)俄然コンドのために門を開き之を迎へバスチイルの巨砲を以て王軍を砲擊せしめたり、チュウレンは周章度を失ふて退却しぬ。コンドのパリに入るやマザリン黨を虐殺し、悲慘其の極に達し、折角の彼が光榮も汚血に汚されて永くパリに停ることを得ず、去つてフランダアに退き西班牙軍に投じぬ。

マザリンは王の民望を回復せんため自ら再びパリを去れり(八月九日)是に於て議會と市民とは市の靜穩に歸したるを以て(十二月廿一日)即コレドの去れる三日後母皇に奏請して還御を乞ひぬ。かくて高官の多くは罷免せられ、或は獄に投ぜらるゝあり カアディナルレッツはヴィンセヌ(Vincennes)に幽閉せられコンド公は叛逆の罪に刑せられ、ガストンはブロアに放逐せられたり。後三ヶ月を經てマザリンは執權の全權を掌握してパリに還れり(一千六百五十三年二月)。これぞフロンド黨の終りなりき。此の如き逆徒に世を狹められ王威萎微して光明を沒し反徒の襲はんことを恐れては母皇と共に朝に走り夕に遁れたる流離落魄の感懷は深くルイ十四世の心肝に徹して遂に湮滅するの期かなりき、軈てこの憂愁は彼を驅つて極端の專制政治を歩ましむるの素となりぬ。王のパリに還るや直ちに主權の確立を布告して議會の專擅と僭冒を嚴禁し次で國政の總務に就いて議會の承認を停め、且つ財政の監督權を褫奪せり。

西班牙との戰爭及びピレニイ條約(一千六百五十九年)。

フロンドの亂は鎭定に歸したれど西班牙との戰は猶ほ未だ終らず內にあつてかく紛擾せるの間外に向つてはダンカルク・バアセロナ等を略取したり。コンド公はパリを去りて先づ

ロンの平野より程遠からぬアルラズに籠城せるレオポルド大公爵に合して之れと結びしもチユウレンは彼を襲ふて遂にコンド公をして背進せしめたり（一千五百月十四年廿五日八）。其の後二ヶ年間は只邊疆要塞の包圍ありたるのみにして、兩將互に決戰を交ゆる事なかりき。

前相リシエリュウの宗教上に果斷決行の資を有したるが如く、マザリンは勤王の上に之れを有したりき。リシエリュウはアウストリアに對して新教徒と結べり、彼マザリンはクロムウエルと結びて西班牙に對せり、されば西班牙は兩相のために一度は佛と合し、再び之れと離れ、僅かの間に離合を異にしたり。かくて英のジャメイカを取りカディズの艦船を擊破しつゝあるの間、佛はフランダアの鍵鑰ともいふべきダンカルクを海陸によりて包圍攻擊せり、よりて西班牙救援軍は海に沿ふて之が救助に進軍したるも遂にチュウレンのために擊退され、（一千六百五十八年六月十四日）。ダンカルクは全く佛の占有に歸しぬ、されど後條約の事情によりて市は英國の手に落ちたり。

西班牙はかゝる英佛兩軍の強壓に絶えず、遂に媾和を乞ひ、兩國大使はパリに協商を開きたるも後、マザリン及ドン・ルイ・ド・ハロと佛西の境域を限れる山脈の麓にあるビダッリア河の一小島に會し茲に媾和條約成立し、一千六百五十九年十一月三日調印を了りたり、之れ即ちピレニイス條約なり。此の條約によりて佛はリシエリュウの嘗て征服したるアルトア、サルダヌ、ルウシロン（Roussillon）等を確實に收め、ロオレエンをば總て武備を撤回すべき條件を以て領主チャアルス四世に交付したり、されど領主の之れを肯ぜざるにより又之をも併せぬ。後コンド公は歸國を許されて舊地位に復し、ルイ十四世は西王の長女マリア・テレサと婚儀を結べり、テレサは五十萬クラオンの持參金を携へてルイに嫁し、同時に父王の全相續權を放棄したり。此の結婚は殆ど十五年の久しき、マザリンの日夜考量を凝らし希望を懸けたるものなりき實に一千六百四十五年ウェストファリアの會合に於て彼は、ルイ王とテレサとの婚儀調ふたる曉には吾人は王を推して西班牙の王位に上すことを得べし、假令皇女いかに拒否するも毫も意とするに足らず、只これを阻むものは彼の皇弟あるのみなれば、希望の實現は敢へて遠きにあらざるべしと云へるにても知らる。マザリンは一千六百五十九年最も好妙なる策を以て皇女の棄權を全く

法律上無効ならしめ、かねて又西班牙の漠大なる持參金を全部拂ひ能はざるを知るを以て特更に支拂を確保せしめ、將來ブルボン家が要求をなすに對して一ヶの口實を提供せしむるの素を作りぬ。マザリンは同時に葡萄牙を放棄したり、よりて葡國は佛の救護を去つて英に仰ぎぬ。

マザリンはかく一方に佛西の合同を企つるとともに西王フェルヂナンド三世の亡後(一千六百五十七年)ルイ王を以て皇帝と成さんことを謀りたれど、レオポルド一世位に即くに及びて企圖は遂に成らざりき、されど彼は直ちにライン同盟(一千六百五十八年)を締結し、バアバリア公、瑞典丁抹王等と結びてウェスファリア條約を保維し、此等諸王を佛の保護下に立たしめたり。ライン同盟は(League of the Rhine)佛の勢位を強大ならしむるに大に與て力あらしめたり、こは後年ナポレオンによりて再興せられ、且つ大に其範域擴張せられたるものなり。

マザリンは外に向つては着々成効を博し、列強の間に介して大に國威を宣揚せしめたれども、內治の治蹟に至つては到底同日に論ずべからず、彼は農商業を全く忽緒に附して省みず、海軍の衰頽を思念せず、就中財政策の拙なる、彼の晩年には國庫實に二億五千萬法の巨債を負へり、國庫は此の如くなるにも拘らず、彼の富は實に其の額の半に達したりと。されど彼は之を以て徒に空費せず、多分は悉く文運の保護奬勵に使用せり。哲學家デカアトは和蘭に退隱中彼より年金を受け、史家メズレェは又四千法を給せられ、其の他、巨費を投じて壯大なる圖書館を建設し、或は西班牙、伊太利、日耳曼及びフランダア四國民大學設立の基本金として遺產の內四十萬クラォンを寄贈する等、文藝のために盡したる處甚だ少なからず、猶彼は美術の趣味殊に深くして、伊太利より夥多の繪畫、彫刻骨薰品等を齎らし、同時に俳優工匠等を招し、はじめてオペラを佛に輸入せしめたり。かくて彼は一千六百六十一年三月九日享年五十九歳を以てヴァンセンズに病歿しぬ。

一千六百六十一年に於ける歐羅巴の勢形。

ウェストファリア及ピレニイ條約は佛をして全歐の覇權を握らしむるに至りたれど、此に至るの間內部の紛亂は王權の行使を控制し、國の財源を徒らに涸渴せしめたり。外より一且內に横はれる障礙の除去せられんか、道は直ちに外に向つて坦々として開く。げにやルイ十四世は專らリシエリュウ、マザリンの事業を繼いで之が完成を計り、また賢相

良將を擧げては內治に外征に隆々として威勢を耀かし、加ふるに隣邦の貧弱なるありて頓に彼の權勢を全歐に强大ならしむるに至りたり。以上の事情を會得せんがために以下少しく當時全歐の形勢を窺はむ。

英國は一千六百六十年スチュアアト家再興によりて小康を得たるも、數年ならずして再び紛亂の街となり、王の專制的傾向と國民の自由を欲するの志望とは飽までも相容れず、事實に於て神聖權派と自由派とに兩分し、加ふるにチャアルス二世は自己の無上權を擁護せんがために國家の名譽と利益とを毀損して憚らざりしこと啻に一再のみならざりき。例へば五百萬法を以てダンカルクを佛に賣れるが如き、將た年金を得んがためにルイ十四世に己を賣れるが如き最も醜とする所なり。また一千六百五十二年に發布したる航海條令は、從來オランダの獨占したる通商業を、取て己之れに代らんとするの意を示したるを以て爾來オランダの激昂する處となれり。スコットランドは嘗てゼエムスの登極に際してイギリスと合し、當時は更にアイルランドを加へて大ブリテン及びアイルランド合王國を建立せり。

七ヶの聯邦より成れるオランダ共和國は今や繁榮の頂點に達したり。一千六百四十八年にアウストリア家は遂に其の獨立を承認し、同時にブラバンド、ルキセンブルグ、フランダア等の諸地方を之れに割讓し、又 Scheldt, Mease ライン、及びエムス等の諸河口を領有して儼然勢力を此の地に振へり。更に印度地方には專ら葡萄牙人を移植せしめて已に五ヶの政廳をすら設立し、ジャバを以て主廳とせり。又亞非利加南端の喜望峰は歐洲より印度に至る沿道中唯一の寄港地として、繁華他港を凌げり。自ら海上の主宰者を以て任じたる彼等は他方に於て未知の地を發見して、其範域を擴め一千六百十五年には、レマイル海峽 (Lemaire) を發見し、久しく諸國民の相爭ひし太洋洲の發見も畢竟當時に於けるオランダ人の發見にかゝるものゝ如し。一千六百〇五年より四十二年に至る間其の沿岸に數多の探險隊を出し、就中尤も有力なるタスマン隊はニュウジイランド及び數多の未知地を發見せり。實に當時造船術に於ては如何なる國もオランダと比肩すべきものなかりきのみならず船賃及び水夫の賃銀の低廉なる、他に競爭し得るものあらず、要するに彼等をして是の如き繁榮を來たさしめたる最大要素は實にオランダ國民の特性

とする活動の精神、秩序と勤儉との力に歸せさるべからず。されど一朝にして得たる強盛の地盤、餘りに狹隘なりしため、遂に永く確守する事能はざりき。げにオランダは曠漠たる領土を支配するには餘りに其の領域を細別し、又餘りに人口少かりき。オランダの獨立するや、もと佛の協力に依りてなり、而かも今や同盟國は勢力益〻強大となり、オランダを棄てゝ衰頽の域にある西班牙を選べり、是に於てオランダはルイ王に反抗せんとして、佛を敵とせる合同國を援けたり。然るに西領ネザアランドは將さに頼むべからず、而してルイ王は此オランダの中心を窺ひは、た側面を擊たんとするの慨を示し、危機漸く迫れり。然るは同盟國たる英國はオランダに取りて佛よりも更に禍あるものとなれり、英の長期議會は航海條令を發布してまつオランダの衰滅を計り、クロムウェルは強て英旗の優勝なるを承認せしめたり。

西班牙は嘗て一千六百〇九年二十万のムーア族を追放してより財源殆ど渇れ、加ふるに幾多の敗衂によりて困憊其の極に達したり。もとより全領土を保有するを得たれども、毫も利を齎らさず、却つて重荷として煩惱せり。而して近年ルウシロン・アルトア及び葡萄牙を失ひ、現時滿足に保有するは唯亞米利加の殖民地あるのみにして、本國と其の往來を絶たざりき。されど其の農業は荒るゝがまゝに顧られず、商工業は全く杜塞して殆ど屏息の有樣なるを以て、折角本國に往來する是等殖民地の船舶も本國より持歸る物料とてはあらず。西王フィリップ五世は猶未だ位に在り、而かも廿年間オレバレス公の補佐の下に在位したるのみ。かゝる凋落の時に於て西班牙の誇りとするものは詩人美術家の未だ現存したる一事のみ。されと此等天才の士中ロオペ・デ・ヴエガ (Lope de Vega) ベラスケス已に故人となり、カルデロン、ムウリーリ等は將に過去の人たらんとす。而してコルネユー、デカアトバスカル、乃至プウザン等によりて文藝の最盛期を開きつゝある佛蘭西は已に其の實權を奪取したるが如く、西班牙文運の光榮をも併せて略取せんとしたり。

西班牙ノ衰頽に向ふや葡萄牙もまた運命を共にせり、葡國は敵手たるオランダのために殖民地及び通商を刼掠せれ、ビレニイ條約によりて佛に放棄され、寄邊なきまゝ英を望みてブルボン家のチャアルス五世即位するや直ちに英の腕に縋れり。西班牙に從屬したる伊太利のネエプルス、ミラン、シシリイ、サルヂニア、エルバ

等の島嶼又同じく衰退せり。嘗て前世紀半島を震蕩したる舊教回復の活動も今は全く音響をだにせず、而して僧正連は今や全く浮世の野心に下りて再び天上の事を思はず、さればとて嘗て暴徒の蜂起したるカリグリアノよりポオ河に至る管領地の平和に就いて敢へて好佳の擔保をも得る能はずして止みぬ。リシェリュウマザリン共に屢〻伊太利の諸公を煽して西班牙に對する同盟を組成せしめんとしたるも其の効なく、而してフィリップ四世は庸弱ながらも猶此の間に介して是等諸侯を駕御し、一千六百四十七年のシシリイの反徒を制壓し、また同年ネエプルスに起りたるコッサチョウ等の亂を鎮定せり。さればマザリンの力によりてなし得たる事業はヴァアセルリイをサヴォイ公に割讓せしめ、モデナ公を西班牙と和せしめ、またネエプルス王國の國事犯罪者に大赦令を行はしめたる等なり。されどマザリンの手腕によりて、よし半島より西班牙の勢力を逐驅し、かつ彼が日耳曼に成したると同一の合同を是等諸公の間に結ばしむること能はざりしと雖も、彼は少くとも伊太利に於ける總ての事件に干渉し、且つ、必要に際しては佛は直ちに西班牙に對する同盟を此國に作成し、かつ之に對する行動の手段を茲に發見することを得たりしなり。

かかる太平のため二公は各〻特殊の方面に大なる利益を獲ることを得たり、即ちサヴォイ公チャアルス、エマヌエル二世は此間專ら精鋭の軍隊を編成するに努め、ダスカニイ公フェルヂナンド二世は窮理考察に全力を竭したり、之がために十七世紀に於てフロレンスは科學の淵叢となれり。ガリレオの高足として、また晴雨計の發明者たるトリセリイは恰も此時に物故し(一千六百四十七年)、幾何學者ヴィヴィアニイは將に是れより大名を博せんとせり、而して有名なる Academia del Cimento は此時に創設せられたるなり。

ヴェニスは半島の東北を領して伊太利の騷擾には係らざりき、蓋し彼が利害は全く爰にあらずしてアアキペラゴ及びアドリア海面に存したれはなり、されば土耳其との衝突屢あり、一千六百四十四年に之れと開戰し、役中カンディアの包圍尤も有名なり。これによりてヴェニスは猶其の愛國心勇氣、忍耐を失はざる事を示したり。此間、ゼノアに就ては錄すべきものなし、蓋しレヴントの全商業は全然ヴェニスの掌握に歸したれば、ゼノアは遠く西班牙、亞非利加の海岸に出てて通商を壟

斷したればなり。三十年戰爭は日耳曼をして全く衰亡の地に失墜せしめ、爾後何等の威力なきものとなり了れり。皇帝に代りて現れたる多數の小諸侯等は朝廷を維持し大使を派遣するがため無益なる出費に苦しみ、人民は君主の虛榮に資する費用の收歛に殆と疲憊し盡くし、今や餘財なし。是に於て小君主等は其の同盟を賣買し、かつ軍隊をも賣りて辛くも自已を支持したり。かくてウェストファリア條約によりて彼等は獨立を保證され、ライン同盟によりて多くは佛に從屬せり。一千六百六十三年のラチスボンの國會はまた永久的のものとならんとしたり、實に此の國會こそ帝權に蒙らしむる最期の打擊なりき。

アウストリアは三十年戰爭の創痍稍癒えて徐ろに其力を恢復し、私にまた禍心を包藏せり。一千六百五十八年レオポルド一世父王フェルデナンド二世に次で立ち、一千七百〇五年に至る迄位に在り、其の在位の間別に光彩を放つもの一もなかりしと雖も、內は材幹ある良將の補佐により外は列國の援助あるありて王家に取りては最も多幸なりき。後同家系は分れて三支となり、一はマドリッドにある西班牙のそれ、他は一千六百七十三年に合したるタイロル家及びスチリア家なり。之れと同時にブランデンブルク家(Brandenburg)別に興起しつゝありき、當家は一千六百十八年にプロシアを略し以てキョンニグスベルクに在る魯亞西人に對抗せり。フレデリック、ウィリアムは既に大選公の稱を受け、其の子は自ら稱してプロシア王と云へり。

瑞西は十三の聯盟郡(カントン)と數多の同盟國より成り、バアン尤も强盛なりき。嘗て十六世紀に活躍したる驍武は今や藏、さめて僅かに諸國の募兵に應じつゝ其の餘勢を保つのみ。

瑞典は三十年戰爭の勝利に依りて日耳曼の三大河ウェゼル、エルベ、オオデル等の地を占し、且つフィンランド近傍にて一千六百四十七年露國より割讓したるカレリア、イングリアを領し、更に又一千六百三十五年ポオランドの放棄したるエソオニア及びリヴォニアの二地を併有せり。されば バルチック海は全く瑞典の領海となり、北歐の覇權は久しくガスタヴァス、アドルファスの掌握に歸したり。

アドルファスに次て其の女クリスチナ位に即きぬ、王女又頴敏にして赫灼たる國威を失墜するとなかりしも、遂に執政の繁を厭ふて一千六百五十四年位を其の甥

チャアルスガスタアヴァスに禪りぬ。王は天性學を好みかねて勇武絶倫の聞あり、たるが、即位の當時專らポオランド王ジョン・カシミルの侵略を防ぐに全力を竭せり後王は至る所に利益を占領し、一擧ウルソウ市を奪取し、ジョン王をシレシアに走らしめぬ。然るにポオランド人は其の首都を回復せんがため、五万五千の大兵を以て市の廓外に進擊し來り、奮鬪三日に及びたるも遂にチャアルスの寡兵に擊破され、市は全くチャアルスの掌裡に落ちたり。されど大勝は隣邦の大に震駭する所となり、日耳曼皇帝、丁抹王プロシア王は相合してポオランド救援の同盟を作り以て彼の勝利を放棄せしめたり。されどチャアルスは復讐として丁抹を伐ちロスキルドの和約によりてハランド等の地を割讓せしめ、サウンド海の自由航海權を承認せしめたり。チャアルスは此等の成効によりて野心いよ〳〵增長し、眞に丁抹を克服せんと欲し、和約訂結後數月を經ざるに、再びコオペンヘエゲンを圍みぬ。市は頑强に防守し、オランダは其の艦隊をサウンド海に派し、アウストリア、ポオランド及びブランデンベルヒ等又兵を丁抹に出すに至り、其の强壓に絶えずして遂に圍を撤したり。斯て間もなくチャアルス殂せしにより再び兩國和議をコオペンヘエゲンに結び、次で又典瑞ポオランド、オリバに和約し、(一六六〇年)翌年カアヂス條約によりて瑞露間の平和を結びぬ。

之を要するに瑞典は是等の諸訂約によりて國威を毀損せずしてかの不均衡の苦痛を脫するを得たり。即ち是等諸條約によりてブレキンヂ、ハルランド、スカニア等を領して南方の境界と成し、ボオハス(Bohus)ジエムトランド(Jemtland)及びヘリダリアを得て那威海岸上の境界を成せり。更に波蘭よりリボニアを得、且つイングリアにカレリアの大部を併せ保持し、以てフィンランド海の全權を掌握したり。されど繼起したる戰亂によりて、さらぬだに貧弱の國民は益〻貧擔の重に懊み、全く農工の產出物を缺乏せる同國は戰費を償ふの餘地なく、殆んど困疲の極に達しぬ、これがために一旦獲得したる北方の覇權を遂に乏しく支持する能はざるに至れり。

而かも戰亂の最中に於て已に革明の萠芽北歐の天地に發生したり、而して其の結果は實に吾人の最近に於て見る所のものなり。當時丁抹は貴族の勢力最も盛んなりき、フェルデナンド三世は僧侶市民等の助力を藉り以て其の權力を粹碎し而、

して王家世襲の宣言を布告せり(一六〇六)。之れによりて獨裁君主政を確立し、爾後一千八百三十四年に至るまでこれを持續せり、されど世襲王統の始祖日耳曼人なりしは丁抹に取りて最も不幸なるものなりき。始王は國の政治を擧げて同國人に任せ、一人も丁抹人を官府に採用せずかるが故に日耳曼語は全く丁抹の官語となれり。げに丁抹は猶今日に於てすら其の感化の拔く可からざるに惱みつゝあるなり。

嘗て北方の雄鎭として威權雙ぶものなかりしポオランドはめぐり來れる衰運遂に支へ難く、其の覇權已に他に移りて第二位に下り、今や將さに第三位に落下せんとしつゝありき。今も猶領土はカアパシア山脈よりバルチック海に及びオーデル河よりDnieper及びウォルガ河の水源に廣がると雖も無政府的制度はたその主權選擧の制度は外侵に對して到底國防を確固にする能はず。而して前にチャアルスガスタヴスが成したるものを今や露國は着々として完成せんとせり。露國は一方瑞典、ポオランドクウルランド及びセミガル等のためにバルチック海の出路を塞がれ、他方ポオランドの最も制御に苦める屬民コザック族及び韃靼人のために黑海の門戸を鎖されたり。是に於て露國は廣漠不毛のシベリアに出づるの外其の出路を求むる能はざりき。されど一千四百七十六年ノブゴロド共和國イワン三世のため滅ぼさるゝや、はじめてバルチック海幷に北極海に出づるの門戸を開き遂にアストラカンの韃靼人を滅ぼして(一五四四年)一千五百一世紀前高加索山系に達せり。一千六百六十七年アンドルッソー條約によりてポオランドよりスモレンスク、チェルニゴウ(Tchernigow)及びウクラン(Ukraine)等を收め、以て西下の第一歩を作れり。ミカエル、フェオドロウィチの創設したるロマノフ朝は千六百十三年後露國に君臨し、一千七百六十二年に至りて滅しぬ。

イワン三世は十五世紀の後半に際して自族に食封を與ふる法を廢し、以て政治の統一を計り、之れと同時に貴族には此の法を存置せしめて其の勢力を分割し、薄綽弱ならしめたり。十六世紀に於てイワン四世は殆んど十五年間貴族をして抑壓に馴れしむる事に全力を注ぎ、人民に加ふるに暴虐其の度を過し、ために鬼王てふ名を受くるに至れり。かくて一千五百九十二年勅令を以て農民を全然土地の奴隷たらしめ、主人及び居所を變ゆることを禁止したり。土耳其は當時全く前代の

宗教上はた軍事上の情熱を喪失したれど、猶東歐に在て嚴然第一位を占めたり。トランシルヴァニア公は其の隷屬となり、テメスワア(Temeswar)の領土及び匈牙利の大部分より黑海の全海岸は悉く土耳其の領有なりき。而して亞細亞方面の領土はエリヴンよりバグダドに廣がれり。ヴエニスは之れと幾度か辛き爭鬪を敢てせり。一千六百六十年には匈牙利にアオストリアを擊破し、六十三年には墺軍の將ノウホイゼル(Neuhoesel)土軍の爲めにプレスベルヒの城壁に斃れ、ヴィンナ危殆に頻しき。爰にルイ十四世はセントゴオタルドの戰にアウスリアを援け、(一千六百六十四年)カンディアの包圍(一千六百六十七年)にヴエニスを助けんがために精鋭なる援軍を送りてその大征服の序幕を開きぬ。

第二十一章　ルイ十四世の治下

佛の中央集權幷にコルバルトとウヴォア　マザリンの死後、ルイ十四世は斷然宰相を廢し、自ら親しく一日八時間政務を聽き、而して彼が裁決を仰ぐにあらざれば如何なる事件も執行することを許さざりき、實に彼は生涯を終る迄一日も之を缺ざりき。君主にして彼の所謂「王の商買」てふ事を彼の如く理解しかつ實行したるもの殆んど稀なり。彼皇子に訓諭して曰く、君主たる者は、事業をなして以て世に臨むと同時に、又事業のために君臨す。若し他を成さずして之れを欲せんか是れ神に對して不虔忘恩の所爲たり、又人に對して非義不法の所作なり」と。更に彼をして卓然傑出せしめたるものは、親しく統治の大權を掌握するの時に於て、既に自己の政策に關して一ヶの統一したる意見を把持したると是なり。げにや彼は無限の權力を以て國家に臨みたるのみならず、又君主獨裁說を佛に設立したる始祖なり。彼以爲く、王道は神の設くる處なるが故に王權は、即ち神權なり、君主は此土に垂迹したる神の權化なり、而して補佐の將相は豫じめ天命によりて機緣相感應したるものなるが故に、時ありて君主權の幾分を分たるゝ事あるなりと。此の如くして彼は往〻王權に陰霽を起さしむる自由を絕對に禁止したり。また其の郡縣中獨立の政廳を有して自治制をなしたるものは多くは廢止し、偶〻バルガンデイ、ブロヴンスの如く保存したるものも只閣臣の命令を執行するに止まりたり。更に市町等に殘有したる自由は全部破壞し終り、從來の市長の職を廢して

世襲官廳となし、而して最も高價に購ふ者に與えたり。是に於て自治の生命は全く窒息し了んぬ。かくて佛は悲しむべき境遇に陷れり。其の後一世紀を經て辛くも專制君主より政治を恢復したりしと雖も而かも其の時に於て佛を導くの豪膽なる幾多の理論家を有したれど、過去を顧みて將來を整齊するの實際家は一人も有せざりき。蓋し確固不動の政治的自由を得んとならば必らずや自治制の自由を基礎として建設されざるべからざれはなり、げにかくの如きは對岸の英國に於て保持せられまた發達せられたるものなり。

ルイ王下の議會は全く一ヶの裁判所に過ぎざるものとなり、貴族は只戰場に出で血を流し、或は凱旋の際鳳輦に隨行する一介の武辨に過ぎざるものとなり、僧侶はいよいよ王に信頼して最早ルイの惱とならずなりぬ。而して人民は軍隊、警察及び苛酷の法律によりて容易く威壓せられたり、まして數百年の封建制度の後を受けたる際なれば却つて內部の平和を與ふる一勢力下に歸服しき。之れを要するにルイ王が治世の根本要旨は國の全力を自己一人の掌中に收容し、之れを以て國家の利益、就中自己の利益に充てんと欲するにありき、さればこの中央集權政の極端なる、佛の商工業と政治的生活はもとより、その道德的生命をも併せてその下に集中せしめたり。是に於てか佛は全く自己の生命によりて生存せずして、死活を一政府の生命に委ねたり、されば歳時惡弊積重し、一朝此の全能力萎微したるの日は又實に万事休するの時なりき。げに此の大國民は今や一君主の隆退と其の運命を共にせざるべからざるに至りぬ。されど幸多き治世間は人民その自由を失ひたるに比敵すべき平安と幸福とを享受するを得たり。已に述べたるが如く、ルイ王もまた自らこの無限の權力を持する以上國民に對して重大の責務ある事を自知したればなり、彼の所言に朕は己の可からんよりも、先づ臣民の幸安を宸念す、朕が掌握する統治の大權は特に汝等の福址を增進する上にのみ其の力を致すとあるにて察せらる、されば彼は大官に富貴榮譽權力を授くるや、必らず彼等を誡めて曰く汝等假令一瞬時たりとも衆庶のためによくこれを竭せと。佛蘭西の政務最も活躍周到なりし事、實に當王の治下に於けるが如きは未だ稀なり。而して其の政治史は殆んど二人の大臣、セルバルトルウヴォアの傳記に盡く。

コルバルトの威權の大なる實に現時の五大臣の位地を兼ねたり、彼はフウケの

死後直ちに其の後を繼て財務の長官に任ぜられ、兼ねるに宮內、農工商、海事、內務等を以てしたり。抑も〳〵佛國の財政はサヅイ以來全く紊亂して殆んど混沌の境に陷り、國債四億三千万法に達したり、是に於て彼は先づ財務官の非行を發くために大檢擧を行ひ、其の結果科金一億一千万法を得たり。又彼は豫算案の創設者なり、此の時に至るまで國庫の收入如何に關せず之れに就いては何等の商議すら經ずして經費は隨時に支出せられたり。是に至り彼は年度の豫算表を製し、歲入歲出を豫じめ定めたり。當時地租は專ら借地人平民等より徵集し、一千六百六十一年には其の額五千二百五十万法の巨額に達せり、從て此等納稅者の勢力自ら强大となりブロント黨の爭亂の頃には自ら貴族と稱し或は冥加金等によりて貴族の榮爵を購ふもの少からず、ために當時貴族の數倍加せりといふ。コルバルト之れが抑制策として從來の租稅負擔額を殆ど半額に減少し、後敕令を發布して、最近三十年間貴族に推擧せられたる者の特權を廢馳せり。之れがために貴族の門地を剝がれたるもの實に四万の多きに及べりと。更に從來一般に課したる冥加金を廢し、代ゆるにVillain taxi(從僕稅)を以てし、且つ珈琲、烟草、骨牌、當籤等に新稅を課し、或は從來の稅率を增加し、以て歲入の增加を計れり。要するに彼は專ら歲入の增加を計ると同時に年金俸給等を減少して國庫の充實に勸め、且つ從僕稅を輕減して下層民の負擔を輕からしめたり。

屢〻傳へられたる如く、コルバルトは決して工業のために農業を犧牲に供したる事なし、彼は多數の家族に從僕稅を免じ、農具、道具及び家畜の差押を禁じ、また馬屬繁殖の一法として種馬法を劍定し、亞非利加、丁抹等の種馬と盛んに交尾せしめ一方日耳曼、瑞西等の種馬を輸入して大に馬種の改良を計り、最上の種馬を有する者には特に賞與を與えたり。或は又沼澤の排水を命じ灌漑森林法を發布して農林の發達改良に努めたり、最後の法規は現に今に至るまて尙ほ行はれつゝあるなり。

嘗てヘンリイ四世の銳意努むる所ありたるに拘らず、佛の工業は猶遲々として幼稚の狀態を脫せず、殆ど一として外國に仰がざるものなかりき。ライム(Rheims)の商估に生れたるコルバルト深く之れを嘆じ、自國の製品を以て自國の需要に充てしめんとし、外國產に對して重稅を負課したり。こは實に保護制度の創始にして、幼稚の工業に取りて必要缺く可からざる法策なれども、一旦發達したる時には

却つて害あるものなり。かくて彼は隣邦の工業上の秘訣を購ひ、或は探知し、熟練なる職工を招致して、頓に製作物を增殖せしめたり。又一方に於ては保護金を與へて作品を保管し、各商には相應の資金を貸與し、同時に其の工業及職工には莫大の賞金を與へ、寸時も其の奬勵を怠らず、他方に於ては教會に請ふて十七日の休日を廢して無用の時間を節し、工業界の異論を裁定するためには仲裁局を設置せり。如上の結果一千六百六十九年には羊毛のみにて四萬四千二百臺の織機と六萬の職工とを有したりと。されば、セダン、ルウヴィエ等の毛織工場に比敵するもの當時歐洲中一も見出し能はざりき。其の他葉鐵、甲鐵、陶器、鞣皮等嘗て外國より輸入したるものを自國にて製造し今や全く他の供給を仰ぐの必要なく、絨氈はペルシア土耳古等の産地を凌ぎ、金銀を縷めたる刺繍又里昂等に産し、特に鏡類帷帳の類は數等元産地を駕するに至れり。コルバルトは從來道路橋梁等に設けられたる通行税を全然廢止する事能はざりしも、之れを十二郡に制限して內國關税を制止し、輸出税を輕減して葡萄酒、ブランデイ等の輸出を奬勵し、或はダンカアク、マルセエエユ等を開放して自由貿易港とし、後者には海上保險會社の設立を許容せり。尙ほ

市場を創設して、外國品の佛國輸送を勸迎し、同時に殆んど敗壞したる往還を修覆し、或は新造したり。是等の事業中特に大事業と認むべきは、バルカンディの運河鑿開の工事とす、セド港を以て其の一端としッウルスを以て他端とし、以て地中海と太西洋とを聯結したり、工事は一千六百六十四年に起工せられ、八十一年に至るまで間斷なく續行せり、此の工事を實行せるは有名なるリチエにして、アレドレオシイの設計にかゝる、費用七百萬法、日々一萬二千の職工を使役したるなり。

是に於て商業は急速の進歩を來したり。かゝる發達の機運と共に一千六百六十五年に商務局を設置し、ルイ王隔週に親しく臨御し、各地にも同樣の設備ありて、最も經驗に富める商人三人を選出して宮廷に伺侯せしめ、將に爲さんとする事業に就いて王及びコルバルトに彼等の意見を奏せしめたり。

從來海上に於ては外國人、佛國全商業の主公となり、オランダ人は毎年四千の船舶を以て自國の製作品及び諸國の商品を佛の港灣に輸入し、また佛國製の絹糸、葡萄酒、ブランデイ等を歐洲其の他の遠國に輸出せり。是に於てコルバルトは此の方面に於てもまた佛の興隆を來さんことを計れり。嘗て一千六百五十八年フウ

ケエの長官たりし時、自國の港灣に出入する外國船に對して一噸につき五十スウの碇泊稅を負課したり。コルバルトは此の稅法を續行し、加ふるに自國船舶の出入及び遠海航行に耐ゆる船舶の建造には奬勵金を授けたり、之れと同時にオランダ及び英國の商會に倣ふて五大會社を設立したり、即ち六十四年に東西印度會社を、六十六年に北方及びレヴント會社を、七十三年にレネガルに設置したる等是なり、而して是等に許すに壟斷權を以てし、皇族貴族富豪等をして株主たらしめたり、遂に六十九年には敕令を以て、貴族にして海運業に從事するも毫も不相應の事にあらざる旨を發布したり。

從來佛は植民地としてキャナダにアカディアを、ギアナにカイエヌ(Cayene)を有し、其の他マダカスカル及び印度に二三の工場を有するに過ぎざりき。是に於てコルバルトはまた諸方面の擴張をも企て、先づ百萬餘金を以てマルチニック、ガダロウプ、セント・ルウシア、グレナダ、其の他十數の地を購ひ、またセント・ドミンゴ島に占據して近海を掠略せる自國の海賊船に保護を與へ、或はカイエヌ、キャナダに新植民人を送派し、或はニュウフォンドランドを奪取し、或は有名なる探險家ド・ラ・サアルの發見したるミッシッピイ河の沃野を占領し、亞非利加に於ては、オランダゴオレエを割取してマダカスカルの東方海岸を所有し、亞細亞の方面に於ては、印度會社をスウラット、シヤンダナゴア等に設立し、後又ポンヂセリイに增設せり。而して此等植民地の商業を確保せんがために各港灣を開鎖して外國船艦の入港を嚴禁したり。

マザリンは嘗てリシエリュウの開設したる海軍に就いては顧みる所なかりしを以て其の艦船殆んど衰滅の境に彷徨したりき。コルバルトは、植民地の擴張と共に其の再興を企圖し、先づ殘存の戰艦を修覆すると同時に新に瑞典ポオランド等より數多の兵船を購入し、船渠をダンカルク、ハアブル、ロッシュフォオル等に建設したり。嘗てヘンリイ四世はツウルン港を、リシエリュウはブレスト港を築造したるも、當時は未だ大港たるの觀を呈する能はず、ブレスト港は一千六百八十三年ヴウバレのため包圍攻擊せられ、甚だしく破壞せられたることあり。コルバルトはニメエゲン條約後ツウロン港の改築に巨額の資金を投じて世界最良港の一となせり、げに彼が此の港に建造したる浮船渠は優に百隻の兵船を容るゝに足るといふ。

コルバルトは海員補充策として海事籍を創設し、之れを以て海濱に住する人民

に或種の特權を與へ、其の代償として必要の場合には、水夫應募の義務を負はしめたり、而して募兵は年齡と家柄とによりて諸種類に區分せられ且滿期退役者には年金を給せられたり。此の制は今日尙現存す。一千六百七十年の調査によれば海夫三萬六千と註せられ、八十三年には七萬七千八百六十二人の多數に達せり、同時に船艦また增加し、一千六百六十一年には戰艦僅かに三十九隻なりしもの、七十八年には一百二十隻となり、後五年には一百七十六隻と算せり。九十二年王の所有にかゝる戰艦百三十一隻、フリゲット艦百三十三隻、其の他の船舶百〇一隻と註せらるゝに至る。一千六百七十二年には一千の貴族を以て海兵團を組織し、以て精練なる士官の養成に力め、他方に於ては砲科水路測量科との學校を設立して大に海事の發達を謀れり。

コルバルトは上の如く國威を外に宣揚せんことに鋭意力むると同時に、內に於ては立法行政の改善を計り、また文藝の發達を奬勵せり。彼は度量衡の制度を改正し、從來莫大の收入を國庫に致したる官職の買賣を廢弛し、僧侶の數を減少し、以て有要の業務を奬勵したり。彼の効績中尤も多とすべきは委員會の開設なり、會は政府の評議員と請願委員とより成り、各大臣又は大法官の監督下、或は王の直裁下に國家の大事を討議したり。六法の完成は實に是等商議の結果なりとす。即ち一千六百六十七年發布の民法勅令を以て、中世紀の不公平なる施制を廢止して正義の實施を嚴達せり、六十九年には灌漑森林法を改正し、七十年には刑法の改正令を出して苛酷なる拷問機の使用幷に豫審收檻の規定を制限すると共に重罪犯人に對しては殘忍なる古法を襲套し、罪過と刑罰とを均齊ならしめんことを勗めたり。七十三年發布の商法は特にコルバルトの光榮を加ふべきものなりとす。八十一年の海上法は直ちに歐州各國の通商法となり、猶今日の海上法の根基となれり。八十五年の黑奴法は佛國植民地に於ける黑人に制裁を加へたり。要するに如上の法令はジャスチニアン帝よりナポレオンに至るまで久しく着手せられたる法典編纂の大事業を構成せるものなり。此等の法令中今尙現存して有効なるものあり、就中海上法の如きは現時の佛國通商法その騰本とも見るべきものなり。また此等法規の實行を監督するがために請願委員は屢議會に召集せられたり。

彼はまた文藝の奬勵を怠らず、一千六百六十三年文學院を設立し、六十六年科學

専門校を創立し同年音樂學校を、七十一年工藝學校を建設したり、或は美術研究者を奬勵して羅馬の美術に留學せしめ、或は外國語學校を建設して專ら東洋語の研究を鼓吹し、他方に於ては王立圖書館を擴大して巨万の藏書珍異の書寫等を藏せしめ、マザリン圖書館を公開し、動物園を擴張する等知識の啓蒙に勗めざる處なかりき。

ルイ王は内にこの賢相を推擧すると同時に外に向て秀才英靈の士を求むるに吝ならざりき。コルバルトの言に王は汝等の主權者にまします、されどかねて汝等の恩惠者たらんことを希求し玉へり、之れを以て王は我に命じて汝等に爲替手形を下賜せしめたまへりと。王の眷顧を蒙りたる者の内にて最も有名なる二三を擧ぐれば、ヴァチカンの博學者アラッジイ、マッフエイのメロオプの先驅をなせる伊太利第一流の悲劇作家グラジアニイ伯、史紀編纂家ヴォシアス(Vossins)オランダの天文家ロオメル、ハイゼンズ、其の他フロレンスの有名なる數學者ギギアニイ等なりとす。

コルバルトの競爭者ルウボア侯は一千六百四十一年に生れ、十五歳にして乃父の官に入りて秘書官と成り、久しく軍政の學を研究し、此の方面に於ける鋭腕はコルバルトを凌駕せり。ルイ王の親政を採るや彼は實際に於て軍務大臣となれり、素より名實共に就職したるは一千六百六十六年なりしと雖も。彼軍政を握るや軍隊に大改革を行へり、尤も募兵策としては從前の任意徴募法を襲套したりと雖も、よく嚴肅なる紀律と制裁とを加へて其の弊害を掃盪したり。彼が改革の重なるものを見るに一定の制服制を施行し、各聯隊により軍隊服の色を變じ、各隊に一々特異の標章を附けしめ或は縱隊進軍の紀律を實行し、或は從來の鎗隊を廢して銃劍に代え、或は渡河用として銅製の舟橋を用ゐしめ、或は兵器彈藥糧秣等を常備する倉庫、兵營乃至衞戍病院等を建造したり、是等は皆從來未知の組織にして、全く彼の新設にかゝるものとす。また工兵隊を新設し、メッツ及びストラッスブルヒ等に砲科學校を設立し、或は步兵中に擲彈兵の一隊を選拔し、或は驃騎隊を組織し、又富有の子弟のため一種の兵學校を起して士官候補生の一隊を組織したり。彼はまた一定の陞級規定及び檢閲制を施行して軍隊組織に一新紀元を劃せしめたり。此の陞級法施行せらるゝに及びて貴族の門閥制打破せられ、彼等は等しく軍務に

服して徐ろに陞級を俟たざるべからざるに至りぬ。尚軍功を表彰するために勳章授與の規定を設け、一千六百九十三年始めてセントルイの勳章實施したり。げに後年佛國がフランダアとの戰に十二万五千の兵員を動かし、ボオランドとの戰爭に十七万を、西王後位繼承戰爭に四十五万の大兵を動員し得るに至りたるは一にルウボアが如上の大功に因據す。

フランダア戰爭（一千六百七十二年）。ルイ十四世愈〻大權を掌握して政を親うするの時、（一千六百五十一年）歐州列國の諸王も將た列國民もルイ王の威勢に比敵する者なく、佛國と比肩するものあらざりき。彼が對外策の第一行動は、いかに彼がその大野心を包藏するか、いかに自己の威嚴の大なるかを自覺したるかの意をほのめかすものなり。公使の席次に就いて兎角の議論ありたるに拘らず、西班牙の大使は遂に佛國大使の次席に位せざるべからざるに至れり。王の使節として羅馬法皇に使したるクレエキ公が法王の衛兵によりて辱を受くるや、ルイ王は直ちに莫大の賠償金を得たり。アルキイル(Lgiesr)幷にチュニスの海賊佛の商業を妨ぐるや、ボウフォルト公は之れを懲治して、彼等の囚へたる基督教民を解放せしめたり。葡萄牙は西班牙に對して佛の援助を請ひ、佛將のためにブラガンザ家を王位に即かしむる事を得たり。更にルイは當時オトマンに脅壓されつゝあるレオポルド帝に六千の援兵を送りて勝利の功を二分せり。猶ヴエニスを援護してカンディアの防禦に力を分ち、一千六百四十五年より六十九年に至る間五万の佛兵を同島に送れり。佛の猛將ボウフォルト侯此役に斃る。

土耳古の敵を援助したるは一方より見れば功譽赫々たるものなれども、他面より觀察せば實に佛の傳說的政略の放棄なりき。ルイは土耳古との合盟を廢棄し、直ちに新教同盟を逸脫せり、蓋し彼はかくして、嘗てチヤアルス五世幷にフィリップ二世の雄圖を繼ぎ、自ら舊教の首領となり、はた獨裁君主として歐洲の覇權を握らんと欲したるなり、さはれ此の大野心は嘗て西班牙に衰滅を招きしと同じく、又彼に大禍害を齎らすものなりき。

フィリップ五世の薨去はルイ王をしてはじめて干戈を取らしむるの機會を與へたるものなり。抑もブラバント家は其の家憲として父者の死後は相續者として初

妻の子を以て之れに充つるを掟とせり、然るにルイ王の妃マリア、テレサはフィリップ五世の長女なり、而して現西王チャアルス二世は後妻の子なり、是に於てルイ王は王妃の既得權を名として西領ネザアランドを要求せり。蓋しルイはライン河を以て佛の境界となさんと欲したるなり。此の際ルイ王を助けて西班牙を孤立の位置に立たしめたるは實にルウヴアが外交の妙腕大に與て力あるなり、彼は先づオランダを說きて、王は只ネザアランドの一部を要求するのみにして、毫も大禍心あるにあらざる旨を辨じてオランダの疑惑を解き、同時に葡國の幇助を收め、又英國をして嚴正中立を宣言せしめたり。更に彼はライン同盟の諸侯を誘ふて日耳曼皇帝を緘默せしめ剩つさへ彼と一ヶの秘密條約を訂結し、西國征服後收果の分配を約せり。かくて全く孤立したる西班牙は勢の蹙迫する處到底佛の侵入を阻止する能はず、一千六百六十七年諸壘多くは陷り、西班牙の命脈殆ど縷の如し。大勢を見たる海強國ははじめてルイの野心容易ならざるを看破し、互に相結びて西國救援の同盟を作れり、是ぞヘエグに盟約を擧げたる有名なる三國同盟にして、其の與國はオランダ、瑞典、英吉利是れなり。ルイ王は同盟の干渉によりて最初の企畫を果す能はず、エクス・ラ・シャペルに平和條約を締結せり、條約の結果ルイはFrancheComtéを西國に還附し、己はネザアランドに於て占領したる十二の堅城を保留したりき（一千六百六十八年）。

オランダは久しくルイ王の妬憤する所なり、特に府尹ジョン・デ・ウィット、三國同盟を主唱して彼の素志を齟齬せしむるや、愈〻彼を惡む事甚だし。加ふるに商業殷盛にして國富み、自主自由を以て建設したる共和國の存在は、彼が專制君主的性情に抵觸すると甚だしく、必らず討伐せんことを期せり。是に於て彼は久しく佛の援助を仰ぎながら茲に際して背反するは甚だしき忘恩不義の所行なりとてオランダを責めぬ。是より先コルバルトは佛國商業の一大勁敵として太だ之れを惡み、オランダの船舶を自國の海岸より驅逐し、自國の商人を奮勵して自國產の物資を却つて彼に供給せしめたり。オランダは自衞の策として佛國の製產にかゝる物資に重稅を附加し、以て彼を阻止せり（一千六百七十年）。當時コルバルトは一使臣に告げて曰く、「オランダの此の擧は極めて大膽なる所置なり、されど貴下はやがて彼等の後悔すべき日あるを見らるべし」と。當時の軍務大臣ルウボアヌ私かに思へらく、

西領ネザアランド克服を完逐せんとするには先づオランダを屈服せしめざるべからずと。かく財務、軍務、兩大臣の意、相合致し、王また素より好む所なれば直ちに此の計畫を嘉納せり。されど戰爭は佛國に取りて最も不利愚劣の策なりき。蓋し之れがためにヘンリイ四世及リシエリュウの苦心して組織したる新敎同盟を根本より破壞し、且つ當時佛國に取りて、最も利害の關係厚き唯一の仇敵をその大打擊より逸せしのみか、之れに依りて奪取し得たる州國は佛の邊疆より隔離して、到底久しく保有し得べきものにあらず、また必要なる土地にもあらざればなり。

時にルイ十四世は好妙なる外交を以て容易に三國仝盟を破壞せり、先づ些少の苞苴を賂ふて瑞典を脫盟せしめて舊誼を溫め、英王チャアルス二世に二百万法を與へて己を助けしめ、更にライン同盟の諸侯伯及び日耳曼皇帝を招誘して緩急呼應せしめたり。斯の如くして前に西班牙を孤立せしめたると等しく今又オランダを全く孤獨ならしめたり。戰爭の初期に於てオランダ屢〻不利なりき。共和黨の主領デ・ウィッ兄弟はナッソウ家を恐れて從來軍備を理めざりき、さればオランダは佛の猛將チュウラン、コンデ等の指揮に幾度か驍名を轟かしたる精兵拾二万に對して僅に二万五千の武備薄弱なる烏合の兵を以て當らざるべからず、戰の數は已に決せり、佛國の進む所眞に戰にあらずして一種の散步に過ぎざりき、彼等の到るや城門は開放されぬ、チュウラヌ麾下の一士官大將に請ふて曰く、我に五十の騎士を借さんか直に二三の要塞を陷れんと或日四兵卒劫掠の途中途を迷ひ、計らずMuydenに到着しぬ、之れを見たる吏尹の驚愕甚だしく、直ちに都門の鍵を彼等に渡さんとせり、されど後、後續隊の來らざるを知るに及び、彼等を泥醉せしめて城外におきぬ。アムステルダムの陷落實に瞬間に在りき、蓋し都城の內外を擧げて氾濫の中に置しむるの鍵鑰はMuydenに在りたればなり。

佛軍は今やアムステルダムを去る數里の地に迫れり、ジョン・デ・ウッドは和をルイ王に請ひしも直ちに排拒せられぬ。然るに都府の守備頑强にして佛軍容易に肉薄するを得ず、稍逡巡の色あり、之れを見たる防禦軍は再び勇氣を回復し、輭派のウッットを殺し、主戰派オレンヂ公ウイリアムを擧げて總督に任じぬ。公は決然として立ち、四方の堤防を決して滿目悉く水を湛えぬ、而して久しく英佛艦隊のために苦しめられたる水師提督ロイタアは其の艦隊を城下に集めぬ。かくてオラン

ダは其の最期より救はれたり、佛軍は徐々に退却し、從來占領の諸壘を放棄してライン河に退きぬ(一千六百七十二年)

ウイリアムはこれを好機として對佛同盟を組織せり。英王チャアルス二世は同盟に加入するを肯んぜざりしも、國會の反抗を受け、遂に餘義なくオランダと和議を結べり、かくてルイは瑞典を除くの外一ヶの與國を有せず、西班牙アウストリア、日耳曼及びオランダを敵とせざるべからざるに至れり。當時ルイは僅にマエストリヒト及びフランチ・コムテを領したるのみ偶々ネザアラレト・アルサスの兩地先づ討佛の兵を擧げぬ、ルイは前者にコムデ將軍を遣はし、後者にチュレンヌ將軍を派して之れを激擊せしめたり、チュレンヌは行、諸侯伯の地を剽略し、小部隊を以てラインの疆域を防守せり、されどモンテクカリの大兵殺倒し來るに及び遂に支ふる能ずして退却し、かくて六萬の皇軍はアルサスに冬營を張れり。チュレンヌ此の時新鋭の援兵を得てサスバッハに戰ひ敵彈の殪す所となり、其の兵又大半斃れ、遂に大敗して遠くライン河を渡りて退却したり、(一千六百七十五年一月)。コムデ將軍はセネフェに激戰して勝敗相半ばせり。されど海戰に於ては佛の提督デュウケスン三度シシリイ海岸に西班牙艦隊を擊破し、オランダ艦隊の援助ありしに拘らず遂に之れを塵殺し、オランダの名將ルイタアはアゴスタの海戰に戰死し、同時にデ・エストレ d'Estrées 將軍はオランダ殖民地を刼掠し、勢威大に揚れり又陸戰に於てはクレエキ將軍前年コンサルブラックの敗衂をコォケルスベルグ(Kochersberg)に復讎して、大勝を占め、(一千六百六十七年)リュクセムブルグはまたカッセルに勝利を博し、ヴァランシエヌを攻略し、オランダの形勢日に窮迫し、加ふるに英王チャアルス二世はかねての盟約を履行せず、遂にオランダをして媾和の已み難きに至らしめたり。かくて千六百七十八年ニメエゲンに和約を結び、これによりてオランダは再び領土を復するを得たり。爾來ルイ十四世は列强の覇權を掌握し、殆ど彼等をして維命維奉せしめたり。西班牙は再び戰費を倍償し、フランチ・コムテ・アルトア・ヴランシェエス・ブウシェエン(Bouchain)コンデ・カムブライ・イフル等其の他數多の市邑を割讓し、日耳曼皇帝はフィリップスブルグを得んためにフライブルクを佛に割與し、瑞典は私に佛を援けたる効によりルイ王は一千六百七十九年セント・ジェルメエン・レエイにブランデンブルグ及び丁抹と和議を訂結し、之れに因りて嘗て彼等の刼掠したる侵地を瑞典に還附せし

めたり。爾來佛蘭西は愈〻全歐の實權を握り各國其の威令に慴伏し、國民は皆王の武雄を頌して「大王」の號を奉りぬ。

斯の如くルイ十四世は利益と光榮とを加へて治世の第一期を終りぬ、此の間フランダア・フランチ・コムテの二大都市其の領土に屬せしめられ、一方フランダアは佛の北疆を固め、且つ佛の工業上に一勢力を加へ、更にフランチ・コムテは東邊の要鎮となり、ウェスファリヌ條約の實果を此の地に收めたり。

平和期に於けるルイの征服とナント敕令の廢止（一六八十五年）。

メエゲン條約後佛國は益〻領土擴張に努めたり。他國の武裝を解除して軍隊を撤回せるの間、佛國は却て之れを堅實にし、平和を利して克服を恣にしたり。彼は所謂複合法院なるものをメッツ、ブリザク及びビサンソン等に建て、最近條約に依りて獲得したる諸市邑に嘗て從屬したる領土の有無を調査し、苟くも之れあるものは悉く復舊せしめ、かくて之れを合せて版圖に加へしめたり、之れによりてアルサス、フランチ・コムテ等に嘗て隷屬したる地は擧げて佛の領土となりぬ。バラチン撰候、日耳曼諸侯伯、幷に西班牙王等相合して抗議を提起したるも兵力に強壓されて効なく、ルイは却て廿有餘の諸市邑を得たり、此等諸市の內重もなるものはサレブラック、デュウ・ポント、リュキセンブルク、モントベリアア及びストラスブルグ等とす、就中最後のものはアルサス已に佛に歸したるも尙ほ自由を稱したるを以て遂にルウボア將軍二萬の兵を以て攻略し、後ブウバンは之れに一大防禦工事を加へてライン河邊の金城鐵壁の重鎮となしたり。

此の他佛國の色彩に化せられたる地少からず、嘗てボウフォルトのため膺懲せられたるベァバリアは近來再び海上剽略を始めたり、よりてデュウチンは老軀を冒して之が征討に向ひぬ時に、無名の一水兵ベルナアド・レノウドなる者の發明にかゝる一種の砲艦此役に大効を奏し、エルヂァ再び砲擊せられて殆ど壞滅し（一六八十一年及び一六八十三年）チュニス及びトリポリイス同一運命に陷り、かくて間もなく地中海上海賊船の隻影を止めざるに至れり。

當時ゼノア人はエルヂアのために兵器彈藥を製し、西班牙のために四隻の戰艦を建造しつゝありき、ルイ王は彼等に製艦の禁止を命ぜしが、聽かざるに及びヂウケス艦隊をツウロンより回航せしめ、猛射してゼノアを脅威し、遂にドオジ（ゼノア

市の主裁者)をしてヴェルサイユに到り和を請はしめたり、(一千六百八十五年)。

ルイの勢威の旺盛なる、時の法王をすら屈せしめ、殆んと一々の候伯の如く之れを遇したり、其の頃羅馬駐在の列國使臣は居住地既得權を濫用して市の四分の一を罪人避難所たらしめんとせり、茲に於て時の法王インノセント十一世は此の弊害を矯正せんと欲して改革を列國君主に諮りたるに、獨りルイ十四世はかねて法王權に不滿を抱けるものから、斷乎として之れを聽かず、却って權利保護を名としてラヴァルヂンに八百の兵士を附隨せしめて派遣したり、是に於て葛藤を生じ、法王は直ちに使臣を破門し、ルイはアビグノンを占領せしめたり(一千六百八十七年)。爾後久しく反目したりしも、インノセント十二世立つに及び和議調へり。されど法王の憤懣は容易に氷解せず、其の影響は一千六百八十八年の戰爭に及べり。此の役の基因はコロオンの大監督選擧に關して佛の候補者ファステムブルク僧正九に對する十五の多數を以て當選したるに拘らず、法王彼を許さずして却て小數者たるバヴァリアのクレメントを叙任したるにあり、ルイはかゝる不當の任命を憤り、直ちに兵を派して、ボォン、ヌウス、カイゼルワアス等を奪取したり(一千六百八十八年)。之れに加ふるに彼が日耳曼に對し、義姉オルレアン公主の名義を以てパラチネエトの一部を要求し、又伊太利に於て半島の北部を號令せんがためにカセルを購入したるにも因るなり。

平和の時に於てすら以上の如き領土略取、不遜暴悖、及び彼が大野心は大に歐洲を震駭せしめたり。既に一千六百八十一年に日耳曼皇帝、西班牙、オランダ及び瑞典等、オレンヂ公ウィリアムの首唱の下に、ニメエゲン條約保維のために秘密同盟を組成したるも、未だ一人も彼に對して反擊を敢てするものなく、且つ八十四年八月ラチスボンの議會は二十ヶ年の休戰條約を締結して佛王のルキセンブルグ、ランドウ、ストラスブルヒ、其の他一千六百八十一年八月一日までに併合したる諸市邑を領有するを承認したり。されどルイの大望愈增長するにつれ、彼等は益〻緊密に結合し、一千六百八十六年七月九日遂にアウグスブルヒ同盟を訂結したり。サヴォイ侯は次年之れに加盟し、英國は八十九年同じく加盟せり。

かゝる危急の秋に際して佛國の內情は如何。げに國勢隆々威權赫灼たる最中に於て、已に內奥には微かに困倦、不安の聲響きつゝありき。從來虛日なかりし戰爭に對する巨額の費用、平時十五萬の兵士を備ふる費用、及びヴェルサイユ、ルウブル等